

---

# 生き様の在り処

闘魂クーラー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生き様の在り処

### 【Nコード】

N4472N

### 【作者名】

闘魂クーラー

### 【あらすじ】

高杉マサキは道場からの帰り道に意識を失う。

そして目覚めた先に見たものはこれまでの日常とはかけ離れた光景だった。

ただその目を流されるままに生きてきた青年が生きる意志を成長させていく（予定）の物語。

異世界迷い込みのテンプレート（主人公チート）をいくお話です。初小説なので暖かく見守ってくださいると幸いです。

## ―第一話― 日本では無い

「マサキ、お前がこの道場に來始めてからどのくらいになる？」

正座した 高杉 マサキ に向かい合い座っている御剣が問う。とある古ぼけた古武術の道場、道場主である御剣とただ一人の門下生である高杉しかない。

「始めて訪れてから約18年になります」

「そうか、もうそんなに立つか…」

御剣は目を閉じ、少し過去を思い返す。

長いようで短かった。最初に会ったとき、これ程の時を共にするのは想像もしなかった。

「マサキ、お前は強くなった。厳しい鍛錬にも良く耐えている  
だがな、お前には足りないものがある」

「足りないもの…ですか？」

御剣の言葉に高杉は訝しみながらも答える。

「そつだ、自分でも気づいているんだらう？」

お前には信念がない、自分の意思が無い  
言われれば言われるがまま、流れ流されるまま、まるで雲だな」

御剣の言葉は高杉を的確に捉えていた。目標も目的も何も無く将来への希望も無い。ただ生きていくだけで淡々と生活を送る日々。周

困にも興味が無いから人に積極的に関わろうとはしない、そのため恋人はおろか友達すらいなかった。

ただ、その日その時を流されるまま孤独に生きてきた。

「信念のない力はただの暴力だ、意思の無い力はただの凶器だ

信念が無ければ正義も悪も無い、それは自身を傷つけ周りを傷つける。

マサキ、お前の空虚な心の先に何かがあると言うのだ？」

高杉は自分を見据え言葉を紡ぐ御剣から視線を外してしまった。

その言葉は自身を責め立てるようで居心地が悪かった。

「目を逸らすな

…直せと言ってすぐに直せるようなものではない、……だが難しい事でもない

それは心の持ちようなのだよ、マサキ」

少し視線を和らげ、御剣はさらに言葉を紡ぐ。

「いつか譲れないものができる、何と言われようと自身の意思を貫かねばならぬ時が来る

それが生きるといふ事だ」

御剣は高杉の顔を見続ける。あの幼子がこんなにも立派に成長したことに、うれしいような寂しいような複雑な感情が胸を過ぎる。

「強き意志があればどのような困難にも立ち向かえる

どれほどの高い壁でも乗り越えられる

意思のある力は自身だけでなく多くの人々の助けとなれる

…お前にはそれができると、そう信じているよ俺は」

そう言い御剣は少し息を抜くと稽古の終わりを告げた。

「ありがとうございました」

一礼し道場を後にする高杉の背を見ながら御剣は呟く

「達者でな、マサキ」

その呟きは高杉には届かなかった。

御剣は愛弟子との別れを何となく察していたのかもしれない。

「…う」

鬱蒼と木々が生い茂る森の中、高杉はうつ伏せに倒れていた。今しがた気がついたとばかりにのろのろと起き上がる。朦朧とする意識

を振り払うように軽く頭を振ってみた。頭はぼんやりとしているが、徐々に自分は倒れていたのだと理解した。

――ここは…

少しはつきりした意識を周囲に向ける。薄暗く木々に囲まれていることがわかる。

高杉は少し呆然とし、冷静になるように努めた。なぜなら意識を失う前、全く別の場所にいたからだ。

暗い夜道を道場から帰宅する途中だった。ひどい立ち眩みに襲われ、まずいと思った矢先に意識を失った。

なぜ自分がこんな所にいるのか、考えたがやはりわからない。それにどれだけ意識を失っていたのか。木々が鬱蒼と生い茂っているため薄暗いが、陽は昇っているようだ。

高杉は自身の身体を弄り怪我が無いことを確認した後、近くに落ちている自身のバッグを拾い中身を確認する。気を失う前と同じで特に何も盗まれてはいないようだ。ポケットから携帯電話を取り出し画面を開くが圏外と表示されている事に溜息をついた。

とりあえずここがどこなのか確認しようとした時、どこからか人の叫び声が聞こえた。高杉はその声に驚きながらも人がいる事に安堵し声のした方向へ走り出すが、すぐに身体に妙な違和感を覚える。

――身体が軽い？

思わぬ加速に戸惑いながらも木々の合間を縫って走る。森の中をありえない速さで走っていることに驚きを隠せない。迫り来る木々を

器用に避けながら自分がその気になればどんどん速度が上がっていた。

さすがに身体を確かめたくなり一旦止まった。力が溢れるような高揚感があり、身体能力が異常に高まっている事を感じる。試しに落ちていた石を拾い力を込めると粉々に砕けてしまったのだ。

——なんだこれは、どういうことだ？

高杉は身体の変化に戸惑いながらも軽く古武術の型を行ってみる。これまでにない鋭い突きに蹴り、試していないが威力もありそうだ。多少身体に違和感があるが、馴染んでなくなるのも時間の問題に思えた。

高杉はほんの少しの間自分の手を見ながら放心したが、今はそれ所ではないと気を取り戻すと声のした方向へ急ぐのだった。

目的地が近くなると怒号と鈍い音が断続的に聞こえてきた。そして漂ってくる血の匂いに異常を感じた高杉は気配を消しながらゆっくり近づいていく。

——これは…少し様子を見てみるか

自分の背丈ほどもある茂みに身を隠しながら葉の隙間から様子を伺うと、見えた先には驚くべき光景が広がっていた。

空想上の生き物、鶴のような巨大な獣をカラフルな髪の色をした3人の男達が囲んでいた。しかも囲んでいる男達は剣を構え、騎士の鎧のようなものを纏っている。

映画か何かの撮影かとも考えたが目に映る緊迫した状況がそれを打ち消した。生々しく周囲に広がっている血痕。ビリビリと肌に突き刺さるような緊迫した空気、獣を睨み付け対峙している男達の後ろでは二人の負傷者を必死な形相で手当てをしている女性がいる。

状況はかなり切迫しているようだ、男達の方は負傷者がいることから逃走もできないでいるようだった。

――どうしたのか…

戸惑いながらも割ってはいるべきかそれともこのまま立ち去るべきか高杉が逡巡したとき、ふと御剣の言葉が頭を過ぎる。

いつもの高杉なら自分に関係が無く、手に負えない事は見てみぬふりをして関わらないことが多い。しかしこの時は少し前まで御剣と話していたせい、立ち去る事に罪悪を覚えた。

――先生

深く息を吸い、ゆっくり吐いた所で覚悟を決めた。自分が助太刀した所で状況が好転するかはわからないが、見捨てることもできない。

気を引き締めると高杉はどうすべきかを考えた。獣を仕留める事は難しい、というか不可能だ。自分が囿となり引き離すことで、彼らが逃げる為の隙を作れば良い。



――奇襲を掛け、奴を引き付けるだけの初撃を与えれば

いささか無謀にも思えるが高杉にはなぜか自信があった。倒すまでとはいかずとも相応の打撃を与える自信が。それは子供の頃から御剣に叩き込まれた古武術、そして…

――今のこの身体能力なら、不可思議な事だがやれる気がする

高杉はバッグから手甲を取り出し装着する。御剣から皆伝の祝いに送られた高杉の相棒だった。

細かな細工が施され気品さえ感じさせるその姿は静かな存在感を放ち見るものへ迫ってくる。

高杉は手甲をひと撫ですると獣が隙を見せる瞬間を伺う。息を殺しその機会が来るのを待った。

しばらく続いた睨み合いを終わらせたのは獣だった。獣は赤髪の男オーウェンに勢いよく襲い掛かる。裂けんばかりに開いた獣の大口からは牙が覗き、噛み殺そうと突進してくるその迫力は恐ろしいものがあった。

しかし迎え撃つオーウエンは冷静だった、接触しようかとするその瞬間 横に飛び一重で獣を避けるとすぐに体勢を整える。

避けたオーウエンに再度襲い掛かるうと獣が注意を向けた時、その隙について青髪の男が切りかかった。しかしその奇襲に獣はすぐさま反応した、剣を振り上げた青髪の男を前足で横殴りにしたのだ。すでに攻撃の動作に入っていた青髪の男は避けることができない、受けたその衝撃はすさまじく青髪の男は吹き飛ばされた。

「シグルツ！！」

オーウエンが叫ぶ。青髪の男、シグルは吹き飛ばされ周囲の木に打ち付けられるとそのままぐったりと気を失ってしまっていた。

「シグルさん！」

負傷者の手当てをしていた女性がシグルの名を叫び駆け寄ろうと腰を浮かす。

「やめるフィオナ！」

オーウエンが再び叫ぶ。しかし女性、フィオナはそれを聞かずシグルに駆け寄ろうとしていた。

そして不幸にもその行動が獣の目に止まる。新たな獲物に目をつけた獣はフィオナに向かって勢いよく走り出した。

「ラグ！フィオナを守れ！！」

オーウエンはもう一人の男、ラグに怒鳴る。しかしラグは恐怖で身体が竦み動けなくなっていた。ラグは顔を真っ青にし身体が震えているのが傍目にもわかる。

「くそ！」

オーウエンは舌打ちし獣を追いかけた。だがここからでは間に合わない、オーウエンの胸に絶望が広がった。

高杉は総崩れの様相を呈してきた状況をじつと見つめていた。最後の最後まで機会を伺うつもりだった。そして獣が女性に向かって走り出した時、チャンスが来るのを確信した。

フィオナが高杉の目の前にいたのは不幸中の幸いだった。獣は凄まじい勢いでフィオナに接近し襲い掛かる。

「…ヒッ」

あまりの恐怖に言葉がでない。獣のギラギラとした目、涎を垂らしながら見せる獰猛な牙、そして今にも勢いよく振り下ろさんとする太い前足の鋭利な爪、間近に迫った恐怖に思わず目を瞑りフィオナ

は自分の死を覚悟した。

しかしその衝撃がフィオナに降りかかることはなかった、高杉は獣が攻撃時に隙を見せたその瞬間、茂みから飛び出し渾身の一撃を獣の横っ面へ叩き込んだのだ。

不意の攻撃を受けた獣は勢いよく吹き飛ぶ、あまりの衝撃に獣の生命がこの時に途切れた事は誰も知らない。

予想外に吹き飛んだ獣に追い討ちを掛ける為、高杉は走り出す。獣が巨木に打ち付けられるのと同時に高杉は飛び蹴りを獣の胸へ見舞った。反動で後ろに飛び着地するとすぐさま叫ぶ。

「剣を！」

状況の急激な変化に唯一ついてきていたオーウェンは素早く反応した。

「こいつを使え！」

オーウェンが投げた剣を受け取ると高杉は腰だめに構え獣に向かって走り出す。ヤクザ映画なら往生せいやーと叫んでいただろう。走ってきた勢いそのままに獣の喉笛に剣を突き立てる。さして抵抗もなく剣は獣に吸い込まれ噴出した血が高杉に降り注いだ。

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

高杉は荒くなつた息を整えながら獣が絶命したことを確かめると剣を抜いたが、それは折れていた。仕留める事は難しいと考えていたがこの結果は僥倖だ。

「……しかしこれは……」

高杉は獣の死骸を見て愕然としていた。このような獣がいること自体驚きだが、それ以上に自分の技の威力に驚いている。獣の顔は原型を留めていないほど損傷し、蹴りを放った胴は貫通し内臓を露出していた。

確かに高杉は古武術を修めているがこの威力は異常だ。

――力の加減には細心の注意が必要だな…

高杉は小さく溜息をついた。

――な、なんなの、この人

フィオナは急激な変化に頭がついていかず、背を向けている青年を呆然と眺めていた。死を覚悟した自分が生きている、あの青年がどこから現れたのかわからなかったが気がついたら青年が剣でトドメをさそうとしているところだった。

青年の後ろ姿を眺めていると振り返ったので顔を見してみる。返り血に濡れた姿、長目の前髪から覗く鋭い目、その容貌にフィオナは息を呑む。

――怖い

その姿にフィオナが抱いた感情は恐怖だった。

オーウエンは警戒しながら黒髪の男を見つめている。周囲は異様な雰囲気にも包まれていた。血塗れとなった黒髪の男が放つ圧倒的な存在感。あの魔獣を瞬く間に倒した戦闘能力。只者じゃない…心臓が早鐘のように鼓動し高まる緊張感に喉が渇く。無意識の内に腰に収めているナイフに手が伸びていた。

「お前は、誰だ？」

オーウエンが警戒心を前面に出し問うた。

問われた高杉は答えに詰まった。自身の状況を説明する言葉が思い浮かばなかったからだ。高杉はどう答えるべきか考えながらも

「……言葉通じるんだ…」

そんな今更なことを思っていた。何も答えない高杉にオーウエンは強めの口調で再度問い詰める

「お前は何者だと聞いているんだ！」

高杉はじつとオーウエンを観察していた。

「……あの化け物といい、この赤髪鎧男といいなんなんだ？」

日常から遠くかけ離れたなんとも言えない状況にこれは夢だろうかとも高杉は思った。しかしあの化け物を殴り殺した時の生々しい感触、そして自分にこびりついている血の匂い。それら全てが現実だと高杉の五感に訴えかける。

これ以上黙っているのもまずいかと感じた高杉はとりあえず口を開くが正直どう言えばいいのかわからない。

「…通りすがりだ」

と出た言葉は答えになってなくオーウエンの不信感をさらに深くした。

「通りすがり？こんなところをか？ふざけるな！

この森は立ち入りが制限されている、あの魔獣のせいだな」

「魔獣？あの化け物のことか？なんだあの生き物は？！」

魔獣という聞きなれぬ言葉に高杉は反応するが、オーウエンはその言葉を一刀両断した。

「質問しているのはこちらだ！お前は何者だと聞いている」

高杉はぐっと押し黙った。自分の状況を正直に説明してもあの様子では信じてもらえろとは思えない。

「…こつこついつた時に答えられそうなのは……迷子か？

うだうだ考えていても仕方ないと思いきやとうとうどうにもなれと半ば開き直った感じで高杉は答えた。

「本当にたまたまこいたんだ、そしてあんたらの声を聞いてここに来た

立ち入り制限など知らなかったんだ」



「……」

オーウエンは何も答えず今にも襲い掛かりそうな目で高杉を睨みつけていた。

高杉は小さく溜息をつきどうやって警戒を解けばいいのかと思ったそのとき、ふと自分が手にしている折れた剣を思い出した。

「……取り合えず、これは返すか」

膠着しつつある状況に多少の面倒くささを感じた高杉は、剣を返す事をきっかけに話しを進めようと考えた。

「これ、あんだのдар？少し汚れたが返すよ」

そう言いながらある程度近づいたところで高杉は折れた剣の柄の部分を差し出す。

オーウエンは急な高杉の行動に警戒を高めながらも剣と高杉を交互に見ながら、って言うか折れてるだろ、と心の中で抗議しつつも剣を受け取った。

「あんたが警戒するのわかるが」

危害を加えるつもりなら助けたりなんかしない、それに怪我人もいるんだろ？

警戒するなどは言わないが過度に反応するのはやめてくれないか？」

それを聞いたオーウエンは黙ったまま考えるそぶりを見せた。しばらく二人の間に沈黙と睨み合いが続く、もっとも睨んでいたのはオ

ーウエンだけだったが。

ーー確かに、奴の言う通りか

味方とまではいれないが対立を望んでいるわけではなさそうだな

このまま睨みあっても埒があかんし…

オーウエンは警戒は解けないが高杉をある程度信用することにしたようだ。高杉のインパクトが強すぎてそもそも自分達は危機を救ってもらっていた事を忘れていたからだ。自分たちの戦力でマンティコアを撃退することは難しかった、いやそれどころか壊滅の危機に陥っていたのだ。目の前の黒髪の男が現れなかったら自分達は今頃マンティコアの胃袋の中だったろう。

「わかった、そもそも危ない所を助けてもらったのはこちらだったな  
失礼な態度を取ってすまなかった」

そう言い素直に謝罪をしたオーウエンは続けて言った。

「話をしたい事は色々あるが、先に負傷者の手当てをさせてくれ」

高杉がその言葉に頷くのを確認したオーウエンは呆然と成り行きを見守っていた仲間に指示を出しに行った。

「悪いな手伝ってもらって、大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

オーウエンは横を歩く高杉に気遣いの言葉を投げるのに対し高杉は何でも無いように答えた。

一行は帰還するために森の中を歩いていた。動けない負傷者が二人いたためオーウエンと高杉が背負い、その二人のあとを消耗の激しい三人が着いて歩いていった。負傷者の治療と何やら魔獣の解体？らしいことを終えた後、軽く自己紹介をしすぐに森を出るため移動したのだった。

オーウエン達はローゼイリス大公へ仕える騎士だと名乗った。赤毛を短く刈り込んだ男が小隊の隊長でオーウエン・ベルティク。青髪の男はシグル・タイネーブでもう一人の男がラグ・ベラクド。そして淡い桃色でショートカットの髪をした女性はフィオナ・シェフィールドと名乗り、フィオナだけはオーウエン小隊の所属では無いらしく今回は助っ人として同行していたとのことだ。

高杉も名乗ったあと、この周辺の地理に明るくないことをオーウエンに話し同行させてもらえるよう頼んだのだった。

「それで、お前はなんのためにあそこにいたんだ？」

オーウェンは歩きながら高杉に聞く。

「何の為と言われてもな、別に目的なんかない  
本当にいつのまにか迷い込んでみたいなんだ」

高杉は正直に答える、実際目的も何もわけがわからない状態だったからだ。

何の目的も無く森を彷徨い、高い戦闘能力で魔獣を殴り殺す。不審者そのものであったが悪い奴ではないみたいだとオーウェンは考えていた。それはこれまでの経緯もそうだが、まだ少しか話はしていないがこちらを害しようとは考えてない事はわかったからだ。

「冒険者…ではないのか？」

冒険者ならば森にいても不思議ではないといった感じでオーウェンは言った。しかし高杉には突然冒険者と言われてもなんの事だかわからない。

「冒険者？なんだそれは？」

オーウェンは冒険者を知らないのか？と驚いた。しかし高杉を見ると本当に知らないように思えたので説明を始めた。

冒険者とは冒険者ギルドに登録している者達のことである。依頼主の依頼をこなし生活の糧を稼ぐ者、一攫千金を狙う者、名声をあげる事を目的とする者など様々な人が登録している。未訪地の探索、ダンジョンの攻略、稀少物、財宝の搜索から傭兵や護衛、魔獣の退

治、犬の散歩、畑の手伝い、迷子探しなどなど基本的には何でも屋と言った意味合いが強いらしい。また、生産者が所属するギルドもあるそうだ。

他にも高杉は様々なことをオーウェンから聞いた。高杉達がいた森、ログリーの森と言うらしいが、森に魔獣 マンティコアが住み着きオーウェン達が討伐に来たこと。本格的な討伐は後日だったが、先行して森の様子を見た際に不意を衝かれたらしい。

そして魔獣とはこの世界には多く存在する凶暴な獣である。高杉が倒したマンティコアは中位種の上に位置する。それを不意打ちとはいえ、一人で倒すのは冒険者の高ランク並だとオーウェンは言った。

高杉は魔獣退治は冒険者の仕事では無いのか？と素朴な疑問を口にした。

「騎士も魔獣退治はするさ」

先に冒険者に依頼してみたのだが低ランクしか集まらなかったらしくてな

それにここら辺は交通の要所だから影響もでかい、それで俺達にお鉢が回ってきたわけだ」

そして、オーウェンは高杉の反応を伺うように聞く。

「冒険者や騎士団に興味があるのか？」

「いや、よく知らないから」

高杉のそっけない様にも聞こえる答えだが本当に知らなかったんだなとオーウェンは妙に納得した。なぜなら騎士団と冒険者は知らぬ

者はおらず誰もが憧れる職業だからだ。

「あれ程の技量を持つていながら、もったいないな……」

とオーウエンはそんな高杉を横目に見ながら呟いた。

そして現在高杉達がいる場所についてだがフォゼルティア帝国　ローゼリス大公領だとオーウエンは答えた。だがそんな国名など聞いた事がない高杉は内心激しく動揺した。まさかと思っていたことがより確信に近づいていたからだ。

そんな高杉の内心な気付くはずもなく、あまりにも物を知らない様子に訝しむオーウエンに　高杉は動揺を押さえながらひどい田舎から出てきたばかりだと言って苦しそうにごまかすのだった。

「……悪いひとじゃないみたい

自分の前を負傷者を背負い歩く青年を見ながら、フィオナはそんな事を思っていた。最初見た時は恐怖しかなかった。けれど、青年は負傷者の手当てを手伝ってくれた。今だって歩けない人を背負ってくれている。回復魔法を間近で興味深そうに覗いてきたのには困ったけど。

そんな事をフィオナがつらつら考えているとオーウエンの声が聞こえてきた。

「出口見えてきたぞ、もう少しだ！」

無事に森を出られたことに一行の顔は綻んだ。

森の出口に着くとそこに繋がれていた馬に負傷者を乗せていく。高杉は近場にある川を見つけるとオーウエンに血を流してくると声を掛けた。

川につくと上着とシャツを脱ぎバッグからタオルと新しいシャツを取り出す。道場の帰りでよかったと高杉は思う、着替えを何枚か用意していたからだ。顔と頭を洗ったあとタオルを濡らし血を拭き取った。火照った身体に澄んだ川の水はとても気持ちがよく動揺していた心も落ち着くようだった。

しかしそれは気のせいですぐにこれからどうなるんだろうか…とそんな不安が湧いてくる。高杉はもう一度それを振り払うように顔を洗ったのだった。

その後、馬に乗って近隣のカラン村へと向かう。カラン村に近づくとつれオーウエン達の顔は明るくなっていったが、それとは別に高杉は少し落ち込んでいた。

——ああ、本当に日本じゃないんだ

目に映る風景を遠く眺めながらそう心の中で呟いていた。

## ―第二話― カラン村

カラン村は町と言われてもおかしくない規模だった。交通の要所として栄えたこの村には多くの人々が集まる。

カラン村に入ると高杉は驚きの連続だった。

建物は中世の西洋に似ている、そして行き交う人々はやはり西洋系の顔立ちの人が多く様々な色の髪をしていた。

中には空想の世界でしか見たことのなかった

獣の耳や尻尾をつけた猫っぽい人や犬っぽい人達、それにドワーフ？までいる。

高杉が猫の耳と尻尾をつけた綺麗なお姉さんに見とれているとそれに気づいたお姉さんはぱちつとウインクをする。

高杉が照れながらもぎこちなく手を振っていると、フィオナが少し怒ったような声で言った。

「タカスギさん！早くいきますよ！」

そんな声を聞き高杉は慌ててフィオナの後を追う。

現在フィオナと高杉の二人は素材屋へ向かっていた。



少し前、カラン村に入ってすぐにオーウエンは  
シングルとラグに負傷者を医者に見せる様指示を出していた。

オーウエンは高杉の元へ来ると持っていた革袋を差し出した。

「お前の取り分だ」

高杉は疑問に思いながらも革袋を受け取る。

「これは？」

「マンティコアの牙と尻尾だ、売れば結構な値段になるだろう  
悪いが頭部と肝はこちらがもらったがな」

そう言いオーウエンは頭部が入っている袋を親指で差す。

高杉は文無しだ、金になるならばとありがたく頂戴する。

中身を確認している高杉をじっと見つめた後、オーウエンは聞く。

「それで、お前はこれからどうするんだ？」

「これから？」

「ああ、俺達は明日にでも出発してネアビュリス城塞都市へ戻る。

まあ、負傷者とその世話に一人くらいは残していくがな」

高杉は貰ったばかりの革袋を見せながら言った。

「とりあえずこれ売ったあとに仕事を探すよ」

「仕事？冒険者か？」

「いや特に決めてない、何か紹介してくれるとありがたいんだが」  
するとオーウエンは少し考えた後に言った。

「ならば俺達と一緒に来るか？ 城塞都市はかなりの大都市だ  
ここより仕事もあるし、何か力になつてやれる事もあるかもしれん  
それに騎士団にすればお前に褒賞をだせる」

オーウエンの言ってる事は行く当てのない高杉には魅力的だった。

「それはありがたいな、お言葉に甘えさせてもらつよ」

それを聞いたオーウエンは頷くと

「宿はまだ取つてないだろ？俺達の使つてる宿に来るといい

フィオナに素材屋と宿を案内させよう」

そう言いオーウエンはフィオナを呼ぶ。

「タカスギを素材屋と宿へ案内してやってくれ、俺は村長へ報告に  
言ってくる」

「は、はい、わかりました」

「それじゃ、また後でな」

オーウエンを見送ったあと、フィオナは少し怯えたように高杉へ挨拶をした。

「あの、よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ」

そんなフィオナに気づかず高杉は答えた。

大通りでは露天が所狭しと広げられており、見たこともない食べ物が数多く売っている。

これは本当に食べられるのだろうかと思えるものすらある。

にぎやかな雰囲気の中、珍しそうに見ている高杉に露天商の男が声を掛けてきた。

「兄ちゃん、そのクスの実は丁度食べごろだよ！甘くてうまいから買っていきなよ」

物欲しそうに見えたのだろうか、高杉はそう思うと少し恥じる。そんな高杉を気にせず、露天商の男は畳み掛ける。

「こいつは採れたての上に十分熟してるから甘さがたっぷりだ

それがたったの2銅貨！どうだい？かなりお得だろ？」

勢いよく言う露天商の男にたじろく高杉。

先を歩いていたフィオナは高杉が露天商の男に捕まっているのに気づくと

引き返して来るなり高杉の手を引っ張りながら言った。

「いい加減にしてください、タカスギさん！」

「す、すまん」

高杉は謝りながらフィオナに引つ張られるままに歩く。

フィオナは高杉の手を引つ張りながらぷりぷり怒った声でさらに言う。

「さつきからふらふらして、何がそんなに珍しいんですか?!」

フィオナがぷりぷり怒るのも無理は無かった。

なぜなら先程のを含め、高杉がはぐれそうになったのは六度目だったからだ。

普段好奇心の薄い高杉も見るもの全てが目新しいとなるとやはり違ってくる。

「いや、珍しいものばかりだったから、もうはぐれないようにするよ」

そう言うと高杉はついフィオナの握った手に軽くきゅっと力を入れた。

するとフィオナは驚いたようにバツと手を離し高杉の方へ振りかえる。

そんなフィオナに対し高杉がきょとんとしている

「き、気をつけてくださいね!」

とフィオナはすぐに前を向いてずんずんと歩いていく。

高杉はどうしたんだ?と思いつつもフィオナの後を追った。

――最初はおとなしい娘だと思ったけど、そうでもないんだな

高杉は横を歩くフィオナをちらつと見ながら思った。

最初は会話などほとんどなかった。

何やら妙な緊張感をフィオナが発しており高杉も話しかけずらかったからだ。

それに高杉もおしゃべりでは無く、どちらかと言うと無口な方だった。

しかしあちらこちらへふらふらする高杉を何度か連れ戻すうちに遠慮がなくなってきた。

手にかかる弟の面倒を見る姉のような気分になったのかもしれない。実際には高杉の方が年上なのだが。

親しくなれることは悪いことではないかと高杉は思うとフィオナに話しかけた。

「素材屋ってどんなところなんだ？」

「……」

しかしフィオナは返事をしない

まだ怒っているのだろうかと不安になった高杉は再度話しかける。

「あの、フィオナさん？そろそろ機嫌を直してほしいんだが……」

ご機嫌を伺うような高杉の声にフィオナはやっと反応する。

「ふう、…素材屋さんはその名の通り色々な素材を扱ってるお店です  
普通の薬や魔法薬の素材だったり、武器や防具の素材も扱ってる  
んですよ」

高杉はとりあえず機嫌を直してくれた事にほっとした。

そしてフィオナの説明に沸いた疑問を口にする。

「魔法薬？魔法なんてあるのか？」

ひよっとしてフィオナさんが森で使ってた不思議な力は魔法なのか？」

高杉は森で見たフィオナの不思議な力を思い出した。

あの森で高杉は不思議な光景を見た。

負傷者に手をかざし真剣な表情していたフィオナ

治療しないのかと近づいた高杉が見たものはフィオナの手が淡く薄い水色の光を発し

その光が負傷者の傷口に吸い込まれている光景だった。

そして本当に少しずつではあるが負傷者の傷口が塞がっているのが見えたのだ。

その神秘的とも思える光景に高杉は目を奪われた。

「あ、やっぱり魔法も知らなかったんですね」

フィオナはくすくす笑いながら魔法の説明を始めた。

魔法は火、水、風、土、雷、光、闇 と言った属性魔法と

その他に精霊魔法、文字魔法がある。

属性魔法とは火属性は攻撃、水魔法は回復、土魔法は耐性など属性によって効果の高さが違う。

また、光属性と闇属性は使用できる者がおらず現在では失われている。

精霊魔法は精霊に働きかける事ができ

文字魔法は道具に古代魔法文字を書く事でその力を道具へ付与できる。

普通の人に魔法は使えなく、魔力を備えた者のみが魔術師となり魔法を使用することができた。

普通の魔術師は1つの系統、属性の魔法しか使うことはできないが、たまに現れる才能溢れる魔術師は複数の系統や属性を使用したりする。

そういった者には破格の待遇が約束されるのだ。

そして、魔法薬はそれぞれの魔法効果が封印されており

魔法を使えない者でも魔法効果を発揮することができるようにと発明された。

「なるほど、フィオナさんは実はすごい人なんだ」

しかしフィオナは困ったような顔でそれを否定する。

「ううん、全然です。魔法を使える人が少ないってわけじゃないですし」

それに：私って落ちこぼれですから」

フィオナは徐々に小さくなる声でそう言った。

その言い方はなんか落ち込んでる？と鈍感な高杉でもわかった。

だから高杉はフィオナの目を真っ直ぐ見ながら言った。

「だけど森で怪我人を治したのは感心したよ、俺にはできないことだから」

どうして落ち込んでいるのかはわからないが

あの不思議な光景に高杉が感嘆したのは事実だったからだ。

「そ、そうですね？」

高杉の真剣な物言いにフィオナは少し照れながら頬をかく。

「ああ、フィオナさんがいなかったらあの人達は危なかった、だから自信を持っていい」

「…そうだ、ところで俺にも魔法は使えるのか？」

高杉はフィオナが気分を持ち直したのを見ると

自分もあの不思議な力を使えたら便利そうだと聞いてみた。

「うんと、どうでしょうか？魔力があれば使えますが測定器が無くて素材屋さんであれば計ってみましょう」

「それは楽しみだ」

「それじゃ、急ぎましようタカスギさん！」

高杉にはどんな魔法適正があるのだろうか、フィオナも興味が沸き早く行こうと急かすのだった。

「いらつしゃい」

素材屋に入ると店主が愛想よく声を掛ける。

店の中は怪しげな商品が所狭しと並べられていた。

妙な液体のはいった小瓶、よくわからない葉っぱや木の実、呪符のような札

鉱石類、用途不明な道具など乱雑に置かれていた。

多数の骨らしきものの横には異様な雰囲気漂わせる鎧があり

剣立て？には剣が何本も詰め込まれ、壁には獣の皮が何枚も吊るさ  
れている。



「これ売りたいたんだが」

それらの商品を横目に高杉は目的を店主に告げ革袋を差し出した。

「はいよ、ちよつと確認させてもらつよ」

店主は中身を取り出し、確認し始める。

「マンティコアの牙と尻尾かね」

ふくむこの大きさは成獣か、状態もいい、損傷は殆ど無いし収集したばかりみたいだね

そうだね、合わせて金貨1枚で引き取るがどうだい？」

そう言われても価値がわからない高杉は横にいるフィオナをちらつと見た。

それに気づいたフィオナはにっこり笑いながら

「大体相場と同じなんで良いと思いますよ」

その答えに高杉は頷き店主に言った。

「それで頼む」

「まいど」

店主は金貨1枚を高杉へ手渡す。

高杉が手渡された金貨を物珍しそうに見ていると、横からフィオナが店主へ話しかけた。

「こちらの方の魔力測定をしたいんですが測定はできますか？」

「できるよ、銅貨50枚になるがやるかい？」

「はい、お願いします」

それを聞いた高杉は手に持っていた金貨を店主に差し出した。

「それじゃ、これで」

金貨で払おうとする高杉を見てフィオナは少し慌てた様子で言った。

「あ、私が出しますよ？細かくなりますし」

「いいよ、せっかく稼いだんだし使ってみたい」

店主は戻ってきた金貨を困惑した顔で見た。

「金貨で払うのかい？お釣りが嵩張るけど袋はある？」

そう言われた高杉は横に置いてある手ごころな袋を手にとりながら言った。

「それじゃこれも貰おうか」

「はいよ、それは銅貨30枚だね、それじゃ釣りはその袋にいれるね」

と店主は袋へ釣銭を入れ始めた。

高杉はそれを見ながら貨幣間の価値を確認する。

金貨1枚⇨銀貨 約50枚 銀貨1枚⇨銅貨 約100枚 と言った感じになるようだ。

確かに銅貨50枚の支払いに金貨を出すのはよろしくなさそうだ。

高杉は今後は気をつけようと心の中で思った。

店主は釣銭の入った袋を高杉に渡すと横にある水晶を指しながら言った。

「それじゃ、その水晶に手を乗せて」

高杉は言われるままに水晶に手を乗せる。  
しかしそれからどうしたらいいかわからない。

「乗せた後はどうすればいいんだ？」

「そのままでもいいよ、少し立てば水晶に文字が浮かび上がるから  
店主はそう言い、水晶を見ている。」

しばらくすると水晶に文字が浮かび上がった。  
しかし高杉には何が書いてあるのかわからなかった。

「魔力はあるようだけど、うーん  
かなり弱いね、弱すぎて系統と属性が読み取れなかったみたいだ」  
そういうと店主は高杉の方を見る。

「残念だったね、魔力はあるにはあるけど魔法を使える程じゃない」  
「そうか、それは残念だ」  
大して残念そうでもない口調で高杉は言った。

「で、でも！タカスギさんは魔法が使えなくても強いですし！」  
けれどフィオナは高杉が表情を変えなくとも落ち込んでいるのでは  
と慰めようとする。

そんなフィオナを見ながら高杉は自分の腕をぼんぼんと叩く仕草を  
する。

「そうだな、魔法が使えなくても俺にはこれがある」

「……よかった、タカスギさん本当に気にしてないみたい

魔法がうまく使えない事はフィオナにとってはコンプレックスだった。

だから自分に重ねて慰めようとしたのだが

高杉の本当に気にしていないような仕草にフィオナは安堵した。

そして高杉はお金の入った革袋を自分のバッグへしまいながら言った。

「さて、用事も済んだしそろそろ宿に向かうか」

そうして日が暮れ暗くなった夜道を二人は宿に向かうのであった。

### ―第三話― それは豊かな想像力

「ここら辺で野営にしよう」

オーウエンは馬の速度を落としながら言った。

高杉、オーウエン、フィオナの三人は朝にカラン村を出発し、ネアビュリス城塞都市を目指していた。

不慣れだが高杉も馬に乗れたため、城塞都市へは馬での移動となった。

だが乗馬に不慣れな高杉と女性のフィオナがいるので進行はややゆっくりにだった。

オーウエンはラグ（影が薄い他の小隊隊員1）に報告書を携えさせ先行させた。

ちなみにシグル（影が薄い他の小隊隊員2）は事後処理と負傷者の面倒を見る為カラン村へ残っていた。

三人は馬を下り近くの木に繫げ水をやると野営の準備を始める。

勝手のわからない高杉は川からの水汲みや木集めなど雑用を担当した。

オーウエンが火の準備を行いフィオナが料理をする。

食料はカラン村で仕入れていたので十分にあっただ。

全ての準備が終わる頃には陽はとっぷりと暮れ、辺りは暗闇となっていた。

三人は焚き火を囲み食事を取り始めた。

火には鍋がかかけられそこには食材が煮込まれており、周囲においしそうな匂いを漂わせている。

高杉は木椀によそわれた汁を一口食べると言葉が漏れた。

「うまいな」

「フィオナは料理がうまいからな」

オーウェンそう言いながら大盛りに盛られた木椀にがつつく。

「そんな事ないですよ、あ、おかわりありますから食べてください  
ね」

フィオナが照れながらもうれしそうにおかわりがある事を告げる。

それを聞いた高杉もオーウェンに負けない勢いで汁をかきこんで  
いった。

一日中慣れない乗馬を行ったため、腹を空かしていたようだ。

フィオナはその勢いに驚きながらも微笑むと自分の食事を始めるの  
であった。

「どうぞ」

フィオナは沸かしたお湯でお茶を入れると高杉に渡した。

「ありがとう」

高杉はお茶を受け取り一口すすりながら焚き火を眺める。

すでにオーウェンはマントに包まり寝入っている。

食事を終えた後、早々に身体を休めることにしたのだ。

しかし交代で見張りをを行う必要があるため

先に高杉とフィオナが見張りをを行う事となった。

辺りは静寂に包まれており、時折オーウェンのイビキが聞こえるだけだ。

フィオナも自分のお茶を煎れ焚き火を眺めていた。

しばらくゆっくりとした時間が流れた後、フィオナが口を開いた。

「タカスギさんは……」

「……」

「タカスギさんはどんな所に住んでたんですか？」

ふと沸いた疑問だった。

まだ会って二日しか立っていないのにこうして行動を共にしている。なにやら不思議な縁だと思った。

――突然現れて私達の危機を救ってくれた人

私達が手も足もでなかったマンティコアを一人で倒したとても強い人

最初は怖かったけど、今はそんな風には感じない

知らない事が多くて村では何度もはぐれて、とても手がかかっただけ

その度に申し訳なさそうにするからいつの間にか怖いって印象はなくなってた

私が少し落ち込んだらすぐに真剣に慰めてくれたし  
ささいな事だけどやっぱりうれしかった

けれどあんなに物を知らないなんてこの人はどんな所にいた  
んだろう？

どうやってあんなにも強くなっただろう？

とフィオナは焚き火を眺めながら考えていた。

自分の事はあまり語ろうとはしない、そんな高杉に興味が沸いた。

高杉はこれからの事を考えていた。

ここは日本じゃない、非常に認めがたいが世界そのものが違うよう  
だ。

なぜここににいるのか？自分は日本に戻れるのだろうか？

帰る方法はあるのか？それはどこにあるのか？

その前に生きる為には金を稼がないといけない、ならば何をして稼  
げばいい？

これまで暇がなかったが、時間ができると色々な事が頭をぐるぐる  
と回る。

そのため高杉はフィオナが話しかけてきた事に気づくのが遅れた。

「……………」

フィオナは何も応えない高杉の方を見た。

そこにはただぼんやりと焚き火を眺める高杉がいた。

なんて寂しそうな瞳をしているのだろう、フィオナはなぜだかそう  
思った。



その存在は今にも消え入りそうに儚くて、森で見せた圧倒的な存在  
感も欠片も無い。

深く暗い影を落とし焚き火を見つめるその姿は、何かの重圧に必死  
に耐えているようで

誰にも相談せず、誰にも頼らずただ一人孤独に足掻いているように  
見えた。

フィオナは抱きしめてあげたいとそんな衝動に駆られる。

そしてそんな高杉を見ている内になぜ自分の問いに答えず  
ただ黙っているのかその理由に気がついた。

「……うん？今フィオナさんが何か言ったか？」

フィオナの声が聞こえたような気がしたため、考えに没頭していた  
思考が浮上した。

確かに何かを言ったようだが、よく聞き取れなかったため高杉は聞き  
返すことにした。

「フィオナさん、済まないが……」

「ごめんさない！」

聞き返そうとした高杉に被せるようにフィオナが謝った。

それに驚きながら高杉はフィオナの方を見る。

「ごめんさい、言いたくなかったら言わなくていいです。」

ただ何となく気になっただけなんです、本当にごめんない！

フィオナは泣きそうな顔をして俯いた。

「――私は本当に馬鹿だ

私が興味本位で聞いたから、話したくないタカスギさんに謝罪なんかさせて……

あんなにも強いタカスギさんが普通に生きてきたわけなんじゃない

こんな時代だもの、戦って戦って戦ってずっと戦ってたくさん傷ついて苦しんで悲しんで、いろんなものを背負い込んで

それでも必死に戦ってきたからあんなに強いんだって普通に考えればわかる

この国に来たのだからと故郷を追われたから……語りたくない事なんて誰にだってあるのに、それを私は……！

高杉が答えるのに間があいたため、色々と勘違いをしたようだ。

残念なことだがフィオナは妄想と思ひ込みの激しい娘だった。

ただぼけつと座っていた高杉を見ながら妄想を膨らませたようだ。

そんなフィオナは高杉の心の傷（勘違い）に安易に触れようとした事を悔いた。

分けがわからない、そう思いつつも高杉はフィオナに言った。

「フィオナさんどうして謝るんだ？俺にはよくわからないんだが……」

「ほんとにごめんなわい」

しかしフィオナはそう言っただけで俯いたまま黙り込む。

どうしたものかと俯き泣き出しそうなフィオナを見ながら高杉は思案する。

何かを謝っているようだが自分には全く心当たりが無い。

少し考えて高杉は口を開いた。

「フィオナさん、空を見てみなよ、星がとても綺麗だ」

高杉はとりあえず俯いたままのフィオナの顔を上げさせようと言っただけだ。

フィオナはゆっくりと上を見る。

そこには満天の星空が広がっていた。

「こんなにも美しいものだって気がつかなかった

今まで星を見るために空を見上げた事なんてなかったから」

「……そうだね、そんな余裕なかったんだよね

フィオナの妄想は続いていたが見上げた星空は吸い込まれそうで

「きれい……」

そう思わず呟いた。

どのくらい二人で星空を眺めただろうか、高杉は言った。

「フィオナさんが何を謝ったのか俺にはわからない

けれどそれは俺を思いやっただけの事だとわかるから、だからもう気にしなくていい」

フィオナはその言葉に空を見上げるのをやめて高杉の方をみる。

すると高杉もフィオナを見ていた。

フィオナはその優しく労わる様に見守る高杉（フィオナ目線）に照れて俯きながらもか細い声で言った。

「あ、ありがとう」

「ああ」

高杉はそれに応えらるともう一度星空を見上げる。

フィオナは俯きながらも高杉の方を盗み見た。

小さくなった焚き火に赤く照らされた高杉の横顔からなぜだか目が離せなかった。

## ―第四話― ネアピュリス城塞都市

フォゼルティア帝国 ローゼイリス大公領 ネアピュリス城塞都市  
四大公の一人、ローゼイリス大公が城を構える帝国第2位の大都市だ。

山脈の裾野に城がありそこから広がるように都市が形成されている。山脈には豊富な水源があり上質な鉱物が取れ、肥沃な大地には多くの作物が栽培されている。

豊かな自然に恵まれたこの都市はさらに発展を続けていた。

武を尊ぶローゼイリス大公家直属のローゼイリス騎士団は強力無比の精鋭騎士団として知られていた。

ローゼイリス騎士団の名声は国内のみならず

他国にまで轟かせ帝国の平和を脅かす敵対国へ睨みを利かせる。

精鋭の騎士団に防備された鉄壁の城塞都市。帝国の要の一つである事は説明するまでも無かった。

「住む所が決まったら絶対に連絡してくださいよ？」

困ったことが起きたら遠慮なく頼ってくださいね？

何も無くても連絡はくださいね？

便りが無いのは元気な証とかそんな事無いんですからね？」

フィオナが今日何度目かの念を押す。

高杉は何度も念を押される度にわかった、大丈夫、約束すると答えていた。

——相当な念の入れようだな、いったいどうしちまったんだか  
タカスギも嫌な顔もせず何度もまあ、真面目なもんだ

オーウエンは苦笑しながらもその微笑ましい様子を見守っていた。

高杉達は現在、ネアビュリス城 敷地内にある騎士団本部前にいた。  
三人が五日の行程を得てカラン村から城塞都市へ着いたのは  
今より数時間前の事で午後を過ぎた頃だった。

城塞都市に到着したとき、高杉はあまりの都市の巨大さに度肝を抜  
かれた。

通りで見た人の多さ、広さ、活気などカラン村とは桁違いで比較対  
象にすらなっていない。

そして山の裾野に都市を見下ろすように聳え立つネアビュリス城は  
とても美しかった。

騎士団本部の横にある騎士団詰め所でオーウエン達の報告と高杉の  
褒賞受け取りが  
終わったのはつい先程で、すでに辺りは夕暮れどきの赤に染まって  
いた。

高杉達は騎士団本部前で馬車を待っていた。

城塞都市ような大都市では距離のある移動に馬車を使用することが  
多い。

貴族や騎士団、官僚など城の関係者には専用馬車があるが一般には乗合馬車が利用されていた。

高杉はオーウエン（騎士団）の好意で宿までの専用馬車を手配してもらったのだ。

オーウエン曰くお前は絶対迷うから、だそうだ。

ただこの大都市に初めて来た者は必ず迷うと補足していたので高杉が特別と言う訳ではないようだ。

「フィオナ、もうそのぐらいにしないか」

いい加減二人の遣り取りにも飽きたオーウエンはそろそろ助け舟を出してやるかと口を挟んだ。

「でも」

だがフィオナはまだ言い足りないと不満気な顔をする、心配で仕方ないみたいだ。

「……しかし何がそんなに心配なんだ？」

確かに最近のフィオナはタカスギの世話を甲斐甲斐しくしていた

暇さえあれば高杉を目で追っていたのも知っている

だが四六時中ともにいたが特に変わった事はなかったはずだ

が…

オーウエンには疑問に思う事ばかりだったがとりあえず提案した。

「宿はわかってるんだから、フィオナが尋ねてやればいいだろう？」  
高杉が行く予定の宿はオーウェンが紹介してくれた”男盛りの狂乱亭”だった。  
何やら怪しげな名前の宿だったが、当てのない高杉は素直にその宿を使う予定だった。

「そ、そうですね！、タカスギさんも初めての都市で大変でしょうから

お手伝いもかねて時々様子を見にいきますね！うん、そうしまし  
ようー！」

フィオナはよくぞ言ってくれたとばかりに激しく同意する。  
どうやら自分が行くとは中々言い出せなかったようだ。

「ありがとうフィオナさん、色々と気を使ってもらって」

「いいえ、タカスギさんがこの都市で快適に過ごせるようにお手伝いしますね」

とフィオナはうれしそうに両手を胸の前でぎゅっと握り締めた。

そうしていると白く豪華な馬車を先頭に3台の馬車が停止した。  
高杉はさすがに乗るのはこの馬車ではないだろうと眺めていると、  
フィオナの興奮した声が聞こえてきた。

「わ、セレスティア様の馬車だ」



「セレスティア様？」

「ローゼイリス騎士団の象徴、戦女神とも呼ばれてる第二公女  
セレスティア・フリエット・エーレンフェルス・フォン・ロー  
ゼイリス様の事だ

容姿端麗、若いが実力もあつて人気は絶大だな」

「とっても綺麗でかつこいんですよ、みんな憧れてます」

「なるほど」

すると本部正面玄関が俄かに騒がしくなる。

複数の騎士達と文官達が出て来ると道の両端に整列した。  
騎士は敬礼し、文官は片膝を尽き深く頭を下げる。

少しすると本部正面玄関から一人の女性が複数の騎士を従え出てき  
た。

長く美しい髪は艶やかで黄金色に輝き

綺麗な柳眉に少しきつめの蒼色の瞳は意思の強さをよく表していた。  
ほっそりとした輪郭に淡い桃色の唇は強く結ばれている。

白を基調とし装飾を施された騎士服は少し背の高めな彼女に良く似  
合っており

女性的な柔らかい雰囲気を出しつつも長い足で姿勢良く歩く姿は凜  
々しさを感じさせた。

「タ、タカスギさん、頭を下げて」

フィオナが慌てたような声言った。

高杉が隣を見るとフィオナは片膝をつけてこちらを見ており  
オーウエンは敬礼をしていた。

高杉にはあまり馴染みが無いが身分差はやはりあるらしい  
そう合点がいくと郷に入れば郷に従えとフィオナの真似をして頭を  
下げた。

セレスティアがその男に声を掛けたのはは気まぐれだった。  
騎士団本部で狸親父共のおべっかにうんざりしながらも  
会議を終えたセレスティアは馬車へ向かうため本部を出たのだ。

道の両端で騎士は敬礼しそれ以外は深く頭を垂れている。

しかしその中で一人の男が立つたまま不躰にセレスティアを見ていた。隣の女性に何かを言われてすぐに頭を下げたがその男は目立っていた。

頭を下げるのが遅れたのもあるが、あまり見たことの無い服装をしていた。

そして何より目に付いたのが黒色の髪の毛である。

様々な色をした髪の毛の者がいるが、こちら辺では見かけない黒だった。少なくともセレスティアは見たことが無かった。

一般人ならば珍しく思ってもあまり気にしない事かもしれない。

しかしセレスティアは多数の国へ訪問した事があるが、それらの国々でも見かけた事がなかったからだ。

「貴様、頭を下げるのが遅れたな？何か含むところでもあるのか？」  
セレスティアは黒髪の男の前に来たとき、見下ろしながらつい言うてしまった。

「……しまった、声を掛けるにしても言い様があるだろうに

この者には悪いことをしてしまった

意地悪な言い方をしてしまったとセレスティアは言ってから後悔した。

直前まで狸親父共の相手をしていたせいかな当たってしまったのだ。

この黒髪の男も必死に許しを請おうとするだろうが、すぐに応じ切り上げようとセレスティアは思った。

「いえ、そのような事はありません」

応えるのに少し間があったが黒髪の男は低く響く声でそれだけしか言わなかった。

それだけの事だったがセレスティアは逆に新鮮だった。

セレスティアは自惚れている訳では無いが騎士団の戦女神と崇められ、絶大な人気を誇っていた。

そしてローゼイリス大公の第二公女でもあり

セレスティアの不興を買う事はこの都市で相当生き辛くなることを意味していた。

その為、特に初めて会う者などは過剰な反応を示すことが多かった。だがこの男は問い質されたにも関わらず言い繕おうとはしないのだ。セレスティアはこの男の顔を確認したくなかった。

「顔を上げなさい」

若干戸惑った感があったが黒髪の男はゆっくりと顔を上げた。

「――驚いた、瞳まで黒なんだな」

髪だけでは無く瞳まで黒とは、セレスティアは少し驚いたが黒髪の男をじつと見詰めた。

見詰めていると、深く暗く何も写していない黒い瞳に吸い込まれそうな感覚に陥る。

何も感じず、何の意思も示そうとせず、生気の無い深遠の黒本当に生きているのかと疑問にすら思えてくる。

魅入られたようにその瞳を見ていると、この男は自分など見ていないと直感的に感じた。

いや、自分だけでなく周りの者、全てに対してこの男は薄い認識し

かしてないのだろう。

——面白い、いつまでその涼しげな顔をしていられるかな？

誰もが敬ってくる自分を全く相手にしていない。

敬意も何もなくなただけ周りに合わせて頭を下げていただけの男。

ならばそれ相応のモノをこの男は持っているのだろうか。

この男の慌てる顔が見てみたい、どのような反応を示すか見てみたい。

セレスティアは自分の腰にある剣に手をかけ力を込めた。

その行動は空気を一変させた。黒髪の男が纏う雰囲気は急激に変わったのだ。

弛緩していた空気は張り詰め、先ほどまでなかった存在感を黒髪の男は発揮し始めた。

目の前の黒髪の男は全く動いていない、

しかし長い前髪から覗く深遠の黒い瞳に見据えられたセレスティアはその威圧感に飲み込まれそうになる。気を抜いたらどうなるのか。

セレスティアは身体中から汗が噴出すのを感じた。

「セレスティア様!!!」 「貴様!!!」

「タカスギさん!!!」 「やめろタカスギ!!!」

一気に周囲が慌しくなった。

周りの者もその雰囲気の変化を敏感に察知したのだ。

セレスティアに付き従っていた騎士達は一斉に高杉を取り囲む。

オーウェンは剣に手をかけ、フィオナは高杉の腰へ抱きついていた。

だがすぐに二人の対峙は終わる。高杉が目を逸らしたのだ。

見据えられ知らぬ間に硬直していたセレスティアは、すぐに気を取り戻し剣から手を離す。

どうやら一瞬だが吞まれていたようだ と理解した。

「すまない、悪ふざけが過ぎたようだ」

セレスティアは一息抜くと周囲を見るように言った。

しかし周囲は相変わらずざわついており、騎士達は高杉の包囲を解こうとしない。

セレスティアはそんな周りを一瞥したが気にせず高杉に言った。

「貴様、名前は？」

「高杉」

高杉は抑揚無く答える。

「平民風情がなんだその態度は！」

高杉を囲んでいた騎士の一人が怒鳴る。

しかしセレスティアは片手を挙げてその騎士を諫めた。

「この都市に住んでいるのか？」

「今日から世話になるつもりだ」

「そうか、それは楽しみだ」

セレスティアはうれしそうに目を細める。

高杉はそんなセレスティアを無表情に見ていた。

「行くぞ」

しばらく見合った後、セレスティアは馬車へ向かって歩き出す。

その言葉に騎士達は驚き戸惑いながらも言った。

「この者はいいんですか？」

「構わない、ほつとけばいい」

騎士達は不承不承も高杉の囲いを解きセレスティアを追う。

先を歩くセレスティアの顔には笑みが浮かんだ。

「ふふ、面白い男だ、タカスギと言ったか」

あの者には自分と敵しか見えていない

だから私にも遠慮などしなかったのだからうな

それにあの気迫も中々のものだった  
あの男が相応の気概の持ち主ならばまたどこかで会う事もあ  
るだろう

妙な高揚感があった

本部を出た時の鬱屈した気分はいつの間にか無くなっていった。  
セレスティアは高杉といつかまた会える日を楽しみに思った。

「ひどい目に合ったな」

セレスティアを乗せた馬車が立ち去った後、オーウェンがやれやれ  
と言った感じで頭を掻いた。

フィオナは今だに高杉の腰にだきついたままだ。  
そんなフィオナの肩に高杉は手を置いて言った。

「フィオナさん、もう大丈夫だから」

高杉の声が聞こえたがフィオナは何も言わない。  
先ほどの高杉が森で最初に見た血塗れの高杉とダブったからだ。恐



怖しか感じなかったあの時と。

短い間とはいえ共に旅をし気を許し始めていたのだ。

最初の印象など薄くなりただ世話の焼ける人で自分を慰めてくれた優しい人だと

そう思い始めた矢先だった。

この数日で自分が感じた事はただの思い込みだったのだろうか  
と  
フィオナは不安になった。

黙ったまま顔を埋めるフィオナの背中を高杉は優しくさする。それはまるで幼子をあやすかのようなのだ。

高杉の体温がフィオナに伝わると それはフィオナの波立った心を落ち着かせていた。

安心感が高まりなんだか眠くなつてきそうだった。

しばらくするとフィオナは顔を上げた。

だが、間近にある高杉の顔を見て自分は抱きついていた事を思い出した。

「タ、タカスギさん！あの、その……」

言い淀むフィオナを見ながら高杉は言った。

「心配してくれてありがとう、フィオナさん」

「ううん」

高杉の顔をまともに見れず少し顔を逸らしながらフィオナは応えた。まるで高杉に包み込まれているような感覚に、フィオナの心は暖かくなった。

「あゝ、もうそろそろいいか？」

「オ、オーウエンさん！」

オーウエンの少し呆れたような声にフィオナは慌てて勢い良く立ち上がる。

それに続くように高杉もゆっくり立ち上がった。

「馬車がもう来てるから行くぞ」

オーウエンはそう言って馬車を親指で指した。

そして馬車の前に来ると高杉は二人の方へ向き直った。

「色々世話になったな」

「こつちこそ命を助けてもらったんだ、感謝している  
困ったことがあったら遠慮なく尋ねてきてくれ、力になるから」

オーウエンはそう言いながら手を差出す

高杉もそれに応えしつかりと握手をする。

「タカスギさん……」

別れの寂しさからか、フィオナは泣き出しそんな顔をしていた。

「フィオナさん、そんな顔をしないでくれ、またすぐ会えるから」

「……そうですね、すぐにまた会えますよね」

タカスギさん、お元気で身体には気をつけてくださいね」

フィオナは寂しい気持ちを堪え笑顔を浮かべる。

「ああ、フィオナさんも元気で」

そして高杉は改めて二人を見ると別れを告げた。

「ありがとう、それじゃあもう行くよ」

高杉が乗り込むと馬車は走り出した。

オーウェンと手を振っているフィオナががどんどん遠ざかっていく。彼らに出会わなければどうなっていただろうか。

短い間だったがこの世界で最初に彼らに会えたのは幸運だった。

高杉は黄昏時の幻想的なネアビュリス城を眺めながら彼らにもう一度感謝した。

―第五話― 深夜の訪問者

高杉は車窓を打ちつける雨に気づき外を覗いた。

ネアビュリス城で馬車に乗ってからいつの間にか降り出したようだ。濡れた路面を馬車は水飛沫を上げながら走り続け

高杉が降りるころには既に日は暮れ辺りは暗くなっていた。

オーウエンが紹介してくれた宿”男盛りの狂乱亭”は

こじんまりとした宿だが一階は食堂兼酒場となっており

明かりが漏れている窓からは人々が酒や食事を楽しんでいるのが見える。

雨が降っているのにも拘らず繁盛しているようだ。

高杉が多少雨に濡れながらも騒がしい店内へ入ると

忙しく動き回っていた給仕係りの女性が威勢よく声を掛けてきた。

「いらっしやませー！、お食事ですか？お泊りですか？」

「宿を頼みたいんだが」

「はい、少々お待ちくださいーい」

そう言うと給仕の女性は奥の厨房へ声を張り上げる。

「マスター！、お泊りのお客様です！」

「ちょっと待ってーん」

厨房の方から野太い声が聞こえてきた後、しばらくするとガタイの良い男が出てきた。

短く刈り込んだ頭髪に太い眉、立派な鷹鼻

下唇から顎にかけて生えている髭は丁寧に整えられていた。

全体的に濃ゆくかなり男らしいのだが、なぜかくねくねしている。

「いらっしやい、あらいい男ね、おにいさんお泊り？」

「あ、ああ、騎士団のオーウェンに紹介されてきたんだが、しばらく宿を頼みたい」

妙にくねる男に高杉は若干引きつつ答える。

「あら、オーウェンちゃんのお友達？」

「おにいさんいい男だし、たっぷりサービスしてあげるわね」

そう言いながらウィンクをする男に高杉は背筋に寒気がした。

先に食事を済ませ、案内された2階奥の部屋につくと

高杉はバッグを置きベッドに寝転んだ。

部屋はそこそこの広さと清潔感があり快適だった。

オーウェンの名前を出したせいか良い部屋を用意してくれたようだ。少し疲れた身体を休ませながら高杉は雨が打ちつける窓を眺めた。

あ のとき、セレスティアが剣に手をかけたとき高杉の緊張感は一気に高まった。

こんな所で大立ち回りなどしたくはない、しかし切られる訳にもいかない。

まずは初撃を避けるため高杉は身体の力を抜き、セレスティアを睨みつけたのだった。

結果的にセレスティアが引いたから良かったものの、もし本当に切り掛られたらどうなったかは高杉にもわからなかった。

少し今日の事を思い返したあと、高杉は明日からどうするか考え始めた。

――仕事でも探しながら少し歩くか

どこで仕事を貰えるかは宿の店主に聞くとして

あとは生活用品も買っておく必要があるな

カラン村では旅装用マントしか買ってないし

…それと文字も覚えなれないけないか

さすがにメニューすらわからんのは不便すぎる

とそこまで考えて高杉は起き上がるとバッグの中を漁りだす。

バッグの中には手甲、勉強道具、携帯、財布、着替えなどが入っていた。

目当てのこちらの世界のお金が入った革袋を取り出すと高杉は中身を確認し始める。

素材を売って得たお金、騎士団での褒賞、色々買った物

差引き 金貨1枚 銀貨34枚 銅貨20枚分となった。

宿屋や食事などこれまでの物価を考えると結構な高額を高杉は所持していた。

――しばらくは働かなくても生活自体はできる…か

お金に余裕があると精神的にも余裕ができる。

当面は飢え死にする心配が無いことを確認した高杉は  
そうそうに床に就き身体を休めることにした。

夜も深け都市も寝静まった深夜、”男盛りの狂乱亭”も営業を終了し  
店主は蠟燭の小さな明かりのみを頼りに帳簿をつけていた。  
あたりは静けさにつつまれ窓を打ちつける雨音と時折響く雷の音し  
かしない。

店主は一向に終わる気配の無い帳簿を少し溜息混じりに眺めると腕  
を伸ばし伸びをする。

「よく降るわね」

と店主は窓を眺めながら呟くと気を取り直し帳簿付けを再開しようと筆を取った。

しかししばらくするとその静けさを破るよつに扉が乱暴に叩かれた。

「もう、何よこんな夜更けに」

店主は深夜に尋ねてくる非常識な輩を不快に思いながらも帳簿付けを中断し腰を上げた。

尚も乱暴に叩かれる扉に店主は不快感を増す。

「はいはい、いま開けますよ」

そんな事を言いながら店主が扉を開けると

そこには雨避け用マントを羽織った複数の騎士達が濡れ姿で立っていた。

驚く店主が持つ蠟燭の光に照らされ騎士達の顔が浮かび上がる。

先頭に立つ童顔の騎士は笑みを浮かべていたが

背後に控える騎士達には何の感情も無く一様に無表情だった。

「ど、どのような御用ですか？」

店主はそんな騎士達の姿に怯えながらも聞いた。

それに対し先頭に立つ童顔の騎士が応える。

「こんばんは、ここに黒髪の男が宿を取ってると思うんだけどいる？」

「え？そんな人は………あ」

問われた店主はそんな人はいないと言い掛けて心当たりを思い出す。確か少し遅くにオーウェンの紹介だといって尋ねてきた男は黒髪だった。



童顔の騎士は店主の反応ににやりと笑みを浮かべた。

「よかった、いるんだ」

そう言い店主を横に押しのけると店内に入ってきた。

背後の騎士達もそれに続き店に足を踏み入れる。

「ちょ、ちょっとまちなさい!」

店主は急に入ってきた騎士達を止めようとするが

二人の騎士に羽交い絞めされ身動きを取れなくされた。

童顔の騎士はは素早く二階に上がると背後の騎士達へ指示を出す。

「階段付近の部屋から捜して、見つけたら報告するよつにね」

高杉は一階の異変を感じ取り目を開けた。

寝入ってからどのくらいたっただろうか

部屋は真っ暗で何も見えず雨音しか聞こえない。

高杉は神経を集中し異変の原因を探った。  
何者かが数人宿を囲んでいる、宿に突入してくるのも時間の問題の  
ように思えた。

高杉は靴を履き、手探りでバッグを手繰り寄せると手甲を取り出し  
装着した。

窓の下にあるベッドにバッグを置き、自分もベッドの上で身をかが  
め様子を伺った。

少しすると数人が二階へ上がり、付近の部屋から何かを搜索してい  
るようだ。

――外に六人、中に五人か

何者だ？何かを探しているようだが…

搜索は徐々に奥にある高杉の部屋へ近づいてくる。

部屋の外からは他の宿泊客の悲鳴が聞こえ騒がしくなってきた。

しかし高杉は行動を決めかねていた。

何が目的なのかはわからないが、自分に関係があるとも思えなかつ  
たからだ。

そして高杉が暗闇の中、息を潜めながら様子を伺っていると  
いよいよ部屋の前に侵入者が立つ気配がした。

二人の騎士が乱暴に扉を開けた。

高杉は入ってきた者達を確認しようとしたが扉が開けられると同時に光に照らされ思わず腕で目を庇う。腕の隙間から何うと光の玉がふよふよと浮いており、それが光源になっっているようだ。

騎士達は光に照らされた高杉を見ると頷きあう。

「フェルノ様！例の男を発見しました！」

そうして騎士達が道を開けると一人の騎士が部屋に入ってきた。

「こんばんは、タカスギさん？だったかな？」

部屋に入ってきた騎士は笑みを浮かべ高杉に話しかけてきた。だが笑みこそ浮かべているがその態度は明らかに友好的ではない。

「俺に何か用か？生憎お前など知らないが」

「セレスティア様の親衛騎士隊所属 フェルノ・ヴァークライゼ  
タカスギさん、貴方にはセレスティア様、延いてはローゼイリス  
大公様へ

反逆の意思ありとして捕縛命令がでてるんですよ」

何でもない事のように言うフェルノに高杉は戸惑った。

「……反逆？なんの事だ？」

「……セレスティアとはあの時の女か」

「しかしあの女はほつとけとか言っていたはずだが」

「何かの間違いじゃないのか？俺にそんな考えは無い」

「あれ？セレスティア様に反抗的な態度を見せたって聞いたけど  
まあでもそんな事は僕には関係ないかな、副隊長に命令されただけだし」

「それでおとなしく捕まってもらえますか？」

「断ると言ったら？」

「別にいいですよ、副隊長には生死問わずと言われてるし…ねっ！」  
言い終わると同時にフェルノは飛び出し高杉との距離を縮めた。  
高杉に肉薄し抜剣からそのまま切り上げる。

しかし高杉にはその動きが見えていた。  
体勢をずらし紙一重で斬撃をかわすとフェルノの腹部へ拳を叩き込む。

その攻撃にフェルノも反射的に反応した。  
咄嗟に鞘を少し引き上げそれで拳を受け止める。  
が、衝撃は殺しきれず後ろに吹き飛び片膝をついた。

「やるなあ」

フェルノは対して効いていないように立ち上がる。

「フェルノ様！」

騎士達が駆け寄ろうとするがフェルノはそれを手で制した。

「つまらない仕事だと思ってたけど、なるほどね

副隊長はタカスギさんを見ていたわけだ」

一人何かに納得しているフェルノに高杉は言った。

「何か誤解があるようだ、話し合いで解決はできないのか？」

「話し合い？大人しく捕まったら副隊長と話せたかもしれないけどでもね、僕はタカスギさんと戦ってみたいからもう無理かもね」

フェルノは高杉の言葉を鼻で笑うと酷薄な笑みを浮かべた。

「……話し合いは無理か……ならば

高杉は手甲をひと撫ですると身体の力を抜き戦闘体勢を取った。

フェルノも左足を一步前へ出し剣を両手で持つと持ち手を顔の横まで上げ切っ先を高杉へ向けた。

室内は静寂に包まれ振り続ける雨の音だけしか聞こえない。高杉とフェルノはにらみ合ったまま互いの隙を伺っていた。

膠着を破ったのは一筋の稲妻だった。

それを合図に先に高杉が動く、一気に間合いを詰めフェルノの懐へ

入ろうとする。

フェルノは向かってくる高杉へ強烈な突きを繰り出した。

高杉は手甲でそれをいなしカウンター気味に顔面へ強打を浴びせようとするが

すんでのとこでかわされてしまう。

高杉は体勢を整えるため間合いを取ろうとするがフェルノはその隙を付いた。

不自然な体勢であるが高杉を切りつけようと剣を振るったのだ。

思わぬところからの切り付けに高杉の反応は遅れた。

右胸を縦に切られ血飛沫が舞う、切られた箇所が炎を持ったように熱くなった。

しかし切られたその瞬間は高杉に大きなチャンスを与えた。

フェルノは不自然な体勢から攻撃したためバランスを崩したのだ。

高杉はそれを見逃さない、強烈な蹴りをフェルノの腹部へ見舞うとその衝撃にフェルノは吹き飛び壁を突き破った。

「フェルノ様！」

騎士の一人が怒鳴り声を上げた。

しかし高杉は追い討ちをかけずふらふらと浮かぶ光の玉へ上段廻し蹴りを放つ。

その蹴りに光の玉は四散しあたりは一気に暗闇へ包まれた。

「逃がすな！」

フェルノの声が室内に響いた。

すでに立ち上がり高杉の方へ走り出そうとするが暗闇に阻まれ思うようにいかない。

騎士達の怒号が飛び交い辺りは騒然とした状況になっていた。

その騒ぎのなか高杉は暗闇に紛れバッグを掴むと窓から飛び出した。

「ちっ！」

それに気づいたフェルノは舌打ちをし

すぐさま窓に近づくと身を乗り出し高杉の姿を目で追う。

雨の振るなか、濡れた通りに着地した高杉を三人の騎士が囲んでいるのが見えた。

「その男を取り押さえ……」

フェルノが言い終わる前に高杉は電光石火の動きで騎士達を昏倒させる

濡れた通りを猛然と駆け抜けていく。

駆けていった高杉が見えなくなるとフェルノは小さく溜息をついた。

「あんなに速いんじゃないなあ……あーあ失敗か

……やるね、タカスギさん」

そんなフェルノの言葉を掻き消すかのように雨は降り続いていた。

## ―第六話― 世界の許容範囲

「……………ふう」

フィオナは魔力の集中を解き一息入れた。

魔術兵士訓練場の一角でフィオナは自主訓練をしていた。

カラン村への遠征を終え2日間の休暇を与えられたのだが

自分の未熟さを理解しているフィオナは休みには自主的に訓練を行っていた。

特にカラン村の遠征では死を間近に感じたのだ

少しでも能力を高めたいと切実に思うのは当然だった。

「タカスギさん、ちゃんとやってるのかな…」

晴れた空を見ながら呟く、昨夜の雨が嘘のような晴天だった。

「――明日、様子見に行ってみようかな」

タカスギさんってどこかぼーとしてて心配だし

森で助けてくれた青年はいまどうしているだろうか。

昨日別れたばかりなのだが、高杉のことが気になり

訓練に集中できていない事をフィオナはわかっていた。

いつもおこなっている訓練なのだがどこか身が入らない。

これではいけないと思いつつも何故か気になって仕方がないのだった。



「おう、ここにいたか」

フィオナは急に話しかけられ驚きつつも声の主を探すと同じく休暇中のオーウェンが片手を上げながら歩いてきた。

「オーウェンさん、どうしたんですか？」

「ちょっとな、休みなのに精が出るな」

「ええ、少しでも魔法が上手になりたくて

…それに、怖いっわさもありませんから」

フィオナは不安そうな顔をしながら俯く。

それは帝国を取り囲む情勢が良くない事を思っていたことだった。

「魔族のことか？戦争が近いかもっていう

そっぴゃカラ村の村長も聞いてきたな」

「ええ」

大陸の最北に位置する 魔帝国ゾルダデイス、魔族が支配する超大国である。

魔獣すらも従える魔族は強大な戦力を有しあらゆる種族と敵対していた。

一説には異界と通じ、凶悪な魔獣を召還しているとさえ噂されている。

南下し勢力を拡大しようとする魔族に対し大陸中央部や東方部では大国が中心となり協力体制を敷くか、周辺国を属国化し魔族と対抗していた。

しかしフォゼルティア帝国もある西方部では大半が小国家、中堅国家であったため中心となる国がなかった。そのためまとまるのが遅れ徐々に魔族の南下を許すこととなる。そして魔族の勢力は大陸西南部へ位置するフォゼルティア帝国へも迫っていた。

オーウェンはフィオナの不安が理解できた。

ローゼイリス大公領はフォゼルティア帝国の北部に位置する。

それは魔族の帝国への侵入を許した場合、前線地域となることを意味していた。

そして兵士である自分達はいつ前線へ呼ばれるかわからない。

既に北の防備を固めるため兵士が重点的に配備され

オーウェンやフィオナの同僚も北の砦や村へ派遣されている者もいたのであった。

「…そうだ、明日タカスギさんの所に行ってみようと思ってるんですけど」

オーウェンさんも一緒にいきませんか？」

フィオナは暗くなりそうになった空気を変えるように言った。

しかしオーウェンはその意図に反して渋い顔をする。

「そのな、タカスギのことなんだが…」

「タカスギさんがどうしたんですか？」

話題を転換するために言ったのだが  
何かを言い淀むオーウェンにフィオナは首を傾げる。

「行方不明になった、宿の主人が知らせてくれたんだ」

その答えにフィオナは驚きに目を見開いた。  
昨日別れたばかりなのに、なぜどうしてと頭を駆け巡る。

「ど、どうしてですか？」

「わからない、騎士がタカスギを捕縛しにきたみたいなんだ」

「なんでですか?! オーウェンさん騎士団ですよね?  
なんでタカスギさんを捕まえないといけないんですか?!」

「わからないんだ、知り合いにも聞いて回ったがそんな命令は受けてないよ」

朝早くに宿の主人が知らせに来たときには驚きと困惑だけしかなかった。  
すぐに騎士団内の知り合いに聞きまわったり

高杉を送った馬車の御者にも確認したが結局何もわからずじまいだった。

「そんな、どうして...」

フィオナは声も無く呟いた。

騎士団詰め所に行っても何も言われず褒賞すらもらった高杉を

何故急に捕まえようとしたのかフィオナにはさっぱりわからない。

「……タカスギさん、無事ですよね……」

そう願いながらもフィオナの不安は募るばかりだった。

「……………っ！」

高杉は痛みで目を覚まし起き上がるつもりだったが身体が動かない。  
今にも崩れそうな廃屋の片隅で高杉は目を覚ました。

あの夜、宿を脱出した高杉は雨の中をひた走った。

いくつもの通りを駆け抜け、いくつもの路地を曲がった。

もはや自分がどこを走っているのかわからない

雨に体温は奪われ、胸からは血が流れ意識が何度も飛びそうになった。

最後にはふらふらとよろけながら歩き、目についた廃屋へ身を隠した。

何とか雨だけは免れそうな部屋の隅に身体を潜らせると

切られた服を包帯代わりに止血し終わった途端、意識を失ってしまったのだ。

身体はぼろぼろだった。

痛みで少し目が冴えたが高熱で意識は朦朧とし

傷口は火柱を押し当てられたようにズキズキと傷む。

――水が飲みたい

喉が強い渴きを訴えてくる。

再度身体を動かそうとしたが鉛のように重く力も入らない。

高杉は薄暗い廃屋の天井を朦朧とした目で眺めた。

――先生

朦朧とした意識の淵で思い出したのは師である御剣の事だった。

会えなくなつてまだ一週間程度しか立っていないのにひどく懐かし  
く思った。

高杉がただ一人信頼を寄せる人物、厳しかったけれど優しくかった師。  
けれど今はぼんやりとしか思い出せない。

——そうか、ここで死ぬのか…

いつ失つてもおかしくない意識の中でなんとなくそう思った。

御剣へは何も言ったことはなかったが思いは感謝しかなかった。

社会の片隅でただ一人ひっそりと生きてきた自分を見守ってくれていた。

自分に戦う術を教えてくれ、何かと世話を焼いてくれたのだ。

だから何も言えず逝くのは悔いが残る。

こんな事になるのなら、せめて一言でも感謝の言葉を伝えれば良かったと高杉は思う。

けれどそれだけだった。

ここで終わるのならば、それも仕方が無いと何処かで思ってしまった。  
ている。

現状を理解しこのままではどうなるか、わかっているのにそれを受け入れてしまっている。

何の目的も無く関心も持たず生きてきたために

死という闇に転げ落ちるまま、浮上するためのとっかかりが何一つ無い。

なぜこんな事になったんだろうか？と疑問に思うがどうでもよかった。

弱者である自分が生きてこれたのは平和な日本だったからで

ここでは淘汰されるべき対象なのだろうと納得した。

高杉は己の運命を受け入れると再び意識は暗闇へ落ちていった。

## ―第七話― 逃げ込んだ先

親衛騎士隊の副隊長を勤めるレイナス・シユタット・コートネイヴは執務室で部下の報告を聞きながらその端正な顔を顰めた。濃紺の長い髪は窓からの風に揺れ、切れ長の濃い黄緑の瞳は報告書を眺めている。

「フェルノの容態は？」

報告を聞き終えたレイナスは姿を現さないフェルノの様子を聞く。

「はい、2週間程度魔法治療と安静が必要だと医師は言っています。内臓を負傷しており完治するにはそのぐらい必要だと」

高杉との戦闘後にフェルノは血を吐き倒れた。

戦闘時の興奮と持ち前の忍耐強さで顔には出さなかったが腹部に受けたダメージは本人の予想を超えていたようだ。

すぐに魔法治療が施されたため最悪な事態は免れたが完治には時間を要することになってしまった。

これにはレイナスも驚いた。自分で命令したとはいえ

このような瑣末事にフェルノは過剰戦力だと思っているのだ。

「わかった、下がっていい」

部下を下がらせレイナスは深く考え込む。

――フェルノを退けるとは信じられん

タカスギ……か

念のためのつもりだったが思ったより厄介な奴みたいだな  
手傷を負わせたことから都市からは出ていないだろうが

恐らくはあの区域に逃げ込む可能性が高いか

あまり人も裂けんし……気が進まんがあいつに頼んでみるか

セレスティアに無礼な態度を取ったことは万死に値するが

本人が問題にしていけない事から普通ならばほっといてもよかった。

しかしレイナスは高杉の発した異様な雰囲気とその雰囲気を持つ者が  
セレスティアに反抗するような態度をとったのが気になったのだ。

セレスティアを守る事が自分の使命だと考えているレイナスにとって  
例え小さな芽でも刈り取っておくのに越したことは無いと  
フェルノを派遣したのだが、失敗したのは予想外だった。

高杉が何か犯罪を起こした訳ではないのであまり人を動員すること  
ができないうえに  
逃げ込んだと考える区域に人を出すには理由が弱い、というか無理  
だった。

色々と考えたうえで思いついた人物にレイナスは気が重くなった。



大都市には必ず治安の悪い区画がある。

ネアピュリス城塞都市もたぶんに漏れずそのような区域があった。

貧民区域、下層身分の者や貧しい者達が寄り集まって住んでいるこの区域は貧しさ故に治安も悪い。

犯罪の多い場所には犯罪者が集まる

他の都市や街からも脛に傷のある者が流入し格好の隠れ蓑になる有様だった。

貧民区域にはさらに大きな問題があった。

都市壁の外に形成されている難民集落とも繋がっていることだ。

戦争や魔族、魔獣に住む場所を追われた者、自然災害により生活が立ち行かなくなった者

差別などにより定住できず彷徨う者、様々な理由で放浪していた難民が

仕事と住処を求め城塞都市に来たが

都市内で生活することができず都市壁のそばに住み始めたのだ。

住み着く難民は徐々に増えてゆき、都市壁に添うように集落を形成していった。

そして貧民区域と難民集落は都市壁を隔て隣あっていたためにいつしか都市壁に穴が開けられ勝手に出入りをし始めたのだ。

こうして貧民区域は独特なコミュニティを形成していく。

多くのマフィアが誕生しては消えていくなか、闇市や奴隷市場なども開きはじめ

貧民区域は奥へ行けば行くほど一種の治外法権のようになっていった。

これには都市議会も頭を痛めた。

都市全体の治安が悪くなる上、都市防備にも著しく問題が発生するためだ。

過去に何度か貧民区域の浄化や難民集落を撤去する作戦が実行されたが全て失敗に終わった。

多数のマフィアで形成されているマフィアンコミュニティと

貧民区域、難民集落の住民が激しく抵抗したためだ。

マフィアの構成員や流入した犯罪者には元兵士や元傭兵、高ランクの冒険者崩れなども

多く存在し最早力で押さえつけるのは不可能な状態になっていた。

そのため都市議会はマフィアンコミュニティと一定のルールを決め協定を結ぶこととなる。

こうして貧民区域は一種の隔離区域のような扱いを受ける存在になり多くの問題を残したままだが表面上は平穏を保つこととなった。

貧民区域の少しはずれにイリスは住んでいた。

約三年前にふらりと現れると

そこそこ広い廃屋の比較的まともな部屋に勝手に住みついた。

そしてそこで自分で調べた薬を売りつつ細々と生活を始めたのだ。

イリスはエルフであり、勝手に住み着いた不審者であったが周囲の住人にはすんなり受け入れられた。

エルフに限らず亜人は差別される対象であったが

貧民区域では自分に害がなければ亜人でも犯罪者でも

変に詮索はされず住みたければ住めばいいといった妙な大らかさがあつた。

そんなイリスの住んでいる廃屋の一室にやつかないな闖入者が現れたのは二日前だ。

真夜中に何か物音がし、朝になってから見に行くと血まみれの男が横たわっていたのだ。

この近辺で障害沙汰などめずらしくもなんともないがさすがに自分が住んでいる所で死なれては寝覚めが悪いと手当てをしたのだつた。

「……………」

目を覚ました高杉はぼんやりを廃屋の天井を眺めていた。

死すら覚悟をしていたがどうやら助かつたらしい。

高杉は自分の身体を確認すると包帯が巻いてあることに気づいた。誰かはわからないが手当てをしてくれたようだ。

高杉はゆっくりと身体を起こしてみた。

身体はだるく傷口は傷むがかなり回復している様子に驚いた。通常ならばこのようなことはありえない

あの傷はこれ程早く塞がるほど浅くなかったはずだと巻かれた包帯

に触れてみる。

だが血は滲んでいるが問題ないように思えた。

誰かいないか見回すと横に置いてある水に気づいた。

その水をすぐに飲みたいのをぐっと堪え、飲めるかどうか匂いを嗅いでみた。

異臭はなく濁ってもいないため、一口含み問題なさそうだと感じる  
と一気に飲み干す。

水は生ぬるいが身体の芯まで染み渡るように感じ、高杉は生を改めて実感した。

「あ、起きたんだ」

水を飲み終えた高杉が声のした方へ目をやると扉から一人の娘が入ってきた。

整った目鼻立ちに勝気な瞳を持ちながらも、どこか愛嬌を感じる顔をしている。

美しい髪を後ろで束ねており、しなやかで健康的な身体つきをしている娘は

廃屋の薄暗さとは無縁の雰囲気をもっていた。

手には水の入った桶を持ち、腕に袋を引っ掛けている。

「貴方は？」

「イリスよ、身体大丈夫？」

「一応手当てはしたけど、よく死ななかつたわね」

微妙に酷いことを言いながらイリスは近づいてきた。

「ああ、貴方が手当てを

俺は高杉だ、助けてくれたようで礼を言っよ」

「別にいいけどさあ、それって剣に切られた傷だよな？」

「追いはぎにでもやられた？」

そう言いながらイリスは桶と袋を置きながら高杉の前に座った。

「いや、これは…」

高杉は少し言い淀んだが、素直に合ったことを説明した。

理由はわからないが宿に親衛騎士と名乗る者達が来たこと命からがら逃げてきたこと、廃屋だと思って身を隠したことを。

「廃屋って、まあそうなんだけどさ…」

でも親衛騎士に追われるなんてアンタなにやったのよ

あいつらが出てくるって聞いた事ないけど」

イリスは不審げに高杉を見詰めた。

一般的に都市内の治安維持に対しては都市警備隊がおこなっていた。それなのに騎士団のそれも精鋭集団である親衛騎士隊が出張ってくること自体おかしなことであった。

「……こいつって相当な凶悪犯なのかしら

ただでさえ物騒な貧民区域である

そこで生活をしているイリスはそれなりに自衛手段を持っているが

いざという時に親衛騎士隊から追われるような輩に通用するか不安に駆られた。

「本当にわからないんだ、この都市に来たのもつい最近だし  
イリスさんはあいつらを知っているのか？」

「詳しいことは知らないわ  
でもね親衛騎士隊は精鋭中の精鋭だって、それぞれが一騎当千つ  
て噂よ

はい、これで顔拭いて」

イリスは桶の水に布を浸し絞ると高杉に渡した。  
顔を拭く高杉を横目にイリスは袋から包帯と毒々しい色の液体が入った瓶を取り出す。

「あとは包帯かえる前に身体拭いてあげるわね  
感謝しなさいよ、私がこんなこととしてあげるなんて滅多に無いん  
だから」

イリスは高杉から顔を拭いた布を受け取ると  
包帯を解きつつ身体と傷を改めて観察しはじめた。

「――よく鍛えられてる、いい身体つき

だけど無駄に鍛えられてるわけじゃないわね

全体的にバランスがよくて粘りも強そう、まさに戦う為に絞  
り込まれた肉体って感じ

こんな傷を負ったって事は

ただ親衛騎士から逃げるだけじゃなくて間違いなくやり合っ

てる

この身体といい、話を聞くかぎりではそこそ腕は立ちそうね  
…それにしてももう傷口が塞がり始めてるけど、どういっ

と？

そんなに浅い傷じゃなかったはずだけど…

最初は観察していたがいつの間にか

身体をぺたぺたと触り始めたイリスをみて高杉はあることに気づいた。

「イリスさん、その耳は」

「耳？ ああ、私はエルフよ エルフに触られるのは不愉快？」

イリスはチラリと高杉の顔に目をやり反応を見た。

人間が亜人を差別するのは当たり前前の事だったため、高杉の様子が気になった。

実際、亜人の地位は低く奴隷よりは多少はマシといった扱いを受けることも多い。

なかには不愉快ならば切り殺しても良いと考える者すらいるのだ。

「いや、俺の住んでいたところは人間しかいなかったものでな」

「そ、まあエルフなんて珍しいかもね、でも人間しかいないなんてとんだ田舎ね」

イリスは少し笑みを浮かべながら身体を拭いていく。

気持ちがいいとされるがままになりながら高杉は率直にそう思った。血と汗と埃に塗れていた身体をひんやりと冷たい布が這っていく。

しかも拭いてくれているのは美しい娘だ、男冥利に尽きるといつものだろうか。

「――そんなに悪い奴じゃなさそうね、礼儀正しいし

少しでも不信なそぶりを見せたら叩き出すつもりだったけど  
これならまあ大丈夫かな？」

身体を拭き終わり新しい包帯を巻きながら  
イリスはしばらくは面倒を見てやるかと考えた。  
見知らぬ男を置くのはとても不安になるが  
怪我した人間を放り出すほどイリスは冷たくはなかった。

「よし、終わり。きつい所はない？」

包帯を巻き終わったイリスは自分の仕事に満足そうにしている。

「ああ、大丈夫だ　ありがとう」

「お腹空いてるでしょ、何か持ってきてあげるわね」

ときばきと片付けを終えるとイリスは腰を上げた。

「何から何まですまない」

高杉は申し訳なさそうな顔をした。

あまり人の世話になることに慣れていない高杉はどうにも心苦しく



感じるのだった。

「なら目一杯感謝しなさい、私は命の恩人なんだからね」

そんな高杉の心を知ってか知らずか

イリスはそう言つと小悪魔のような笑みを浮かべた。

## ―第八話― 搜索依頼

その夜、レイナスは貧民区域のある通りに足を踏み入れた。いつも着ている魔法効果が施された上質な騎士隊服ではなく、冒険者風の軽装に、腰に一本の剣をぶら下げた身軽な格好である。騎士の格好のまま貧民区域へ立ち入ると高確率で面倒事が起こるのでそれを避けるためであった。

通りは酒場や食堂が多く夜にも関わらず喧騒に包まれている。柄の悪い男達が酔っ払いながら練り歩き、端では娼婦がその日の客を捕まえようと誘惑していた。その喧騒の中を足早に歩くとレイナスは目的の酒場に入ってしまった。

「レイ、こつちだ！」

レイナスがそちらを向くと木製のジョッキを持った青年が人懐っこい笑みを浮かべ手を上げていた。

「ひさしぶりだな、ヴァッツ」

レイナスはそう言いながら青年、ヴァッツに近づき前の席に座った。テーブルには料理がいくつか並んでおり、料理から立つ湯気と香りが食欲をそそる。

レイナスが貧民区域に来た目的は旧知の間柄であるヴァッツに会うためだった。

「半年ぶりか？、ま、ひさしぶりに飲もうぜ  
おばちゃん、こっちにエール二つよろしく！」

ヴァッツが注文の声を上げると

騒がしい店内で動き回っている給仕の中年女性はいよいよと威勢よく応えた。

「留守にしていたようだが、どこか行っていたのか？」

「仕事だ 仕事、トルニア連邦まで行ってきた

あまりうまく仕事じゃなかったがギルドの親父に頼まれてな」

とヴァッツは手に持ったエールに口をつけると喉を鳴らして飲み始める。

冒険者として生計を立てているヴァッツは遠出をすることがよくあった。

「向こうはどうだった？」

「んあ？ああ、やっぱり経済にガタがきてんな

あそこイリートがやばかったろ、近々そこから兵を退くかもしれんって噂だ」

ヴァッツは対して興味がなさそうに向こうで見聞きしたことを話した。

魔族の勢力に押されフォゼルティアを含め周辺国の情勢が

悪くなる一方であることに、レイナスの表情は徐々に渋くなる。

給仕の女性がエールを持ってきたのでとりあえず口をつけ喉を潤した。

レイナスが抱える懸念など関係の無いヴァッツはエールを飲みながら料理に舌鼓を打っていた。

この能天気な男はと思わなくもないが立場が違うのだ。

少しは興味の惹ける話でもしてみようかとレイナスは口を開いた。

「フォゼルティアも軍を出すかもしれん」

「はあ？どこにだよ」

ヴァッツは食事の手を止め顔を上げた。

やはり自分が住んでいる国になると気になるようだ。

「イシュヴァイン王国、まだ具体的には何も決まっておらず話だけだな」

「つてことは援軍か？」

あそこも切羽詰ってきたみたいだな、今まで物資と金しか受け取らなかったら？」

フォゼルティア帝国と隣国のイシュヴァイン王国は歴史的な経緯もあり関係は悪かった。

しかし差し迫る魔族という脅威に思惑が一致した両国は同盟とはいかずとも協調関係を構築していた。

「ああ、イシュヴァインの情勢はかなり悪い

だがあそこが落ちたらフォゼルティアまで一直線になる

正式に打診が来たらローゼイリスからも兵を出す事になるだろうな」

レイナスはヴァッツを見ながら言った。

兵を挙げる事になれば冒険者ギルドへも傭兵部隊の結成依頼がでるだろうが

この男は参加しないのだろうか」とレイナスは思った。

「…その話をしに来たのか？ それを聞いても俺には何もできんぜ？」

案の定、ある意味レイナスの予想通りの答えが返ってきた。

何を期待した訳ではないが腕が立つのに戦力として

当てにできそうにない言葉にレイナスは多少の落胆を覚える。

だが兵を出すにしても今日明日のことでは無いため、気を取り直すと本題に入ることにした。

「いや、話ついでだ お前への用は別にある」

「なんだよ？」

「人を一人探して欲しい」

レイナスの言葉にヴァッツは怪訝な顔をした。

「理由は？」

「セレスティア様に反抗の意思を持っているようだ」

「マンティコアを仕留めるほどの戦闘能力を有している危険な人物  
そのような者がこの都市にいることは好ましくない」

それに……と言いつけてレイナスは口を噤んだ。

レイナスは高杉があの場合にいた理由を調べた。

フェルノを退け、マンティコアを仕留めるほどの並外れた戦闘能力  
に加え

あの時セレスティアを見ていた高杉の暗い漆黒の瞳を思い出す。

それは災いを運び不幸を振りまく災厄の象徴のように思えた。

脅威だった、何よりもそのような男がセレスティアに殺意を向けた  
事が。

だがそんなレイナスの考えとは裏腹にヴァッツは冷めた目をしてい  
た。

「それで？ それだけで探してどうすんだよ？」

「それはお前には関係ない、始末はこちらでつける」

「なんだよ、もしかして消すつもりか？」

「お前には関係ないと言っている」

「気に入らないから殺しちまえっつてか？」

「やだねー、あーやだやだ 傲慢な貴族様が考える事は物騒で」

「ふざけるな」

「ふざけてねえよ」

お前がお嬢ちゃんの事になると馬鹿になるのは今に始まった事じ

やないが

正気か？ 一回治療院で見てもらうことをお勧めするぜ  
ってかお前は暇なのか？ そんなくだらねえことでわざわざ

ヴァッツの馬鹿にしたような言い様にレイナスはムツとする。

普通ならば平民のヴァッツが貴族であるレイナスに

このような無礼な言葉遣いをしたならば切り捨てられても文句は言えない。

しかし二人は付き合いが長いためお互いに（特にヴァッツが）遠慮がなかった。

レイナスとしては貧民区域だけでもヴァッツに任せる事ができればと考えていた。

不愉快ではあるがヴァッツの情報網は確かなものがあつたからだ。

——昔からこうだよなこいつは

なんつーか思い込みが激しいというか、一途というか……

お嬢ちゃんのことになると視野が狭くなるのはなんとかならんのかな

……だがこいつがそんなに気にするってのは気になるな  
何かあるのかそいつには？

付き合いが長いせいとお互いの性格はよくわかっていた。

何やら黙りこんでしまったレイナスにヴァッツは小さく溜息をついた。

「わかったよ

だが貧民区域に入って来たか調べるだけだ、それ以上はしない」

レイナスは少し驚いた顔をした後に頷くと高杉の特徴を伝え始める。情報の少なさにヴァッツは頭を抱えつつも何点か質問し依頼を達成できるか頭の中で検討し始めた。

「黒髪ねえ、珍しいな」

「ってか俺は見たことないが、お前そいつ以外で見たことあるか？」

「……いや、ないな」

レイナスは少し考えたあと答えた。

改めて問われるとそのような人物に心当たりがなかった。

「ま、そんだけ決定的な特徴があるならなんとかなる……か  
だが時間はかかるぜ？ 貧民区域はかなり広いからな」

「ああ、わかってる」

「ったく、ここお前持ちだかな？」

「いちいち言うな、いつもそうだろうが」

「それはお前が用がある時しか来ないからだろ？  
全く友達概の無い奴だよな」

お互いに軽口を叩きながらすっかり冷めてしまった料理に手を伸ばす。

だがヴァッツお気に入りのこの店の料理は冷めてもうまいので箸が



進んだ。

エールを片手にヴァッツが軽口を言いレイナスが生真面目に答える。性格も立場も育った環境も全く違う二人だがなぜか馬があった。

給仕の女性から新しいエールを受け取り口につけたとき

ヴァッツは店の扉から見知った顔が入ってきたことに気が付く。

「……あれ？ イリスちゃんだ

「おーい、イリスちゃ……」

と顔見知り呼びかけようとしたが途中で言葉を切った。

なぜならイリスに続いて入ってきた人物に目を丸くしたからだ。

「どうした？」

何かを言いかけてやめたヴァッツにレイナスは目を向けた。

するとヴァッツは何やら面白い事でも見つけたのかニヤツと笑みを浮かべた。

「あそこ見てみるよ、面白い奴がいるぜ？」

ヴァッツは顎でその方向を指すと、レイナスを見ながら意地の悪い笑みを深くした。

## ―第九話― 住処の確保

高杉は廃屋の裏庭で上半身裸になると

身体の調子を確認するように古武術の型をこなしていた。

ひさしぶりに軽く汗が出るほど身体を動かすと弾んだ息を整える。

火照った身体を風が撫でていく。

初めてイリスと顔を合わせてから二日、秘薬のおかげか傷は順調に快復していた。

高杉は当初迷惑が掛からぬ様にすぐに立ち去ろうと考えていたがイリスの厚意でしばらく留まる事にした。

率直に行く当ての無い事と、イリスによればこの周辺は行政の手が届かなく

高杉よりも立場の悪い者、はっきり言えば犯罪者もゴロゴロいるから大丈夫なんじゃないの？

との言葉からだ。もちろん家賃はイリスへ払うことになったのだが。

「あんだねえ

そんなに動いて傷が開いても知らないわよ？」

高杉が振り向くと籠を持ったイリスが呆れたような顔で立っていた。その様子からどこかへ出かけるようだ。

「いや、自分でも驚くほど直ってるんだ イリスさんの秘薬のおか

げかな？」

「確かに効きのいい物を使ったけどただの塗り薬よ？」

魔法薬でもないのにそんなに早く治るわけないでしょ、あんたの身体が異常なだけよ」

そうなのか？と高杉は包帯の上から傷跡を指で撫でてみる。

その動作にサラリと黒髪が風にゆれ

汗で湿った逞しい身体にイリスはなにやら気恥ずかしいものを感じ何となく目を逸らした。

「と、とにかく大丈夫みたいだけど少しは自重しなさい

それから私は薬を卸してくるから少し遅くなるわ」

「一緒に行こうか？」

「あんた病み上がりなんだし、私だけで大丈夫よ

夜は外で食べる予定だから私が帰るまで待つてなさい」

それに高杉が頷くとそれじゃあ行ってくるわねと

手をヒラヒラさせながら出て行くイリスを見送った。

イリスを見送ったあと高杉は汗を流すため近くにある井戸へ移動した。

そこで素っ裸になると、井戸から水を汲み頭から被ると汗を流し始めた。

井戸の冷たい水は少し肌寒いが身体の熱が静まっていくのを感じる。

ここ最近では風呂に入ることができず、冷水で洗うか濡らした布で身体を拭くのみだった。

廃屋には当たり前前のことだが風呂はない。

家に風呂があるのは王族や貴族か金持ちだけであり、平民は公衆浴場を利用するのが一般的だった。

イリスも公衆浴場に行っているみたいだが

高杉は傷がまだ治っておらず公衆浴場に行くことができなかったのだ。

井戸から水を何度か汲み上げ身体を洗い終わると布で身体を拭いた。包帯も新しいものへ巻き返ると服を身に着ける。

服は動けない高杉の代わりにイリスが何着か買ってきてくれたものだ。

主に冒険者が着る服であったため平民が着る服より生地が厚くて荒かったが

古着だったので着易く、心配していたサイズも合っていた。

――さてと、掃除でもするか

ある程度動けるようになってからまずしたのは、自分が使用する部屋の掃除と修復だった。

廃屋は高杉が思っていたよりも広かった。

奥の二部屋をイリスが使用しており、生活のほとんどはその部屋で済ませていたようだ

その他トイレ以外は放置されていたので荒れ放題だった。

高杉は自分が隠れていた部屋を使うことにしたが、部屋は埃にまみれて蜘蛛の巣もはっており

使われていない家具なども散乱した酷い有様だった。

そこでまずは窓や扉を開け放ち換気を取ると、あったものは全て別の部屋に移した。

そこから部屋中の埃を払ったあとに拭き掃除をおこない

壁の穴の空いた所は他の部屋から材料を調達し修理をおこなった。

使えそうな木製のベッドや椅子、机などを丁寧に掃除し今も天日干しにしている。

布団はイリスから有料で譲り受けることにし何とか寝床を確保したのだった。

他に最低限は居間と調理場、廊下ぐらいは掃除しておこうと高杉は考えていた。

年季の入った家屋であったが意外と土台はしっかりしており

掃除すればそれなりに快適に過ごせそうだったからだ。

しかし数分後、掃除のし甲斐があるを通り越している環境に高杉の意識は遠くなりかけていた。

「おう、怪我の具合はどうだ？」

軍病院の一室で暇を持て余しているフェルノの元へ一人の男が訪れた。

立派な体躯に短く刈り込まれた白髪交じりの髪、顔には深い皺が刻まれ口には髭を蓄えている。

身体は分厚い筋肉を纏っており、いかにも力自慢と言った風貌だ。

「あれ？ 隊長どうしたんですか？」

「どうしたのかってお前な…様子を見にきたんだろっが

耳を疑ったぞ？ お前が病院送りにされたと聞いたときは

ほれ、見舞いのクスの実だ」

フェルノはニコニコしながらありがとございますと見舞いを受け取る。

男の名はガルズ・ヴァデバレオ 親衛騎士隊の隊長を任された男だった。

「いやー油断した訳じゃなかったんですけどね」

あははとフェルノは髪をかいた。

それを見たガルズは興味深そうな表情をした。

「ほう？ そいつはそれ程だったか？」

「そうですね お互い本気じゃなかったけど  
少なくともあのやりとりだけじゃ底は測れなかったかな？」

短い時間だったがあの時の高揚感は何事にも換えがたい一瞬の間がお互いの生死を分かっその緊張感は何事にも換えがたいものだった。

「お前がそう言うのなら相当なものだな  
レイナスが対処すると言っておったが、俺もあつて見たいものだな」

とガレスは髭を撫でながら笑みを浮かべた。  
強い者がいるとなるとやはり武人の血が騒ぐようだ。

「やるのは僕が先ですよ？ タカスギさんと約束したんですから」

フェルノはありもしない約束を持ち出して釘を刺した。  
だがフェルノにとって再戦は当然のものとして認識されているようだ。

「わかった わかった、ならば早く身体を直すことだ」

「もう直ってるんですけどね、ここの看護長がうるさくて」

あ、そうだ 副隊長で思い出したんですけど

なんかタカスギさんは反逆の意思は無いとかなんとか言ってますよ？」

何気に重要なことをさも今思い出したように言った。

「……お前、それはレイナスに報告したのか？」

「聞こえてたのが僕だけだったら伝わってないんじゃないですかね？」

悪びれた様子もないフェルノにはあつとガルズは溜息をついた。

「叛逆の意思を秘めた者が都市に紛れておるとしか聞いておらんしな  
ふむ わかった、儂から伝えておく

だがお嬢様に敵意を向けたのは他の騎士も見ておるんだ  
そやつの真意は確認する必要があるだろう」

ガルズはお願いしますと頭を下げるフェルノをみながら  
相変わらず戦闘以外は抜けているが元気そうな様子にひとまず胸を  
撫で下ろしたのだった。



「たく、なんなのよ あのケチ親父  
私の薬にどれだけ手間とお金がかかっているのかわかっているのかしら！」

夜の雑踏の中を肩をいからせずんと歩くイリスの後ろを高杉は付いて歩いていった。  
夕食を食べに外出しているのだが、イリスは帰ってきてからずっと不機嫌だ。

どうやら薬を店に卸しに行つて不愉快なことがあつたらしい。

「だいたいあの親父はいつもああなのよ  
倍以上の値段で売ってるくせに、私が女だからって舐めてるのよ  
人の足元ばかり見て、あんな腐った根性だから女に持てないのよ  
いつもいやらしい目で見てきて、ほんつと気持ち悪い」

基本的に一人でぶつぶつと文句と悪口を並べ立てているので高杉は特に返事をしない。

たまに振られてくる言葉にそうだね、それはひどいね、大変だったねと相槌を打つだけだ。

そんなイリスを見て色々溜まってるんだなーと世の世知辛さを感じるのであった。

二人が向かったのは一軒の酒場だった。  
広めの店内は賑やかで、料理の美味しいこの店はイリスのお気に入りだった。

店につく頃には美味しい料理が食べられる事もありイリスの機嫌もある程度直っていた。

そして明かりの漏れる扉をくぐると給仕の中年女性が迎えてくれた。

「あら、いらっしやい 二人かい？ そこ空いてるから座んな」

「ええ、ありがとう ロコナさん」

イリスがにっこりと答えると二人は言われた席へ向かおうとしたが、途中で野太い声に呼び止められる。

「おう、イリスじゃねーか」

その声にイリスは露骨に顔を顰めた。

酒で顔を真っ赤にした大男がイリスの前へ来たのだ。

「相変わらず別嬪だな、こっち来いよ 一緒に飲もうぜ」

酔っ払い特有の図々しさでその丸太のように太い腕をイリスの肩へ回すと酒臭い顔を近づけてくる。

せつかく直りかけていた機嫌はぶり返し、イリスの不快指数は増していくばかりだ。

「まーた始まったよ、兄貴の悪い癖が」

「また振られるんじゃないの？ この間も逃げられたばかりだし」  
周りにいた大男の仲間達が好き放題に言いながらニヤニヤと眺めている。

顔を会わせればいつも絡んでくるこの大男にイリスは辟易していた。一度本当に襲われそうになったときは肝を冷やしたものだ。

この大男とその仲間が素行の悪さが有名で泣きを見た女性も多い。いつもならば言葉でかわすか無視するか

その場を立ち去るかなどでやり過していたがしかしこの日は違った。バシッと肩に回された手を払い退けると見下したような目で大男を睨みつける。

「消えなさい ゴンザ、私は今とっても機嫌が悪いの」

冷え切ったイリスの言葉に、周囲の仲間達は一瞬呆気に取られるも途端に爆笑の渦に変わった。

仲間達は口々にゴンザを冷やかし煽り立てる。

ゴンザは酒で真っ赤な顔をさらに赤くしながらも平静を装いながら口を開いた。

「いつになく強気じゃねーか イリス

いいところこうぜ、お仕置きしてやるよ」

こめかみをピクピクと震わせながらも怒りを押さえ、にっこり笑うとイリスに手を伸ばした。

しかしイリスは再度その手を強く払いのける。

「言ったことが聞こえなかったかしら？ それとも言葉が通じない？ 耳が悪くて頭も悪い、そのうえ顔も悪いなんて終わってるわね」

挑発の言葉を重ねるイリスにとうとうゴンザも切れた。

仲間の前で大恥をかかされたのだ、黙って帰す訳にはいけなくなっていた。

「このアマ、調子に乗りやがって

そこまで言っただけで済むと思うんじゃないぞ?!」

ゴンザの怒声に関係なかった客もなんだと目を向け始め二人は店内のざわめきの中心となっていた。

凄むゴンザを冷ややかに見ながらイリスはフンッと鼻を鳴らす。

「タカスギ、懲らしめてやりなさい ただし表でね」

不意打ちだった。

完全に蚊帳の外で傍観者となっていた高杉はイリスの言葉に目を見開く。

その表情には「え？ 俺がやんの？」 という疑問符がはっきりと浮かんでいる。

だが当のイリスはまるで当然のような顔をしていた。

「私に降りかかる火の粉を払うのはあんたの役目の一つよ、強さを

見せなさい

けど保険はあるから安心していいわよ」

この娘はいったい何を言っているんだろうと、高杉は不思議なものを見るような目をしていた。

―第十話― 夜の酒場？

レイナスは目の先で何か揉めている黒髪の男をじつと見ていた。ヴァッツに面白い奴がいると言われ目を向けた先に探し人がいたのだ。

この区域にいる可能性が高いとは考えていたがこんなにも早く見つかるとは。横に立てかけておいた剣に手を伸ばすとぐつと握り締め腰を浮かそうとした。

「やめとけよ」

肉を口に運びながらヴァッツが口を開く。周囲の騒々しさとは無関係に食事を続けている。

「唯でさえ揉めてるんだ、下手な事したら逃げられるだけだぜ？」

レイナスはその言葉に浮かそうとした腰を戻すが手には剣を握ったままだ。

高杉を横目に捉えつつ騒ぎの原因になった娘について聞いた。

「お前、あの男と一緒にいるエルフの女を知っているのか？」

「ああ、知ってるぜ イリスちゃんの薬は良く効くからな、俺も使ってる

ついでに揉めてるのはグランツガーブの奴らだな」

「グランツガーブ？」

「冒険者の団隊だ、だがあいつらは雑魚だな 腕が立つのは二、三人ぐらいか？」

ゴンザのランクはB+、あの中じゃ上位だが 奴らは武闘派気取ってるただのチンピラ集団だ」

ランクとは冒険者ランクのことだ。B+は冒険者の中では中堅レベルといったところか。

そして団隊とはギルドに登録している冒険者同士の組織のことである。

団隊登録をしているとそれに応じた優遇措置を受ける事ができ、冒険者の多くは団隊に所属していた。

巨大な組織となると小国家と同等の格を有したり傭兵国家として国を興した組織まであった。

そんな話をしていると高杉を含め揉めている集団は外へ出始めた。それを見たレイナスとヴァッツは同時に腰を浮かす。

「そっぴゃお前、あのタカスギって奴に面は割れてるのか？」

見物しに外に出ようとする他の客に紛れながらヴァッツが聞く。

「いや、奴は覚えてないだろう」

「そっぴゃなかったらこんなに堂々としていない」

「それもそっぴゃか」

と納得するとヴァッツは見物しやすい場所を探し始めた。

高杉は目の前の一回り大きなゴンザを見ながらこの状況はなんだろうと考えていた。

ゴンザは物凄い形相で高杉を威嚇し、その仲間達からは罵声が飛んでいる。

「ぶち殺せ!!」「やっちまえゴンザ!」「にいちゃん死ぬなよ!」「殺せ!殺せ!!!」

周囲には店にいた客だけでなく通りにいた者達も集まり始め やはり罵声や怒声を上げていた。

酒も手伝ってか殺気だった柄の悪い男達はどんどん過激になっていく。

瓶や皿やコップ、ゴミのようなものも飛び交いなかには賭けまで始める輩までいる。

騒ぎ事が大好きなのだろう、互いに少し距離を取り向かいあっている高杉とゴンザを中心に



盛り上がりは最高潮に達しようとしていた。

「タカスギ、虎よ！ あんたは虎になるのよ！」

後ろから高杉の両肩を揉み解しながらイリスが鼓舞する。騒ぎの原因となった少女は好き勝手言っていた。

「あの、イリスさん？」

「集中して！ 奴をぶちのめすことだけを考えるのよ

あんたは冷酷無比な殺戮人形、無慈悲な鉄槌を下すのよ！」

「少し話しを聞いてくれ」

「なによ？ せっかく盛り上がってるのに」

「……とりあえずいつでも逃げれるようにはしておいてくれ

あいつをぶちのめしたら乱闘になりそうだ」

高杉はチラッとゴンザの仲間達に目をやった。

7人ぐらいだろうかゴンザの後ろから殺気を剥き出しに挑発と威嚇を繰り返している。

だがイリスはそんなものは問題ないような顔をしていた。

「大丈夫よ、私も少しは戦えるし保険も居るから

それよりあんたこそ気をつけなさい、あいつ結構やるわよ」

親衛騎士には随分劣ると思うけど、と心の中で付け加える。

イリスは高杉の強さを確認したかった。それは自分自身の目的のためにだ。

前面に出てガチンコ勝負ができる実力者

イリス自身が前に出て戦える力は無いためにそれを補う人物が必要だったのだ。

高杉が完調してからでもよかったが思わぬ所で訪れた機会を利用することにした。

万全の体調でしか戦えないのならイリスには必要ない。

もちろん、高杉を助けた時にはそんな事は考えておらずただの気まぐれと善意だった。

しかし高杉を見ているうちに、こいつは使えるかもしれないと欲がでてきたのだった。

イリスは高杉の変わらぬ表情に笑みを浮かべると

送り出すように肩をポンッと叩き後ろへ下がっていった。

「お祈りは済んだか？ クソ野郎」

両腕を上げて観客を煽っていたゴンザが高杉へ向きかえる。

その表情は余裕に満ちていた。

これから始まる一方的な暴力が待ち遠しくて仕方が無いといった感じか。

「祈りは必要ない、それよりもさっさとやろうか  
そうしないと終わらないんだろ？」

もはや話し合いで済む状況で無い事は高杉にもわかっていた。  
しかしできるならばこのような状況になるのは避けたかったのが本音だ。

この世界に来てからの身体の変化にはある程度は慣れてきたがそれは普段の生活に対してのみで、戦闘時の力加減にはまだ慣れていなかったからだ。  
宿屋の一件から相手の実力が高ければ高いほどその匙加減は繊細さを必要とする事を理解していた。  
相手を殺さないように殴るのは特に神経を使う、戦闘中ならば尚更だった。

「そんなに焦るなよ  
それよりおまえあいつの男か？ あいつの具合はどうだったよ？  
俺にも抱かせる、そうすりゃ半殺しで許してやるぜ？」

下卑た笑みを浮かべるゴンザ  
後ろからは なに言ってるのよー！とイリスの声が聞こえる。

「そういった関係ではないな、…お前もしかして嫉妬してるのか？  
ふと沸いた疑問を口にした高杉だがそれは大きな挑発となる。  
ゴンザの頭にカッと血が上った。

「クソがつ！ ぶっ殺してやるっ！！」

言い終わるや否やゴンザは両腕を広げ高杉を捕まえようと突進してきた。

己の巨体を最大限に利用した突進であり、普通ならばその迫力と威圧感で足が竦むだろう

しかしそれは高杉を格下と舐めきった傲慢さからか隙だらけだった。

これなら早く終わりそうだと向かってくるゴンザを高杉は迎え撃つ。軽く構えると前に出たがら空きの顔にハイキックを叩き込んだ。

ドゴツと鈍い打撃音がした瞬間、ゴンザのその巨体は横に吹き飛び家屋に叩きつけられた。

家屋の一部がガラガラ崩れ、埋まったゴンザが起き上がろうとする気配は一切ない。

目の前で繰り広げられた一瞬の決着にお祭り騒ぎだった周囲は静まり啞然としている。

体格差や知名度から言ってゴンザが負けるとは露ほども想像していなかったからだ。

現におこなわれていた賭け事は高杉の生死がネタにされていた。

イリスはその表情に自然と笑みが浮かんでいた。

まさか一撃とは、思わぬ拾いものに胸が高鳴っていた。

「おいおい、タフさが売りのゴンザを蹴り一発かよ」

ヴァッツは呆れたような声を上げた。　レイナスの話を話半分に聞いていたからだ。

「やはり危険だな」

レイナスはそう呟くと一歩前に出た。　が、ヴァッツが肩を掴みそれを静止する。

「さてよ、お前が目立って騎士だなんてばれたらそれこそ収集が付かなくなる

それよりこの件俺に任せてみないか？　悪いようにはしない」

思わぬ提案にレイナスは眉を動かし探るようにヴァッツを見返した。

「どうもお前の言ってるような奴には見えなくてな

この騒動はイリスちゃんの為だし、ゴンザにすら殺さないように気を使っていた

俺がしばらく様子をみて見極めてやるよ」

「何を考えている？　お前はそんなに面倒見が良くないだろう」

「なに　ちよつと興味が沸いただけだ

お前の言う通りの奴だったら俺がケリをつけてやるからよ」

「……………」

レイナスは再度考えを探ろうとするが  
へらつと笑みを浮かべているヴァッツからは何も読み取れない。  
その顔を眺めながらしばし考えたあとに結論を出した。

「…………… わかった、お前はよく嘘をつくが約束を破ったことは無かった  
お前がそう言うのならしばらく任せる、だが俺が危惧した通りだ  
った場合は……………」

「だからわかってるって、そんなに心配すんなよ禿げるぞ？」

馴れ馴れしく肩を組んでくるヴァッツに対してレイナスは複雑な表情をしていた。

―第十一話― 夜の酒場？

呆然としていたゴンザの仲間達は我に返り現状を理解した。

口々にゴンザの名を呼びながらかけよると揺すって気を付かせようとするが

だらんと垂れ下がった腕はピクリとも動かない。完全に気を失っているようだ。

野次馬達も状況を理解し始め、そのざわめきは広がっていく。

最初は戸惑いの声が大半だったが徐々にそれは高杉を賞賛する声に変わっていった。

この辺りで好き放題やっていたゴンザ達を嫌う者は多い。

逆らえば私刑にされ命を落としたものも少なくなかった。

嫌われ者の無法者が一撃でのされた事に胸がすく思いのした者達が歓声を上げたのだ。

しかし声には出さないがそれと同じぐらいに高杉に目をつけた者も多かった。

自分達の縄張りに厄介な新参者が来たことに警戒心を強くしたのだ。  
った。

「てめえっ！　ここから生きて帰れると思うんじゃないぞー！」

その怒声に周囲がどよめく。

ゴンザの仲間達が高杉を囲むように動き始めた。

その表情は殺気が満ち溢れいつ襲い掛かってもおかしくない雰囲気

だ。

「こいつら抜きやがった！！」

誰かが叫んだ。

殺気を漲らせ高杉を囲んだ男達は各々に抜き身の剣やナイフ、杖を構え始めたのだ。

巻き添えを食らってはかなわないと野次馬達は我さきにと逃げようとする。

辺りは騒然とした状況になっていく。緊迫した雰囲気の中に怒声と悲鳴が響いた。

高杉は後ろへチラリと目をやりイリスの姿と位置を確認した。

両手を腰にやった堂々とした立ち姿と余裕を浮かべた表情が目に入る。

その自信はどこからくるんだが…と高杉は思った。

高杉には不安材料が多かった、戦闘時の力加減もそうなのだが杖を構えている者が目に入ったのだ。

すっかり忘れていたが魔法と言うものが存在している事を思い出した。

魔法戦の経験など無いのでどのような攻撃をしてくるのか想像ができないうえに高杉は多対一の戦闘に慣れていなかった。

稽古では師匠である御剣と一対一ばかりしており  
たまにあつた出稽古で気休め程度に複数相手の鍛錬をしただけなのだ。



高杉はイリスを連れて逃げるタイミングを計ろうとする。そもそも馬鹿正直に受けて立つ必要はないのだ。一人ならばやられてもまあ仕方がないかと諦めもするが連れの女性が怪我を負わされ最悪な屈辱を味合わされるのはあまり想像したくない。やれば勝てるのかもしれないが必要のないリスクは負いたくなかった。

高杉を囲む男達がじりじりと慎重に間合いを詰める。

ゴンザを一撃で倒すほどの強敵ではあるが数は圧倒的に有利だ。きっかけさえ掴めば乱戦となり女を人質に取れば勝ち確定する。と男達は考えていた。

常に数の暴力で我を通してきたのだ。この有利な状況にいつも通りにやれば自分達に勝てる者はそういないと自信があつた。

睨み合い一触即発の状況を周りの者達は遠めに見詰めている。張り詰めた空気の中に割って入り止めようとする者は誰もいない。そのような事をしたらただで済まないのは自分なのだしそもそもそんな義理はない。誰もがただ見守っているだけ……のように思えた。

スタスタと緊張感が漂う状況などお構いなく青年が近づいてきた。注目を一身に浴びるがそんな事は一切気にしていない様子だ。

「ヴァッツてめえ、なんの用だ？」

男達の一人が近づいてきたヴァッツを睨みつける。が怯む様子は微塵も無い。

「そこまでだ、唯のケンカなら口出ししねえが抜くなら別だ」

淡々と言うヴァッツに対して男達は威勢は良いが何かに怯えているように見える。

その怯えを振り切り虚勢をはるように怒鳴り声を上げた。

「てめえにや関係ねえだろ！！」

「関係あるね、イリスちゃんは友達だ」

どうしてもやるってんなら覚悟はできてんだろっな？」

ヴァッツは凄みを帯びた笑みを浮かべる。既に勝負は決着していた。

古株のヴァッツと男達の序列と実力差ははっきりしていたのだ。無法者が多いたためにこの区域で生活する者は特に上下関係には敏感だ。

それはここで長く生きていくためには必須の能力だった。

余裕のヴァッツを男達は睨んでいたがそれは長くは続かなかった。

「……ちっ！くそがつ！！　おい、いくぞー！」

少しの沈黙のあと、高杉をひと睨みすると男達は背を向け

いまだに気を失っているゴンザを数人で引きずりながらその場から離れていく。

どよめく周囲をよそにどうやら戦わずに済んだようだ。高杉は胸を撫で下ろす。

去っていく男達の背が小さくなっていくのを見届けたあとこの場を収めた青年へ向き直った。

「礼を言うよ、無駄な争いをせずに済んだようだ。貴方はイリスさんの知り合いなのか？」

乱入してきた青年を高杉は改めてみた。

どこか飄々としているがその隙の無い立ち姿は只者ではないことを示していた。

「気にすんな、俺はヴァッツだ。イリスちゃんにはよく薬を売ってもらってな」

ヴァッツは名乗りながら人懐っこい笑みを浮かべている。

初対面でもなぜかすぐに気を許せてしまうような気安さがあった。

「高杉だ、よろしくヴァッツさん」

「ヴァッツでいいぜ、俺もタカスギって呼ぶからよ」

お互いに名乗りあい握手したところでイリスがやってきた。

「ひさしぶりね、ヴァッツ」

「や、ひさしぶりイリスちゃん 相変わらず喧嘩っ早いね」

「失礼ね、勝てる喧嘩だから売ったのよ タカスギとあんたが居たからね」

「あんたが居ないあいだあいっすら遣りたい放題だったんだからいい薬よ」

「あれ？ いたの気づいてたんだ？ ま、俺がいなくても問題なかったみたいけど？」

とヴァッツは高杉に目をやった。その目は高杉を観察しているようにも見える。

「まあね、タカスギ あんた思ったよりやるわね」

なぜかイリスは誇らしそうな表情をしていた。なにやら嬉しそうなのがその雰囲気からわかる。

一方の高杉はイリス達の遣り取りから保険とはなんだったのか合点がいった。

「保険とはヴァッツのことだったか」

「そうよ、ほんとに危なくなったら引つ張りだそうと思ってたんだけどね」

イリスは高杉に答えてからヴァッツに向き直るとこれからの予定を聞いた。

「私達これからご飯食べるけどあんたどうすんの？ 連れがいたで

「しょ？」

「ああ、あいつは帰ったから俺も酒に付き合おうよ」

「わかったわ、あんたには動いてもらったし私がおごってあげる  
タカスギもね」

先ほどまでの野次馬達は既に解散しはじめ数人が高杉達に注目して  
いるだけだ。

店に向かうイリスと高杉の後ろを歩いていたヴァッツはやはり遠巻  
きに

見詰めているレイナスにまたなと仕草で別れを告げると店に入って  
いった。

「……そついう事が、あいつらしいな」

すんなり目当ての人物と仲良くなれるのはその人柄のせいか  
自分には中々できないやり方をあっさりしてしまうのは少し羨まし  
く思った。

しかしこれなら警戒されずに相手の動向を監視しやすい。

「……頼んだぞ、ヴァッツ ……………店の勘定もな」

そう心の中で呟くとレイナスは夜の闇に消えていった。

―第十二話― 冒険者ギルド 出張所

「グルルウウ…」

高杉の前方で魔獣が唸り声をあげた。

虎のようだが発達した牙とその額には角のようなものが生えている。魔獣はキラータイガーといい、魔法も使ってくる手強い相手だった。魔法についてはヴァッツに基本的なことを教わっていたが対応できるか怪しいものだ。

横ではヴァッツが観察するように立っているが援護する様子は全く無い。

ネアビュリス城塞都市から北東に約六十キロ ミスル―溪谷で高杉は三匹のキラータイガーと対峙していた。

バチバチっと前方のキラータイガーが身体の周囲に雷を帯び始めた。なんだ？ と高杉は警戒を強くし身構える。

「気をつけるタカスギ！ 魔法を使ってくるぞ！」

ヴァッツの怒鳴り声が聞こえたと同時にキラータイガーが雄たけびをあげた。

「ガウアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

その瞬間、キラータイガーが帯びていた雷が電撃となり高杉に襲い掛かった。

恐ろしいほどの速度で襲ってくる電撃を高杉は横に飛び済んでのころでかわす。

バシッと音がし高杉のいた所は黒く焦げ煙が燻っていた。それを見た高杉は背中に冷や汗を掻いた。まともに食らってはただでは済まないことがそれを見ただけでわかったからだ。

――これがこいつの…魔法

ドツドツドツドと心臓が早鐘のように打っていた。

この世界ではこのような得体のしれない力で相手を殺そうとするのだ。

しかし改めて考えるとなんと恐ろしい事か、この世界での命の重みは日本とは決定的に違う。

結果としてやられたのなら受け入れるが、わざわざ自分からやられようとは思わない

背筋に寒気が走り気持ちが悪えそうになる。そもそも高杉は殺し合いの経験などほとんどない。

これまでマンティコアや親衛騎士とそれぞれ戦ったが

それはやむを得ない状況で必死だったし特に大きかったのは逃げが前提だったことだ。

命で決着をつける前に逃げればよかったのだ。

しかし今回は違う、いま対峙している相手は自分から喧嘩を売ったのだ。

これまでと違い自分から自分の目的のために相手の命を狩ろうとしたのだ。

今更とは思うがやはりどこか夢の世界の出来事と捉えていたのだろうか。

何かかこみ上げ吐き気をもよおす、自分の無謀さと考えの浅さに後



悔すら覚える。

だがこれがいま自分が首をつっこもうとしている仕事なのだ。

高杉は萎えそうになる気持ち奮い立たせ改めて気を引き締めるのだった。

それは約六時間前に遡る

高杉は朝のひんやりとした透き通った空気の中

裏庭で元々の日課だった朝稽古を終えると近くの井戸で素っ裸になり汗を流し始めた。

毎度のことながら朝の井戸の水は少し冷たいな などと考えていると人の気配がした。

「うーす、約束どおりきたぞお」

声のしたほうへ顔を向けると、片手を挙げながらヴァッツが気だるそうに裏庭にやってきた。

朝に弱いのかその表情はとても眠たそうだ。

「おはよう ヴァッツ、今日はよろしく頼むよ」

高杉は向き直りながらその眠たそうな青年を迎えた。  
全く隠そうともしない堂々とした姿だ。

「……朝っぱらからナニやってんだよお前は」

「少し汗をかいてね、準備するから少し待っていてくれ」

そう告げもう一度井戸の水を被ると満足したのか身体を拭き始めた。

「……変な奴」

と思いつつながらヴァッツはあくびをかみ締めながら近くの岩に腰を下ろした。

ヴァッツが高杉を尋ねてきた理由は、三日前の酒場での騒動後にあ

った。

イリスの奢りで食事をした際に色々とお互いの話をしたのだが高杉が城塞都市に來たのがつい最近で仕事を探そうとしている事が話題になったときだ。

ヴァッツの 冒険者やればいいじゃねーか、俺が手伝ってやるよとの言葉からだった。

それにはイリスも乗り気で進めてきたうえに、ヴァッツは冒険者がどんな仕事を細かく説明してきた。

二人に押されるまま他に仕事も無いので高杉は冒険者をする事となったのだ。

出かける準備のために部屋に戻り再度着替えると

元の世界から持ってきたバッグではなく事前に用意したウエストバッグのような古い鞆を

ベルトループに通してずれないようにしっかりと身に着ける。

中にはお金と干し肉や水筒、薬草、包帯などが入っており

外部には落ちないようにフックと皮のベルトで手甲が固定されていた。

居間で朝食後のお茶を飲んでいたイリスに出掛けることを告げるとまずは冒険者ギルドへ向かうことにする。

貧民区域にはギルドの貧民区支部とそれに連なる出張所が数箇所あるので

とりあえず一番近い出張所へ向かうことにした。

少し歩くとこきたない路地裏のおんぼろな建物の二階にその出張所

はあり  
出ている看板には 冒険者ギルド ウィネツシュ出張所 と書かれてある。

「ここってこんなだったのかよ、失敗したかあ？」

思わずヴァッツは渋い表情をする。

普段はギルドの貧民区支部を使っているためにここに来たのは初めてのようだ。

しかし高杉はそんな事は気にしていない様子だ。

「ここでいいよ、今から別の場所に行くのも面倒だ」

「うーん、所属する所にも意味はあるんだが、ま お前がいいんならいいか」

少しどうかと考えたが後からどうとでもなる事だったので気にしない事にした。

ネアビュリス城塞都市での冒険者ギルドはギルド城塞都市本部が各区支部を管理し

各区支部がそれぞれ傘下の出張所を管理するといった構造だった。

ギルド城塞都市本部は基本的に国や上位組織からの依頼

大規模案件、最重要案件などしか取り扱わず

普段は都市内に広がる各区支部や出張所の管理、他地域ギルドとの調整などを主に行っていた。

そのため大多数の案件は各区支部以下が取り扱っている。案件は区支部間で共有し出張所は直属の区支部から来る配達人から案件情報を受け取るなど  
できるだけ案件共有されるようにしているがやはり偏りは出てくる。出張所に持ち込まれる案件は情報の共有が遅くなるし  
依頼主の希望や依頼料などによってどうしても各区支部や各出張所での取り扱い案件に差がでていた。

ヴァッツが気にしたのは本登録する場所によって出てくる恩恵の差だった。

区支部や出張所などは自分の所が管理をしている冒険者が活躍すればするほど利益や影響力が増してくる。

影響力が強くなれば出張所は区支部に 区支部は本部にそれぞれ便宜を図ってもらえるようになるため  
世間からの信頼も高くなりそこへ直接依頼を出そうとする依頼主も多くなっていくのだ。

人気や信頼が高ければ共有されている案件以外にも独自の案件が増え選択肢も広がる。

当たり前だがそういった所はそこに本登録されている冒険者へ優先してその案件を紹介したり  
持ち込まれたレアなアイテムを優先して回したりしていた。

他にも区支部や出張所はそれぞれ独自の特性を出し優秀な冒険者を充実させ成績を競っていたのだった。  
冒険者にとっても自分が本登録されている所が人気があればその恩恵に預かりやすくなるのだ。

上記のような事もあり各区支部へ本登録しようとする冒険者ばかりになりそうだが

現在の区支部への本登録は区支部独自の試験を突破するか

実績を残し一定ランク以上になってからの移籍など出張所で本登録するより高いハードルが課せられていた。そのためネアビュリス城塞都市を拠点とする冒険者にとって各区支部に本登録されていることは一種のステータスとなっていた。

高杉達は表にある階段から直接二階にいきウイネットシュ出張所へ入った。

屋内は雑多としており小さな事務所といった感じだ。

見回すと一人の女性が鼻歌を歌いながら掃除をしているのが目に入った。他には誰もいないようだ。

「忙しいところすまない」

高杉がその女性に声を掛けると、いま気づいたようにビクツとしたあとこちらに顔を向けた。

その表情は何かに怯えているようにも見える。

「あ、あのどちら様ですか？」

「冒険者の登録をしたいんだが、できるだろうか？」

女性は目を瞬かせなぜか驚愕したような表情をしたあとフラフラと高杉へ近づくと震える声で確認してきた。

「こ、ここで登録をなさりたいんですか？ ほ、本当に？」

取立てじゃなくて その、冒険者の登録をなさりたいんですか？」

「あ、ああ　そのためにきたのだが」

女性の瞳から涙がひとすじ流れた。

半ば放心したようになにやら感慨に耽っているようだ。

なんだなんだとヴァッツが横から聞いてくるのを聞きながら  
ここは大丈夫なんだろうかと高杉は不安に駆られた。

## ―第十三話― 冒険者ギルド 出張所の人

ソファーに座った高杉とヴァッツは前方にテーブルを挟んで座っている出張所の女性と

向かいあっていた。そしてその女性はおずおずと書類を差し出してきた。

「それで、問題が無ければここにサインとあとはこの魔法水晶に手をつけて

この紙に手を押し付けてください」

その書類にはギルドと冒険者との契約について書かれており

簡単に言えば冒険者の活動に際して如何なる不測の事態が起きてもギルド側は

その責任を一切負わないといった内容だった。

高杉達は先ほどまで冒険者について基本的な説明を受けていた。

それについて問題が無いのなら登録のために書類にサインをしてくれと言われたのだ。

女性には以下のようなことが説明されていた。

冒険者の登録には登録料 金貨1枚が必要となる。

一般から見ればべらぼうに高いが基本的に登録するだけなら必要なのは金だけなために

それになり金額が設定されていた。



登録後にもらえる冒険者カードは簡易的な身分証にもなるためだからだ。

冒険者はランク分けがされており、SSS～Eランクまである。

ランクを上げるには依頼をこなすか指定魔獣討伐、指定物収集、未到達地域の探索

稀少物新発見物収集などで冒険者ポイントが溜まり規定値以上になること

それに伴い審査に掛けられそれをパスすることだった。

但し例外も存在し特別危険指定魔獣の討伐、社会への多大なる貢献、国家、ギルドの推薦などで

ポイントに関係なくランクが上がる場合もあった。

高ランクの冒険者となると依頼の優先手配、指定依頼の増加に伴う多額な報酬

国家からの高待遇、特殊武具やレアアイテムの優先権など様々な恩恵を受けられた。

受けられる依頼については同ランクかそれ以下のランクに設定された依頼のみであるが

パーティを組んでいる場合はパーティ内の最高ランク者を基準とされた。

また団隊登録も行うことができ登録をしていると最低募集人数が設定されている依頼などを

優先的に紹介してもらえるほか団隊割引などがあり、団隊ポイントが貯まると

高ランクの冒険者と同じような優遇措置が団隊員全員が受けられるようになっていた。

依頼は受付窓口のあるギルド施設ならどこでも受けることができる

が、本登録している場所で受けると  
そこ独自の案件を優先紹介してもらえたり、達成のために補助アイ  
テムを援助してくれたりするのだ。

他に依頼達成報告の仕方、収集物の換金方法、冒険者専用の荷物預  
かり、冒険者保険

トラブル相談窓口、情報共有窓口、各種事務手続きの行い方など  
一部は出張所では対応しておらず支部などの上位施設になるが各種  
手続きと利用施設の説明を一通り受けていた。

「エリーゼさん、先ほど……俺達がここへ来たとき様子がおかしか  
ったようだが」

何故だ？と言外に含ませながら高杉はエリーゼと呼んだ目の前の女  
性をみた。

その問いにエリーゼは身体をピクッと震わせた。

「借金取りと間違えてたみてえだが、お前の目つきがわりいからじ  
やねえの？」

横からヴァッツが茶化してくる。エリーゼはどうすべきか逡巡して  
いるようだ。

「…言いたくないならいいさ」

高杉もあまり興味がなかったようで、ただ何となく聞いたといった感じを見せた。

だがその素っ気無さにエリーゼは逆に居心地が悪くなる。

「あ、あのごめんなさい ヴァッツさんの言った通りでその取立ての人と間違えてしまって…」

あなたの目つきが怖いとかじゃないんです…いえ ほんと怖いんですけどそうじゃないんです…」

言葉を慎重に選んでいるようで失礼な事を言ってきた。

ムウと黙っている高杉の肩をヴァッツは慰めるように軽く叩く。

「ま、確かに繁盛しているようには見えねえな」

ヴァッツは室内を見回した、室内は雑多としているが掃除は行き届いているようだ。

だがここには高杉達三人しかいない、彼らが来てからそれなりに時間が立っているのにも関わらずにだ。

普通ならば朝から冒険者や依頼主が来ていてもおかしくはない。

「ええ…で、でも！ 確かに大手さんには敵わないですけどできる限りのサポートはさせてもらいますから、だから…」

登録してくださいと続けたかったのだろうか、エリーゼは俯いた。どうする？とヴァッツが表情で聞いている。

「別に倒産するとかじゃなければ構わない」

高杉としては登録できればいいだけなのだから  
気にしてなくいいと安心させようとしていったのだがそれは逆効果  
だった。

エリーゼにビククウと今までに無い震えがおこった。

「…潰れそうなのか？」

「……………」

黙っているその態度が肯定を意味していた。

「ヴァッツ、仮に登録している所が潰れたとして冒険者に何か不利  
益はあるのか？」

「そうだな、基本的にはほとんど影響はねえよ 潰れたところで登  
録は他に移行させられるだけだからよ

だがギルドもそうだが冒険者もことこん信用が命だ、特に依頼  
をこなす事を主体としてる冒険者はな

潰れたのはその冒険者がだらしないからだと言う奴は少なから  
ずいる、ギルド側も依頼側も

ひでえ言いがかりだがな、ま 依頼をこなすだけが仕事じゃねえし  
実績積んでけばそういう連中は黙るから気にする必要も無い」

「なら問題ないか…」

高杉のその眩きにエリーゼはバツと顔を上げた その表情は期待に  
満ちている。

が、次のヴァッツの疑問にまた顔を強張らせることになった。

「ところでなんで潰れそうなんだ？ 出張所なんてそう潰れないだろ？」

ヴァッツの言うとおり他地域はともかく城塞都市では出張所を開くための認可を取るのが

とても難しいので競合も少なく、依頼の多い大都市で自主廃業はともかく潰れることは滅多になかった。

だから潰れたらその冒険者がだらしないといった陰口に繋がっていたのだ。

微妙な空気が流れた。

黙っているエリーゼを横目に高杉は出されていたお茶に口をつける。ズズツと茶を啜る音がやけに響いた。

「……おっしゃるとおりです、ここは元々冒険者だった父が開いたんです。

父がいた時はとっても賑やかだったんですよ？一階も事務所が開いて…

…いまはこんなですけどね」

そう寂しげに笑いながらエリーゼは続けた。

「でも父がいなくなつて、この場所を守りたくて私が継いで…

信用がなかったんでしょね、冒険者をしたことがないうえに知識も無い私が管理者では

少しずつ他に登録を移す人が出てきて、……私もがんばったんですよ？

一生懸命勉強して、みんなが満足できるように少しでも安全に気持ちよく仕事ができるように…

でも移っていく人は止まらなくて、最後には問題を起こす人もで

て…それで…

こうなってしまうたらもうお終いなんでしょうか？

新しく来た人もすぐに他に移ってしまふんです、私ももうどうすればいいかわからなくて…」

話しているうちに色々と思い出したのだろうか、エリーゼのその瞳には薄っすらと涙が浮かんでいる。

微妙だった空気はズンと重くなっていた。

ズズズツと再度お茶を啜る音が響いた。

高杉はチラッとヴァッツを見る

余計な事を言ったお前がこの妙な空気を何とかしろと訴えていた。

高杉からの無言の圧力にヴァッツは渋々口を開こうとするが

その前にエリーゼが顔を真っ赤にし目を擦りながら再び話はじめた。

「ご、ごめんなさい … 私なに言ってるんでしょうね、初めて会った人たちに

… そうだ、いい出張所があるんです 私も良くお世話になってて  
そこ紹介しますから、ちょっと待っててください」

そう言うと返事を待たずに立ち上がり奥の部屋へ小走りに行ってしまった。

「どうすんだよ？」

ヴァッツが目を向けながら聞いてきた。

当たり前だがお前の事なんだからお前が決めるところか。

高杉はそうだなと答えただけでその表情には何も浮かんでいなかった。

た。

少し待っているとエリーゼは手に紙を持ちやはり小走りに戻ってきた。

「あの、ここなんですけど…」

そう言いながら紙にかかれた地図を指差すが、高杉はその紙に興味を示さなかった。

「それは必要ない」

「え？」

エリーゼは一瞬意味が理解できずに顔を上げた。それを見ながら高杉は再度ゆっくりと言った。

「ここで登録するからその紙は必要ない」

エリーゼがまじまじと高杉を見詰めてくる。

「そ、その ほ、ほんとうに？」

驚きを浮かべ確認してくるエリーゼに高杉は頷きで返したのだった。

―第十四話― 冒険者ギルド 出張所で登録

高杉はエリーゼに契約書類を読み上げてもらったあと（読めないの  
で）サインを始めた。  
文字も書けないので事前にお手本を書いてもらってそれを見ながら  
だが。

「あとはこの水晶に手をつければいいのか？」

「はい、手を付けたあとこの紙に押し付けてください」

エリーゼはニコニコと満面の笑みで説明している。

言われたように高杉は水晶に手をつけると、薄く淡い光が手を包ん  
だのでそのまま紙に押し付けた。  
すると淡い光が拡散し紙に文字が浮かび上がってきた。

「これは…」

「それはタカスギさんの基本情報が焼き付けられてるんですよ」

エリーゼの説明によるとその紙には高杉の氏名、年齢、身長、体重、  
魔力、種族などが

書き込まれたそうだ。読めないが珍しかったので高杉が眺めていると  
同じく横から見ていたヴァッツが疑問の声を上げた。

「おい、ここおかしくないか？」

とそこを指差した。エリーゼもあら？と首を傾げる。



「種族が「人間？」って書いてありますね」

「くく、なんで疑問系なんだよ？」

「混血かなにかでしょうか？ でもその場合は両親の種族が乗りま  
すし……」

高杉を蚊帳の外に二人はあーだこーだ言っている。

しばらくその様子を眺めていたが結論がでないようなので口を挟ん  
だ。

「不備があるようならもう一度するが」

「いえ、他は問題ないようなので大丈夫だと思いますが……」

「そつだな、魔力は微、属性は不明（読み取り不可）、生誕地は…  
ニホン？」

「国の名前だよな？それとも地名か？ ……どっかで聞いたことはあ  
るんだが」

ヴァッツが一部を読み上げながら確認していくが  
最後の何気ない呟きは高杉にとっては聞き逃せないものだった。

「どこだ、どこで聞いたんだ?!」

急に真剣な表情で問い詰めてきた高杉にヴァッツは多少驚きつつも  
訝しげに見返した。

「どうしたんだよ、急に？」

あまり感情を表さない高杉の変化にヴァッツも探るような目になる。その目に高杉も気づいた。本当ならばとことん問い詰めたい、自分が日本へ帰れるかもしれない手がかりなのだ。

だが必死になればなるほど相手も問い返してくるだろう。

その時なんと言えばいいのか、自分が異世界から来たなどと言っても笑われるだけだ。

記憶喪失だとしても言えばいいのか？　しかしそんなそぶりをヴァッツには見せてこなかった。

高杉は衝動を押さえ込んだ、手がかりがあるとわかっただけでも儲けものなのだ。

「いや、すまない　だが思い出したら教えてくれないだろうか？」

「ああ、なにか思い出したらな」

ヴァッツはそう答えながら高杉の感情の揺れにこれは何かあるかと考えていた。

「それではこれで手続きは終わりになります

冒険者カードは明日ギルドから届きますから取りにきてください

ね

深刻になりそうだった雰囲気を振り払うようにエリーゼは明るく言った。

「わかった、ところで今日から依頼は受けられるだろうか？」

高杉は登録料を払ったらほとんど持ち金がなくなってしまったのだ。少しでも仕事をして稼がねばならない。

「はい、大丈夫ですよ どういった依頼がご希望ですか？」

魔獣討伐から迷子探しや畑仕事までいろいろありますが…」

そう問われて高杉は考え込む。

なにをやるにしても知識が足りないのは仕方の無い事だろうが

ここはやはり自分の能力を生かせる戦闘系だろうかとなどと考えていたが

それを差し置いてヴァッツが声を上げた。

「ランクC以上の魔獣討伐が必要な依頼を出してくれ」

その声が高杉は怪訝な表情をしエリーゼは難色を示した。

「え？でもタカスギさんは登録したばかりでランクが…」

エリーゼは心配そうな表情を浮かべている。

ランクが足りないのもあるがせっかく登録してくれた冒険者にいきなり危険な依頼を出したくはなかったのだ。

だがそんな心配をよそにヴァッツは懐から冒険者カードを取り出す。

「大丈夫だ、俺とパーティで依頼を受けるからよ」

「ラ、ランクSですか、はじめてみました」

そう言えばヴァッツさんの名前って どこかで聞いた事があると思ったら支部の…

わかりました それなら…」

エリーゼは余り多くはないランクSのカードとヴァッツを交互に見たあと

納得すると奥の棚から紙の束を持ち出してきた。

熟練の冒険者が行動を共にするのなら大丈夫どころか、勉強になることも多いはずだと判断したからだ。

「とりあえずこの中から良さそうなのがあるか探してください」

私は奥の部屋でタカスギさんの登録をしますから」

エリーゼはそう言つと奥の部屋へ行つてしまった。

横ではヴァッツはなにがあるかな〜と言いながら依頼書を机に広げはじめ。

が高杉は勝手に話を進めたヴァッツに少し不満気だ。

「どついつつもりだ？」

「何が？ お前だって退屈な仕事はしたくないだろ？」

「しかし順序というものがあるだろう」

高杉としては冒険者とは未知の仕事だ。

相応のランク毎の仕事をこなしていこうとは思っていただけのことだった。しかしヴァッツは首を振る。

「ゴンザって覚えてるか？ あいつのランクはB+だったんだぜ？ そいつを蹴り一発でぶっ飛ばした奴が低ランクの仕事なんかしたって時間の無駄だ」

お前ならすぐにランクCになれるよ、俺も暇なときに手伝ってやるからよ」

とヴァッツは簡単に言っているが  
Cランクになれるかどうかは駆け出しの冒険者にとっては大きな山場だ。

半人前が一人前に認められる境であり、実際にそこまで辿り着ける冒険者は半数以下だった。

ランクが上がれば必ず求められる戦闘能力が足らずに脱落する者が多いのだ。

低ランクには非戦闘系の仕事も多くそれだけをこなしている者もいるが

それならば普通に働いた方が実入りも良い、危険な仕事をするから冒険者なのだ。

そういうモノなのか？と高杉が考えているうちに  
ヴァッツは一枚の依頼書を取り上げる。

「こいつにしようぜ、キラータイガー討伐 ランクBの仕事だが余裕だ」

「あいな」

「だからやばかったら俺が殺るって」

何度かやるかやらないか揉めていたがいやに押し強いヴァッツに結局高杉は最後には了承してしまった。

確かにヴァッツの言うとおり、ランクB+らしいゴンザをのしただ。

それゆえにそれほど心配することでも無いのかとも考えていた。

しかしそれは魔法をよく知らなかった無知からきていた事をあとで知ることとなった。

そして戻ってきたエリーゼに手続きをしてもらおうと正式に受注が決まった。

「タカスギさん、絶対に無理はしないでください

依頼の達成よりも命の方が大事なんですから」

高杉達を見送るために一階まできたエリーゼは心配で心配で堪らないといった表情をしている。

いきなりBランクの仕事をすると言われたときには反射的に反対をしていた。

実際にヴァッツがランクSで無ければ絶対に止めている任務だ。

「大丈夫だ、エリーゼさん ランクSのヴァッツがいるし、そいつが認めている俺の実力を信じろ」

あえて高杉は余裕な態度を取った。

今更うるたえても仕方が無いし余計な心配をかけるのも悪かったからだ。

「…そうですね 冒険者を信じるのも私の役目です  
がんばってください、無事に戻ってくるのを待っています」

エリーゼは相変わらず不安そうではあるが  
それでも笑顔で高杉達の姿が見えなくなるまで見送っていた。

## ―第十五話― 認識の違いと魔法

貧民区域の外壁には外に繋がる出口が四箇所ある。

元々設置されていた貧民区壁門、難民集落と繋がっている集落口そしてバランスを取って開けられた

上外部口と下外部口だ。

都市行政が正式に設置していたのは貧民区壁門だけでありそこだけは都市が管理していたが

他の抜け穴ともいえる出口はマフィアが管理していた。

この他に穴が開けられていないのはマフィアが睨みを利かせていたからだ。

貧民区壁門以外はマフィアが通行料を取っておりシノギの一つとなっていた。

ちなみに年間通行手形を発行したりとサービスも充実していた。

都市防備が著しく低下しているうえにやりたい放題のマフィアに都市議会は貧民区域をより隔離するため部分的にあった都市内壁を強化しつつあったがそれはまた別の話だった。

高杉達は下外部口から都市の外にでていた。そこは人がまばらに行



き来し

少し先には農園が広がり牛や馬なども見えるなんともどかな風景だった。

「さーて、走るかあ」

ヴァッツが軽く身体をほぐしながら言った。

しかしエリーゼから渡された大雑把な地図を確認したが結構な距離があつたはずだ。

すっかり馬で行くと思つていた高杉は聞き返した。

「目的地まで相当距離があつたはずだが 走るのか？」

「これも鍛錬の一つだ、冒険者は常に鍛えてないといけないんだぜ 新人くん？」

「それとも自信ないか？」

「いや、問題ないが…」

むしろ根を上げるのはお前なんじゃないか と言いかけて飲み込む。距離はあるが今の高杉には問題ないことは確かだった。

「よし、そんじゃ いくか」

高杉の返事にニツと笑うとヴァッツは走り出した。

思ったより加速していくその走りに高杉は慌てて追いかける。

走りだしながらこの速度はやはり持たないのではと考えていた。

しばらくのあいだお互いに無言で走り続けた。小山を駆け上り草原を走り抜けていく。たまにある川を飛び越え、木々を縫う様に走りながらもその速度は衰えない。道順はヴァッツの頭に入っているらしくその足取りに迷いはなかった。

前を走るヴァッツを見ながら高杉はずっと違和感を感じていた。走り始めて二時間ぐらいはたっているはずだが、それなのに一向に速度を落とす気配が無いのだ。

この速度で平坦でもない地形をこれだけ走るのはマラソンランナーでも無理だ。

自分の身体能力は異様に高まっていると思っていたが実はそうでもないのかとすら思えてくる。

「ヴァッツ 少し聞きたいことがある」

高杉は少し速度を上げ併走すると声をかけた。

「なんだよ？ ばてたか？」

「いや、変なことを聞くようだが これだけ走れるのは普通なのか？ その そうだな たとえば一般の兵士とかは？」

この世界ではこれが普通なのかと聞きたかったが、それも言えないので少しおかしな聞き方になった。その問いにヴァッツは少し不思議そうな顔をする。

「？ フォゼルティアの兵士はつてことか？

フォゼルティアに限らず普通の兵士がこれだけ走れたらそこは最強の軍だな

ゴンザとかおそらくすぐへばるぜ？」

「ならなぜお前はそんなに走れる？ 少し異常だとは思わないのか？」

「そついうお前はどつなんだよ？」

平気なツラして、正直ここまでついてこられるとは思わなかったぜ？」

実はヴァッツは結構疲れていた。ランクSのプライドからか表には出さなかったが。

高杉の能力が見たくてそれなりの速度を出していたが一向にギブアップしないどころか平気そうな様子に内心驚いていたのだ。

「俺のことはいい」

「はいはい、そついやお前つてもものすごい田舎の出だつて言つてたな自分だけが妙に身体能力が高かつたとかだつたのか？」

「…まあ、そついうことだ」

「魔力だつて高い奴は異様に高いだろ？ それと同じだ

身体能力だつて素質がある奴がそれを伸ばせば桁違いになる

身体が頑丈だとか力が強いとか たまにそついう素質を持った奴が出てくるんだよ

もちろん個人差はあるし鍛えなきゃ意味はないがな  
だが冒険者や軍のトップクラスなんかは  
そんな化けもんがゴロゴロいるんだからたまんねえよな」

とヴァッツは自分のことを棚に上げて言った。

一方の高杉はそれを神妙に聞いている、それを見たヴァッツは更に続ける。

「なに深刻な顔してんだよ？」

そんな奴らには滅多に会わねえし、会っても近づかなければいい  
…まさかお前　そういう奴らと戦おうとか思ってたのか？」

ヴァッツの目が鋭くなった、レイナスの話を思い出したからだ。

「そんなわけあるか、ただはじめて聞く話だから驚いたただけだ  
ところでこれから戦う魔獣は魔法使ってくるようだが、魔法のこ  
とも教えてくれないか？」

高杉は知っている常識とは随分違うことに戸惑いを覚えていた。  
才能の差は元の世界にもあったがここまで幅のあるものではなかつ  
た。

自分の身体能力ははずば抜けていると考えていたが  
その考えは修正した方が良いかもしれないとさえ思い始めていた。  
そして元の世界の常識では測れないもう一つの要素　魔法も気にな  
っていた。

自分と同等に鍛えられた相手が現れ　しかも魔法を使えた場合  
圧倒的に不利な立場に立たされるのではと危惧したのだ。

進んで戦おうとは思わないが冒険者をする以上　対人戦闘をする可  
能性もあるからだ。

「魔法？ 属性とかか？」

「いやそういつた概要はある程度知っている できれば戦いに役立つ事で基本的なことがいい」

「そうだな…」

とヴァッツは少し考えながら説明をはじめた。

魔法で大事なのはイメージ、精神力、魔力 の三つの要素だ  
起こしたい現象を想像し、その通りになるんだと意思を込め、練り上げた魔力で発現する。

この三つの要素が一つでも欠ければ魔法は失敗する。  
魔法を使用するときには呪文を唱えるのが一般的だ。

呪文には特定の現象のイメージが練りこめられており、必要魔力が最適化されている。

曖昧なイメージでも必要最低限の魔力と意思の力を乗せれば魔法が発現できるようになる。

自分の力量以上の魔法も呪文の手助けで発現できたりするのだ。

呪文を唱えずとも魔法は使えるがそれは余程の熟練者でなければ難しい。

より正確なイメージと強い意志、そして必要な魔力も増大するのだ。  
効率が悪いうえに失敗する可能性も高いため、魔法を使うのに呪文を唱えないものは滅多にいない。

ここまで聞いて高杉が口をはさんだ。

「俺みたいに魔法を使えない者が 魔法を使う相手と戦うときに気をつけることは？」

「あー 魔法には魔法で対抗したほうが手っ取り早いんだが

お前はそれができないんだよな 魔力が微だったし

一番簡単なのは魔法を使う前に倒す事だが、そもいかない事のほうが多いしな…」

そこからさらにヴァッツは説明を進める。

呪文を唱え始めたらそれを妨害し中断させれば魔法は発動しない。

発現の時にはその前兆が現れる、魔法は完全に発動していなければ妨害可能だが

前兆が現れたという事はその魔法の完成が近いという事だ。どう行動するかをより素早く判断しなければならぬ。

魔法は魔力が無い者でも意思の力で抵抗することができる。

相手の意思より より強い意志を持ち抵抗すれば魔法を構成する要素の一つである

精神力を打ち消し魔法を消滅させることができる

しかしすでに発動した物理的な魔法に対して精神力だけで対抗することは非常に難しい。

なぜならその魔法はすでに精神力と魔力が融合しているからだ。

打ち消すにはより強大な意思の力が必要になる。できない事はないが普通に避けたほうが無難だ。

逆に身体に直接作用するような魔法は精神力の勝負になる。

例えば睡眠の魔法なら眠れといているのに対し、眠って堪るかとはね退けることができる。

もつとも敵の身体に直接作用するような魔法は滅多に成功することはない。

かける方が余程の熟練者か、かかる方が相当油断していなければだ。

「だが最初にいったように魔法には魔法で対抗することが効果的だ  
一人でできないなら魔法を使える仲間を見つければいいんだ

冒険者の多くはそうやって自分の足りない部分を補ってたんだから

よ」

とヴァッツは締めくくることが高杉は最後の言葉を聞いて  
自分の考えが決定的に足りなかったことに気が付いた。

相手は一人とは限らないのだ。むしろ複数であるほうが自然だ。  
なぜ一対一での戦闘で考えてしまったのか それは高杉のこれまでの  
の人生が影響していた。

常に一人でいたために仲間というものを持ったことがなく 想像力  
が働かなかつたのだ。

高杉を焦燥感が襲ってくる、仲間を見つけると言われてもどうすれば  
いいのかわからない。

「――全て自分で対処できるようにならなければ……」

案の定出てきた考えは自分でなんとかすることだった。

長々としたヴァッツの説明を聞いているうちに目的地 ミスルー溪谷についた。

露出した岩肌を澄んだ水が流れている。

ここに住む動物達の水場になっているようで、様々な動物が喉を潤しにきていた。

高杉達も喉が渴いていたために喉を潤そうと水場に近づこうとするがある動物が目にはいり足を止めた。

「あれは…」

目を向けた先には虎のような姿形をした動物が数匹 水を舐めている。

「運がいいな、目的の奴らだ」

前方に見据えるキラータイガー 高杉の初任務が始まるうとしていた。



## ―第十六話― 迷いと見詰める人

そこは酷い惨状だった。

辺りには血が撒き散らされ肉片や内臓が飛び散っていた。

ぐちゃぐちゃになり辛うじてキラータイガーと認識できる死骸が数体横たわっている。

最初は少数だったのが仲間を呼んだのか次々と集まってきたのだ。

周辺に漂う酔いそうなほどに充満する血の匂い、その血貯まりの中心で高杉は立っていた。

――…コイツッ！

ヴァッツは驚愕を抑えきれなかった。 あえて手助けはせず一人で

戦わせたとは言え

少しでも厳しくなったらすぐに手を貸してやるつもりだった。――

匹でも倒せたら上等だと

実力の底を見極め大した奴じゃないとレイナスには報告してあの件については終わるはずだった。

だが蓋を開ければ圧倒的だ。

普段の姿からは想像もつかないほど攻撃的で狂気に満ちていた。

キラータイガーが魔法を使った直後だったろうか

高杉の目つきが変わりその獰猛さを前面に出してきたのは。

タガが外れたように飛び掛ると一方的な殺戮が始まった。

もはやそこには戦いなど何処にも無く、ただ高杉が無感情に振るう暴力だけが支配していた。

獣の死骸など見慣れているヴァッツでも気分が悪くなるような惨状を作り上げた高杉に  
レイナスが妙に気にしていた理由はこれかと理解した。

「余裕だったじゃねえか」

あえて明るく内心を隠すようにヴァッツは言った。  
だが高杉は任務達成の喜びなどなくどこか冴えない表情だ。

「そう見えたか？」

「なんだ？ 違つのかよ？」

「…いや、別にいい」

なにが気に入らなかったのか、やはり浮かない顔の高杉にヴァッツは首をかしげる。

「俺の言ったとおりだったろ、こんぐらい楽勝だった」

「…そうだな」

なぜか気の抜けた返事しかない高杉にヴァッツはどうしたんだ？  
と思いつつも

血を流してこいよと声をかけ、自分は退治した証拠となるキラータ  
イガーの角を切り取っていく。  
他の部分については損傷が激しく金になりそうにはなかった。  
水場で血を洗い流した高杉が戻ってくると少し休憩し、やはり来た  
ときと同じように走って帰る事にする。

「なあ、お前 俺と組まねえか？」

帰り道、お互いに無言で走り続けていたが唐突なヴァッツの言葉に  
高杉は怪訝そうに目を向けた。  
前を向いたままのヴァッツの横顔は茶化しているようには見えず冗  
談を言っている訳ではないようだ。

「俺のいる団隊にも推薦してやるよ、お前の腕なら問題ないし」

「……………」

「お前なら団隊の上位に入れる、そうすりゃ冒険者の活動も格段に  
やりやすくなるはずだ

特に駆け出しならサポートの有り無しは重要だからな」

「…そうだな」

「お前にとっても悪い話じゃないだろ？」

「……………考えとくよ」

ヴァッツの提案は高杉には魅力的な話のはずだが、当の本人はどこか上の空でどうもはつきりしない。

別の事に気を取られあまり深く考えずに返事をしているのがその態度から読み取れた。

そんな高杉にヴァッツは内心で溜息をつきつつ　そうかと応えこれ以上は無駄かとの話は終わりにした。

――腕の立つ奴は大歓迎なのにな

それに首輪にでもなればと思ったんだが…… タイミングが悪かったか

普段とは全く違う戦闘時の凶暴な顔はともかくあの力を野放しにしておくのは惜しかった。

高杉の戦いっぷりを見てつい話を持ちかけたが少し唐突すぎたかと苦笑する。

だがお互いに得のある話ではあると考えていたのでまた折を見て持ちかけるかとヴァッツは思い直した。

そうして城塞都市に着き下外部口を抜ける頃にはすっかり日も暮れ夜になっていた。

「あー、疲れたー　今日はここで解散にしようぜ

お前も報告は明日にしろよ　その角持っていけばエリーゼちゃん

も大喜びだ」

ヴァッツは高杉が担いでいた角を指差しながら言った。

高杉はキラータイガーの角を持てるだけ紐で縛り背負って走ってきたのだ。

おかげで布を当てているとはいえ背中が擦れて少し痛かった。

「明日もヴァッツは来るのか？」

「いや、明日は無理だがまた暇ができたらな

そいつの報酬はお前が全取りでいいぜ、俺はなんにもやってねーし」

「…悪いな」

「いいつて、それじゃまた今度な」

と別れの挨拶も程ほどにヴァッツ背を向けて手をひらひらさせながら行ってしまった。

高杉はしばらくヴァッツの背を見送っていたが、自分も帰るかときライタイガーの角を背負いなおす。

ポツポツと備え付けられてある古ぼけた街灯に照らされた夜道を、高杉は重い足取りで帰っていくのだった。

イリスは居間で魔法ランプをつけて書物を読んでいた。高杉が居間の掃除をして使えるようにしてから、イリスは居間で過ごすことが多い。

ぶっちゃければイリスの部屋は物が多く雑多としており、必要最低限の物しかない居間のほうが過ごしやすかったからだ。

しばらく書物を読んでいるとガタガタつと調理場の方の出入り口が開く音がした。

そこから人が入ってくる気配を感じイリスはそちらに目を向ける。少しすると姿を現したのは高杉だった、たったいま帰ってきたようだ。

「あら おかえり、 ってあなたその格好はどうしたのよ?!」

イリスはランプの明かりに照らされた高杉を見て驚いた。

その姿は血と土にまみれ酷く汚れていたからだ。顔にはどこかで擦ったのか赤い筋がついている。

そんなイリスの驚きをよそに高杉はどこか疲れたような顔を向けると

「ただいま、登録のあとに依頼も受けたんだ……疲れたから今日はもう休むよ」

とそれだけを言いそのまま自室へ行くことと背を向けた。しかしイリスはそんな高杉を呼び止める。

「待ちなさい」

怪我をしているところがあつたら見せなさい、手当てしてあげるから」

イリスは椅子から立ち上がり高杉に近づいていくうちに、雰囲気は朝とは微妙に違うように感じた。

元々存在感の薄い男だがそれに輪をかけて覇気がないように思えたのだ。

「いや、怪我はしていない 服に付いているのは全部返り血だ」

「…それキラータイガーの角よね、なんで登録したばかりのあんたが？」

イリスは高杉が背負っていた角に目を向けた。登録したばかりの新人が相手にするような魔獣ではない。

しかし言いながらも何故高杉がそんな魔獣の角を持っているのかなんとなく察しがついた。

「ああ、これは…」

「どうせヴァッツ（ばか）が調子乗ったんでしょ？」

「……………別に危険な事をするなどは言う気はないわ、あんたは冒険者になったんだし」

「でもね、無駄に危ない事をするのはあまり感心しないわね」

イリスのその口調は少し怒っているようだ。

自分も冒険者を進めた手前、高杉の事が朝から気になっていたのだが、少しそわそわして待ちながら

帰ってきた高杉の姿を見た時は大怪我をしたのかと息が止まりそうになった。

だからそんな気持ちを知らずにさっさと部屋に行こうとした高杉にちよつとむかついた。

しかしそれと同時に感心もしていたのだ。初仕事でキラータイガーを数匹仕留めてくるその豪胆さに。

「気をつけるよ、……………それじゃおやすみ」

だが高杉はそんなイリスの気持ちに気づくはずもなく言葉少なに自室へ引き上げていく。

イリスは再度引きとめようと声を掛けようとするがそれを止めた。

目に入った高杉の背が頼りなく自分が感じた違和感が気のせいではなかったと思えたからだ。

「……………どうしたのかしらあいつ？」

廊下の闇に消えていく高杉のどこか小さくなった背を見詰めながら



心に少し痛みを感じた。

高杉は強い、そう思ったから冒険者を薦めたのだ。

現に初の任務でもその実力を遺憾なく発揮したようだ。

しかしいまの高杉はどうだろう、何か懸念でもあるのかどこか迷っているようにも見える。

本人はあまり荒事が好きではないのだろうか、イリスは自分が必要とするためだけに

高杉の強さだけしか見ておらず、その強さを伸ばさせるために冒険者を薦めたことにどこか気分が重くなっていた。

自室に戻った高杉は着ている服を全て脱ぐと、部屋まで持ってきて

しまったキラータイガーの角と一緒に窓から外へ出しそこに置いておくことにした。血生臭さと臭さが部屋に充満しそうだったからだ。身体も匂いそうだが、今から水浴びをしに行く気力もなく素っ裸のままベッドに転がり込んだ。

転がり込んだベッドからはふわりと微かにイリスの匂いがする。譲ってもらった布団はイリスが使っていた物らしく

当初はイリスの匂いが色濃く残っていたが使っているうちにそれも薄くなっていた。

一度そのことを話したら顔を真っ赤にしたイリスに怒られたのはいつのことだったか。

――…疲れた

魔法を使ってくる相手と初めてまともに戦ったせいか体力を消耗していた。

次から次へと現れるキラータイガー、全てが魔法を使う個体ではなかったが

思わぬところから襲い掛かる雷撃は高杉の神経を削っていった。

対魔獣 対複数 魔法 そして命がけ 経験不足ばかりが露骨に前面にでた戦いだっただけだ。

途中からは何も考えられずただ機械的に腕を振るっていただけだ。終わったあとの気分は最悪だ。一方的になぶり殺した嫌悪感 自分の不甲斐なさ

命を奪った抵抗感とこんな所でこんな事をしているわけのわからなさ マイナスな思考ばかりが入り乱れていた。

冒険者に向いてないんだろつか、他の仕事にしようかとも考えていた。

しかしそうは考えても冒険者をやる理由は金稼ぎだけではなくなっていたのだ。

それはヴァッツが日本という名を聞いた事があると言った事が気になっっていた。

日本へ帰るために情報収集をするなら冒険者は打ってつけだ。

帰れるものなら今すぐにも帰りたいかった。

何かを残してきた訳ではないがやはり故郷への愛着はあったし

離れてから初めて気づくモノがあると云うが高杉も恵まれていたんだなと実感していた。

高杉は何度か寝返りを打ちながら冒険者をやめようかなと続けようかなと

元来の優柔不断振りを発揮し寝入るまで考え続けたのだった。

「フッ！」

早朝、朝特有のしっとりとした空気のなか高杉は眠気を覚ますように身体を動かしていた。

その動きは俊敏で力強くいつもより気合が入っているようにも見える。

昨日の戦いをなぞるように、自分がどのように戦ったかを思い出すようにトレースしていく。

それは問題点を洗い出し修正するための鍛錬だ。特に余裕のなかったときを入念に繰り返し

判断を誤っていたところは今ならばどのように動くかイメージを高めていった。

「……やるしかない……登録料もつたい無いし

高杉は鍛錬を終え、素っ裸で井戸の水を浴びながら決意を新たにしていた。

うだうだ考えはしたが結局は仕事無いし金無いし、情報収集はしたいしで

全てを解決できる冒険者をつけることにしたのだ。

まずは戦いに慣れ魔法に慣れるしかない、その思いが高杉の気をよ  
り引き締めていた。

――どうやら問題は無いみたいね

高杉が決意をあらわにしている様子を家の影からイリスは見ていた。  
イリスからは高杉の後ろ姿しか見えないが、その姿からは湯気が立  
ち上がり

放たれている覇気が離れていても感じ取ることができた。

昨夜の高杉の態度が気にかかり、あまりよく眠れず早朝に目を覚ま  
したイリスは様子を見に来たのだ。

自分の思惑はともかく高杉がどう考えているのか確かめようと思っ  
ていたのだが

気合を入れて鍛錬をしているのを見ると昨日感じた違和感は解消さ  
れたようだ。

――それにしてもなんで裸なのよ、少しは隠しなさいよ！

イリスは胸をドキドキさせながらその心の中で毒づく  
しかし顔を真っ赤にしながらもその瞳は高杉を凝視していた。

この日から高杉は一心不乱に依頼をこなしていく、主に戦闘が中心  
となる依頼ばかりを選び

朝早くから夜遅くまで、ヴァッツがいる日はランクの高い仕事を  
いない日は数をこなす。

それは高杉がランクCになるまで続く事となった。

## ―第十七話― 内緒の話

高杉の朝は早い。太陽の上り始める白々とした朝靄が漂う頃に起きはじめ。

ぼーっとした頭のまま裏庭の井戸にいき冷たい水で洗顔をおこなうと朝焼けの中、いつもの鍛錬で身体の調子を確認しながら軽く汗を流す。

朝の鍛錬を終えると最近の高杉は散歩がてらに朝市に向かうことが多い。

買い物もするので手提げ袋とやはり手提げの付いた円筒状で蓋付きの小型鍋をぶら下げていく。

人通りの少ない通りを歩くと空き地のようなあまり整備されていない広場で朝市は開いている。

そこでは通りの元々のお店の他にも露天や行商が開いており、焼きたてのパンや新鮮な野菜や果物、とれたての卵などが所狭しと並べられ売り子の威勢のよい掛け声が飛び交っていた。

他にも屋台がいくつか並び、外に並べてあるテーブルでは朝食を取っている者達がおりとても賑やかだ。

高杉は朝独特の活気のなかを人を避けながら歩き必要なものを買って行く。

今日買ったものは新鮮な野菜と卵、焼きたてのパンと最後に屋台に寄り持ってきた円筒状の鍋を差し出して野菜のスープをお持ち帰りする。

料理があまりできない高杉は屋台で出来上がったモノを買って帰ることは良くあることだった。

朝市から戻ると調理場で朝食を作るためにかまどに火を入れる。

かまどは元の世界のモノと同じように見えるが火属性水晶の欠片を利用した魔法道具なので数段使いやすい。

火をつけるのにもやはり火水晶原石の欠片を利用した発火装置があった。

このように生活のいたる所に魔法関連の利用がされているので一部は元の世界と同等の利便性があるのだ。

高杉はかまどで湯を沸かしながら、野菜を洗うと刻んでサラダにする。

次にフライパンを暖め油を引き、薄い肉を焼きながら卵を落とすとベーコンエッグのようなモノの完成だ。

他に持ち帰った野菜スープを暖めながら、ティーポットに茶葉を入れて紅茶を入れ始めた。

ティーポットごと持っていくのでちょうどよい濃さになったら茶葉を濾し取る。

簡単に荒い料理しかできないが朝食としては十分だった。

「ふぁーあ、おふぁーよー」



高杉が朝食の用意をしているとイリスが大あくびをしながら起きてきた。

最初の頃はイリスは起きる時間がバラバラだったが最近は朝食に合わせて起きてくるようになった。

膝までしか丈のない短いズボンにシャツをきたラフな格好に、頭には盛大に寝癖をつけている。

スラリと伸びた白い足、引き締まった腰のくびれに少し控えめだが形よく存在を主張している胸、スタイルの良さがよくわかるがお腹をぼりぼりと搔いたりするそのだらしなさで魅力は半減だ。

高杉も当初は目のやり場に困っていたがいまでは気にする様子もない。

「おはよう イリスさん、朝ごはんの用意できてるから」

「ん、先に顔洗ってくる」

とイリスは気だるげに返事をする。と寝ぼけ眼でふらふらと出て行った。

朝食の用意をするのはほとんどが高杉でイリスは全くといていいほど料理をしない。

口には出さないが恐らくは料理ができないのでは？と高杉は思っている。

そのため簡単な朝食は高杉が用意するので二人で取るが昼食や夕食については特に一緒に食べるといふ習慣はなく、たまに時間が合ったら共に食べる程度だ。

「んー、美味しそう 私にも煎れて」

高杉が自分のカップに紅茶を注いでいるとイリスが戻ってきた。その声にこぼこぼとお茶を煎れて湯気の上がるカップを差し出す。

数多の精霊達よ〜 とイリスの食前のお祈りが終わるのを待つて高杉もいただきますと朝食を取り始めた。

朝日が差し込む穏やかな居間で食事は進んでいく。

イリスの食事の取り方はそのだらしない格好とは別にどこか上品だった。

「あんだ、ちよつと仕事詰め込みすぎじゃない？」

イリスの言葉に高杉は うん？つとよく理解できずに顔を上げた。

「仕事よ、仕事 やる気があるのはいいけど そんなんじゃ続かないわよ？」

「最初よりも少なくはしてるんだが  
そうだな、ランクももうすぐCに上がるし 多少要領も掴めたからもつと余裕をとるか」

高杉は少し考えるそぶりを見せたあとに言った。

活動を始めた最初期は焦る気持ちも強く無茶ともいえるスケジュールを組んでいた。

しかしすぐにエリーゼに窘められるとある程度の余裕は取るようにしてはいたのだが、それでも端から見れば十分詰め込みすぎだった。

「あら、あんだもうCランクに上がるの？」

「ああ、いまのペースだと数日中には上がるらしい」

昨日エリーゼが嬉しそうに教えてくれたのを思い出した。  
高杉はいまやウィネツシュ出張所期待のホープだった。

「へえ、やるじゃない 強くなるのはいいことよ

そうね、ランクCになったらお祝いするわよ あんたの奢りで」

「…俺が出すんかい」

「なーに男がせこいこと言ってるのよ、あんたの稼ぎなら気にする額でもないでしょうに

行ってみたいお店があるからそこにするわよ」

高杉の小さなつつこみはあっさり流され、すでに行くお店も決まったようだ。

「わかったよ、Cランクになったらな」

と高杉はいつものことかと返事をした。

実際、駆け出し冒険者とはいえ仕事ばかりの生活のうえランクの高ヴァッツとのパーティでい仕事もこなしているため実入りはかなり良い。

そもそも最近は食事どころか生活費全般を高杉が出しているのだが、無頓着ゆえにたいして気になる事でもなかった。

高杉は食事を終わると後片付けをし、ウィネツシュ出張所へ向かう。  
イリスの方はまだ居間でお茶を飲んでいるようだ。

すでに通いなれた通りを歩き、出張所に着くとエリーゼが笑顔で迎

えてくれる。

今日はヴァッツがないので高杉は受けられる依頼を数種類選ぶとエリーゼと相談するのだった。

「それで最近のあいつの様子はどう？」

イリスは目の前の料理に手を付けながら目の前に座っているヴァッツに話しかけた。

ヴァッツの方はうまそうにエールを口に運んでいる。

すでに日は暮れ辺りは暗くなっていた。二人は共にお気に入りの酒場で夕食を取っていたのだ。

そこは以前に騒動を起こした酒場と同一の店だ。

イリスがヴァッツと二人で話しがいたために夕食に誘ったのだ。た。

「プハーツ！ カーーツ！、おばちゃん！ エールもう一つよろしく！」

イリスの問いかけが聞こえていなかったのか、一気にエールを飲み干したヴァッツは満足そうに口を拭くと追加の注文をする。

「ちょっと、話しききなさいよ」

「うん？ ああ、タカスギのことね やっぱあいつ普通じゃなかったわ

もうすぐCランクになるみたいだが、俺と並ぶのもそう遠くはないかもな

ま、当初は危なかったところもあったがいまはもう慣れたもん

だ  
」

高杉のランクの上がりようは通常より非常に速かった。

エリーゼも当初は不安そうな表情ばかりだったが今では期待と高杉に頼もしさすら感じている様だった。

ヴァッツの言う普通じゃないは文字通り凡人では到達できない者達がひしめく高みへと昇る素質を秘めていることを言ったのだろう。

「ふふ、そう 私の目に狂いはなかったわね」

それを聞いたイリスはやはりどこか嬉しそうに呟くがヴァッツは少し真面目な顔をして口を開いた。

「……嬉しそうなどこ悪いが懸念が無いわけでもないぜ  
説明しにくいのが、あいつはなんとというかたまに酷く残虐的になる  
ことがある

普段の姿からは想像がつかないほどにな、なぜかは知らんが」

「残虐？ タカスギが？」

「ああ、いまはほとんど見せないが 初めのころはちよくちよくそんな姿を見せてたぜ

もしそれがあいつの本質だとしたら………少し気をつけたほうがいいかもな」

とヴァッツは新しくきたエールを口に運んだ。

ヴァッツが高杉と付き合ってみて得た印象はどうにも掴みどころが無いといった感じだ。

普段と戦闘時のギャップもそうだが一番の原因は何を考えているの

かよくわからないことだった。

一見人当たりがいいように見えるがどこか冷めていて人間味が薄い。根が悪い奴とは言わないが、いつの間にかいなくなつてそんな雰囲気か拍車をかけていた。

一方のイリスは俄かに信じられないような顔をしている。

普段接している高杉には当てはまらない物騒な言葉に困惑気味だ。

「あまり想像できないわね」

今朝の様子を思い出しても、イリスから見れば高杉はあまり感情を出さないが言われた事は素直に聞くし穏やかな性格だと感じていた。むしろ戦闘には向いてないのではと不安に思つたりもしていた。

だがヴァッツが言うには戦闘時にはまた別の顔を覗かせるというのだ。

「……むしろいいことかしら？」

どこか闘争心が足りないように感じてたけど戦闘になるとまた違うようね

「そこらへんは追々わかつてくることかしらね、それで他にわかつたことは？」

これまで高杉と戦闘を共にした事はなかったので正直ピンと来ないが、ヴァッツが言っていることは機会があればそのうちわかることかと次を促した。

そんなイリスの声にヴァッツはエールで口を湿らす。

「前に話したことからたいしてわかったことはねえな

親衛騎士と揉めた理由が騎士団の戦女神に不敬な態度を取ったからだっつてのは前に話した通りだが

そもそもがログリーの森で騎士団の討伐隊と共同でマンティコアと戦った事かららしい

んで戦果を上げたつてんで褒賞を貰いに行ったら、あのお嬢さんとばったり会ったつて事なんだと」

ヴァッツの話には高杉自身は話してもいない情報がいくつ含まれていた。

親衛騎士と揉めた理由もだがマンティコアの下りを高杉が口にしたことはない。

ならば何故ヴァッツは知っているのか、レイナスからの情報も含めて自分で調べたからだ。

そしてそれを依頼したのはイリスだった。二人は共通の知人だから高杉を話題に上げていたのではなく依頼主であるイリスへの報告をヴァッツがしていたのだ。

「ログリーの森でマンティコア？ あいつなんでそんなところに」

「さあな、現時点ではタカスギが偶然そこに居合わせていたとしたかわからんな

それ以上はここ（城塞都市）で調べててわかるかどうか……

……そうだ、イリスちゃん ニホンつて知ってるか？」

「……ッ！ ……どうして？」

ヴァッツが突然出した単語にイリスの顔が一瞬わずかに強張るがそ



の変化は傍からは判るほどではなかった。

「冒険者登録の時に、タカスギの生誕地らしいんだがそんな時の様子が少しおかしかったんだ」

「どうもその二ホンってのを詳しく知りたがってるようだったな」

「自分が生まれたところなのに？ その時の様子をもう少し教えなさい」

「そう言われてもな…」

とヴァッツは顎に手をやりながら出張所での遣り取りと高杉の様子を説明した。

話せることは少なかったのだがイリスはそれを真面目な顔で聞いている。

「……とそんなくらいだな、どんな小さな事でも知りたいって感じだったぜ」

何故かはわからん、あいつはほとんど自分のことは喋らねえからな」

「そうね、それに話したとしてもよく嘘をついているわ」

「……いいえ違うわね、何か隠し事があってそれを言わないがためにあたり障りのない嘘を言ってしまったって感じかしら？」

イリスは高杉に何度か高杉自身のことをそれとなく聞いていたことがあった。

その答えはどうにも曖昧で違和感があり、直感だが嘘だと感じる事が多々あったのだ。

「本人が言いたくないってことだろ、隠し事なんて誰にでもあるわな  
それでまだ依頼は継続するのか？」

俺としてはなんでイリスちゃんがタカスギの事を探ってるのかに  
興味があるんだが」

「あら、一緒に住んでる男性のことをもつとよく知りたいなんて自  
然な感情だと思わない？」

…でもそうね、タカスギについては一旦置いていいわ」

目を見て聞いてくるヴァッツに対してイリスはどこかお茶目に返す。  
知り合いを探るなどイリスとしても余り気持ちよくはないのだ。  
ましてや今は一緒に住んでる相手だ。それなりに高杉のことも気に  
入ってはいる。

「…タカスギを使おうとしてるのか？ 並みの奴が相手なら問題な  
いだろうが

やばいのが出てきたら対処できるとは思わんぜ？」

イリスは高杉の話は終わりにしようとしたが  
しかしヴァッツは表情にわずかに真剣味を帯びさせながら続けた。

「使っつてなにによ？ そもそもあいつが私の言う事を聞くとは限  
らないじゃない」

「だから俺に探らせた、弱みでも握りたかったのか？」

イリスちゃんがあいつに何かを期待してるのは傍から見てもわか  
るぜ」

ヴァッツの言葉にイリスの雰囲気少し固くなり漂う空気も僅かに重くなった。

「人聞きが悪いわね、それであんたの言うようなことが出てきたかしら？」

期間も短かったしたいした事がわかるとは思ってなかったわ

……あのねヴァッツ、私があんたを使ってるのは腕がいいのもあるけど

余計な詮索をしてこない所が気に入っているのもあるのよ？」

「…友人として話してるんだがな」

ヴァッツはどこか気落ちしたような表情を見せながら言った。そんな言葉にイリスは少し目を逸らす。

「……タカスギのことはもういいわ、元々本題ではなかったし

頼んでたもう一つのほう、そちらの報告をしなさい」

少し妙な空気になったがヴァッツは軽く息をつくとエールに手を伸ばした。

それを飲み干し喉を潤すと再度エールを注文した。

「わかったよ、アレの有りかはだいたい絞れてるがまだ確証はとれてないな…」

とヴァッツは仕切りなおしイリスに言われた話しをはじめた。

酒場の片隅の席でおこなわれた二人の話し合いはその日の夜遅くまで終わることはなかった。

## ―第十八話― 月明かりの下

イリスは夜の通りをカンテラで照らしながらとぼとぼ歩いていった。ヴァッツの報告を聞いていたら随分と遅くなってしまうた。

おんぼろな街灯はかなり広めな間隔で設置されているうえに、弱い光しか発しておらず夜道を歩くには心許無い。そんな中で夜空に浮かぶ月の明かりがいつもより美しく照らしてくれているのは救いだ。とは言っても既に深夜なので人通りはほとんど無く、いつおかしな奴と出くわしても不思議ではなかった。

ヴァッツが送ってやると言ってくれたが報告を聞いてからは直ぐに一人で考えたくなつたために衝動的に断ってしまったのは失敗だった。

イリスは考え事をしながらも周囲に気を配りながら家路につくのだ。

もうすぐ家に着くところだろうか、イリスがその者達に狙われていると確信したのは。

少し前から自分の後ろを二人の男がついて歩いていた。

しばらく様子を見ていたが全く気配を隠そうともせず、歩きながら後ろを見たときにはニヤニヤと笑みを浮かべた表情が目に入った。

このまま行けば家まで着いて来られてしまうのでここらで追い払っておかなければいけない。

大した奴らではなくただのチンピラであることは、その気配からわ

かっていたのでイリスは溜息をつきつつ振り返った。

「私に何か用かしら？」

振り向いたイリスに男達は少し驚きつつも笑みを深めた。

「お嬢ちゃん、こんな夜中に一人歩きは危ないなあ」

「そうそう、俺らみたいなのがいるからなあ　ギャハハハハ！」

男達が口々に不協和音を奏でる。

こんな低俗な奴らに関わる煩わしさは本当にどうしようもないとイリスはカンテラを足元に置くと腰に下げていた細身の片手剣に手をかけた。

「手加減しないわよ、来るなら腕の一本ぐらい覚悟しなさい」

一切物怖じせずイライラをぶつけるように睨みつけるイリスに対して、男達はやはり不愉快な笑みを浮かべている。

「いいねいいねえ、強気な女は大好きなんだよ」

「おい、こいつエルフだぜ？　たまんねえな、俺はじめてだ」

イリスの睨みなどどこ吹く風か、男達の征服欲を刺激しただけだっ

た。  
それぞれが聞くに堪えない下劣な言葉を重ねていく。  
しかしなぜだろうか、途中から一人だけ様子がおかしくなった。  
先ほどまでの笑みは消え虚ろな目でぼーっとしたかと思うとがくん  
崩れ落ちる。

「っ！ お、おいつ！」

横の男がそれに気づき慌てて起こそうと屈み込もうとした瞬間、何者かに後ろから首に腕を回され身動きを取れなくされた。  
いきなり背後を取られたことに心臓が止まりそうなほど驚く、気配を感じなかった恐怖に汗が噴出し身体が硬直した。

ギリギリと首を締め付ける腕の力は凄まじく息ができずに頭に血が上ってくる。

このままでは死ぬ と直感した男は回された腕を掴んだり掻きまわったりするがビクリとも動かさずどうしようもなかった。

「動くな、抵抗すると殺す」

男の耳元で低い声が響いたあと首の締め付けが少し緩んだ。  
酸素を求めるように荒い呼吸をしているうちに、身体が震えだし足が崩れそうになるが首が固定されているために座り込むこともできない。

「俺はこのまま首の骨を折りお前を殺すことができる

……だが二度とこの近辺には近づかず、今すぐ立ち去るならば見逃してやってもいい」

低い声は徐々に凄みを増していく。

男は声が出せずにパクパクと口を動かしながら必死に首を縦に振った。

「ならばさつさと立ち去れ、そこで寝てる奴も忘れるなよ」

とその声のあと首の締め付けは無くなり男は思わず膝をついた。

だがすぐに慌てながらも目の前で倒れている仲間を引きずるとその場から離れようと必死だ。

足に力が入らず何度かよろけながらも命からがら逃げ去っていくのだった。

イリスはその一連の出来事を見ながらも片手剣から手を離すと足元のカンテラを拾いあげる。

チンピラ達が逃げ去ったあとそいつらを追い払った者が近づいてき

た。カンテラに照らされたその者は見知った顔だったのだ。

「イリスさん、こんな真夜中に一人で出歩くなんて 危ないから控えたほうがいい」

「ちょっと遅くなっただけよ

あんたこそ随分遅いわね、今朝は余裕を取るとか言ってたのに」

見知った顔 高杉の注意にイリスは少し反省するような顔を見せながらもどこか安心したような雰囲気だ。先ほどのこともあるが確かに一人歩きは心細かったのだ。

「少し手間のかかる仕事に当たってな、とりあえず帰ろうか」

高杉は 持つよとカンテラを受け取ると歩きだした。イリスも高杉の横を一緒に歩く。

「あんたがてこずるなんてどんな仕事だったの？」

「ああ、畑荒しのモグラ退治だ なかなか出てきてくれなくてな」

高杉は言いながらどこか疲れたような表情を見せるがイリスは楽しそうに聞いている。

「ふふ、あんたでも相手が姿を見せてくれないとどうしようも無いものね」

「そうだな、熟練者なら何か追い立てる方法でも思いつくんだろう



が…  
そう言う所はまだまだな、畑で出てくるのを待ってたら遅くな  
ってしまった

受けてた依頼はそれだけじゃなかったし」

イリスは 大変だったわねと答えるがやはりおかしそくに笑った。  
畑の真ん中でぼんやりと立ち尽くす高杉が容易に想像できてしまっ  
たからだ。

イリスは笑いながら少し上にある高杉の横顔を見上げた。カンテラ  
の明かりに照らされた横顔は以前より少し痩せたようにも見えるが  
精悍さを増し頼もしく思えた。

そんな事を思いながら見ていると、ふと自分がいま高杉に感じた事  
にイリスは少し戸惑った。

イリスが城塞都市にきたのは目的があったからだ、元々ここには  
知り合いなどいなかったために一人でがんばってきた。いまでこそ  
知り合いもできたがいま感じてるような事を思った事は無かった。  
イリスが高杉に感じた感情は安心感を伴うような頼もしさだったか  
らだ。

この男がそばにいれば大丈夫、この男が自分を守ってくれるといっ  
た安堵感 そんな思いがなぜか胸に湧いていた。

「さっきの奴らのせいかしら？ …でもそう言えばおかしなも  
のね

いつの間にか一緒に住むのも、こうして横を歩くのも自然に  
思えてたわ

こいつって存在感が薄いせいかさそばに居ても違和感がないの  
よね…

それに…

「…ねえ、タカスギ」

イリスが声をかけながら突然立ち止まった。

高杉は少し先を歩いたがそれに気づき、どうしたんだ？と振り返る。

「あんたが家うちに住み始めたころの事、覚えてる？」

イリスは真つ直ぐ高杉を見ながら落ち着いた声で言った。先ほどの  
楽しそうな雰囲気は消えている。

「覚えてるが、それがどうした？」

「あんたは言ったわ、しばらく世話になるって」

「……確かに言ったな」

高杉は少し考えて答えた。あの頃は直ぐに出る事も考えていたので  
そうも言ったが

まさかそろそろ家を出ていけとでも言われるのではと不安を覚えた。  
確かに冒険者としても軌道に乗ってきたが住処の当てなんか全くな  
いのでやはり困ってしまふ。

「しばらくじゃなくていいわ」

高杉はその言葉にどうやら自分が考えていたこととは違うようだと  
安堵するが

しかしそれよりも意味がよくわからずイリスを見返した。

「これから私のそばにいなさい」

そう言い放つイリスの表情はどこか気品があり力強い

そしてその姿は月明かりに照らされ幻想的に栄えており、その美しさをいつそう際立たせていた。

高杉はそんなイリスを見ながら、なんか見覚えのある表情だなーと思うのだった。

## ―第十九話― 上昇と下降

「~~~~~」

夕暮れ時、出張所の前をエリーゼは鼻歌を歌いながら掃き掃除をしていた。その様子は楽しそうで機嫌が良いのがわかる。エリーゼの機嫌が良いのは最近の出張所が僅かながらに持ち直してきている事にあつた。一時は閉めようとさえ考えていたが高杉が精力的に働いてくれているので危機的状况から浮上しつつあるのだ。

このまま高杉のランクが上がり出張所の評判も上がれば冒険者が増え依頼も増え、いつかの活気を取り戻せるかもしれない。そんな諦めかけていた希望もまた少しずつ追えるようになっていた、その為にも高杉を全力でサポートするのだ、とエリーゼは強く思っていたのだった。

実際エリーゼは多少過保護ではあるが高杉のサポートをよくしていた。特に高杉にとってありがたかったのは情報を集めてくれることだ。依頼書には記載されていない詳細な地図を書いたり、魔獣の特徴、弱点やその仕事で気をつけることを調べたりなど、高杉の手間やリスクをできる限り下げようとしているのだ。慣れない土地で慣れない仕事をしている高杉が比較的スムーズに任務をこなせているのはその情報があるからだ。

夕陽を見上げるエリーゼの表情はこれからの事を前向きに考える事ができるからか、とても晴れやかだ。

しかしそんなエリーゼの上向いた思いはこの後にまた急降下する事になるのだった。

「おう、今日は最後にここ行くぞ」

厳つい顔をした男は肩で風を切るような歩き方をしながら、横の痩せ型の男に紙を見せながら言った。

「……………そこは確か女一人しかいなかったな」

と痩せ型の男が答える。

二人のその雰囲気は威圧的で暴力に慣れた者特有の空気を纏っている。対向から来る人々は道を開け真ん中を堂々と歩く二人の前を阻む者など誰もいなかった。

「ちよろいうえに金になりそうだ 出張所のくせに冒険者がいないんだからな」

「……………だがギルド関係だ」

「だからさっさと終わらせるんだよ、時間かけて目えつけられてもつまらんからな」

そこは今日だけで終わらせるつもりだ、俺がやるからお前は後ろで立ってるだけでいい」

敵つい男は言いながらくくくツと邪悪な笑みを浮かべた。その表情はとことん搾り取ってやると言わんばかりだ。二人の男達は本日最後の稼ぎを得るために目的地へ向かうのだった。

その男達がウイネツシュ出張所へ訪れたのは日も暮れた頃だった。エリーゼは書類整理を終えそろそろ今日の営業を終了しようかとしたときだ。ガンツと乱暴に玄関が開かれたことにエリーゼは驚きそちらに顔を向ける。玄関からは先頭にいかにも悪人面といった敵つい男とそれに続き陰気な痩せ型の男が二人入ってきた。

エリーゼが腰を浮かし怯えながらその男達の様子を見ていると、室内を見回しながらシケてんな〜などと悪態をつきながら近づいてきた。

「あ、あのどちらさまですか？」

エリーゼが立ち上がり恐る恐る問いかける。それに対し厳つい男が懐から紙を取り出し、突きつけるように見せながら応えた。

「よお、お嬢ちゃん こいつ、何かわかるだろ？ あんたんとこの借用書だ

かわいいそうになあ、数日前にうちに売り飛ばされてきたんだわ」

「え？ どういう…」

「運が悪かったなあ お嬢ちゃんが金借りてた商会な、あそこうちに借金してたんだわ

おっと、自己紹介が遅れたな

カツォーレ一家のダルバだ 後ろのはザダン 短い付き合いになると思つがよろしく頼むわ」

世間話でもするように話す男に、エリーゼは混乱しながらも徐々にその内容を理解し真つ青な顔をして固まった。

カツォーレ一家とは貧民区でも有力なマフィアの組織だ。そんな組織に出張所の借用書が渡ってしまったというのだ。そしてわざわざファミリーの名前を出してきて脅しを入れてきてるのだ、何か無茶なことを言ってくるのではと不安が増大する。そしてそれは予想した通りだった。

「でだ 俺らが来た意味、わかるだろ？ 金貨十枚 払ってくれるか？」

「ちよ、ちよっとまってください！

金貨十枚ってどういう事ですか?! それにこのあい……ッ!!

「！」

バシツィと室内に張り手の音が鳴り響いた。

慌てながら話すエリーゼをダルバが張り倒しのだ。混乱しながらも横のテーブルに打ち付けられた衝撃で自分は殴られたのだと理解するが、さらにわからないのは金貨十枚と言われた事だ。確かに借金はあったがそんなに借りてはいない。混乱とそれ以上に自分が取り返しのつかない状況に立たされているような恐怖に頭が白くなった。冷たい目をしたダルバは屈むと倒れこんだエリーゼの前髪を掴み顔を無理やり起こした。はたかれた時に切ったのかエリーゼは口からは血を流し苦悶の表情を浮かべている。

「ぐぐだ言っつてんじゃねーぞお？！」

延滞金と手数料が上乘せされるのは常識なんだよ、わかってんのかお嬢ちゃんよお？！！」

「…あ……………」

エリーゼはいきなりはたかれたショックと恐怖に顔が強張り言葉にならない声を上げた。カタカタと身体が震えその瞳には涙を浮かべている。

「どうした？ 払えねーのか ああんっ？！！ なんとか言えゴラア！！！」

いつの間に抜いたのかダルバはナイフをエリーゼの目の前でチラつかせながら怒鳴りさらに強く脅してくる。なんとか言えと言いながらも反論など一切許さないとその雰囲気は言っていた。



「……なら仕方ねーよなーあ!!、ここにあるもん全部売り払って  
それでも足りねー分はお嬢ちゃんが身体で払うしかねーよなあ?  
!」

ぼやけた視界に映るダルバの恐ろしい顔に借金以上に根こそぎ奪う  
つもりなのだと、白くなった頭でもそれがわかり絶望が心に染み渡  
っていく。借金のカタに売られた者の末路など想像に難くない。こ  
の者達にはもはや自分が何を言おうとも通用せず暴力で横暴を通す  
のだと、もはやエリーゼに反論する気力は残っていなかった。元々  
が優しく大人しい性格なのだ、殺意すら滲ませる相手の脅しに完全  
に萎縮してしまっていた

ダルバはその表情に凶暴さを前面に出し凄みを効かせ、怒鳴りつけ  
てエリーゼを追い込んでいく。エリーゼの様子を見ながら 女一  
人なら楽なもんだ と心の中でほくそ笑む。事前の調査から多くの  
時間は女が一人しかいないのはわかっていた、最初からいきなりの  
怒声と暴力で混乱と恐怖を植え付け一気に事を運ぶつもりだったの  
だ。

今回の場合、借金に高利をつけて返させるより多少強引でも一気に  
全てを搔っ攫った方が儲けが多い、出張所の権利だけでもお釣りが  
くるぐらいだ。

相手は既に心は折れたようであとは思い通りにするだけだ。ダルバ  
にとってこんな楽な仕事は他にはなかった、さっさと終わらせて酒  
でも飲みに行くかと既に気持ちは酒場へ飛んでいたのだった。

――……どうして……どうしてこんな……

放心した頭でいまだ賑やかな雑踏の中をダルバにたまに引きづられ、ふらふら歩きながらエリーゼは思った。連れて行かれる様はまるで奴隷だ、いや恐らくは奴隷になるのだらう。返せそうもない高額を吹っ掛けられ搾取され続けるのだ。

これからの事を考えるとどうしようもなくなってくる、そんなエリ

「ゼが思い出したのは冒険者だった父が言った言葉だった。強くなければ守りたい者も守れない。稽古をしている父に幼いエリーゼがなんとなしに聞いた答えはそんな感じのことだったろうか。強かった父がいなかったからこんな事になったのだろうか、父に鍛えられた剣を置いたからこんな事になったのだろうか、守りたい場所を守れないのは自分が弱いせいだからだろうか、答えのない疑問が頭を駆け巡りながらいまにも崩れそうな足取りで歩いていく。

「……そうだ、タカスギさんに出張所が閉まってること教えなきゃ……」

ぼんやりとどこか現実逃避のようなことを頭に浮かべながら歩くエリーゼの目は空ろで、前もよく見えていないようだ。そんな歩き方をしているのだ、道行く人にぶつかりよけた。どこ目えつけてんだ！ と罵声を浴びせられ惨めな心はさらに惨めになった。

「どんくせえなあ、さっさと歩けよ」

ダルバの鬱陶しそうな声が聞こえてくると同時に腰を蹴られ、さらによるけ転びそうなる。すれ違う人にまたぶつかりさらには思わず抱きついてしまった。惨めだった、情けなくて悔しくて我慢していた涙がまた浮かんでくる。

「う、ごめんなさい……」

エリーゼは反射的にぶつかった人に小さく謝り離れようとするが、

次の声に身体が固まった。

「エリーゼさん？」

その声に恐る恐る見上げると、目に映ったどこか戸惑ったような相手の表情に涙がぼろぼろとあふれ出したのだった。

## ―第二十話― 昔の事

「……………カツツオーレ一家……………かあ」

イリスは居間でだらだらと葡萄酒をちびりちびりと舐めながら呟いた。数日前にヴァッツからの報告に出てきたその組織。そのボスのコレクシヨンにイリスが必要とするモノがあるらしい。確証はまだ無いとは言つてはいたがヴァッツはああ見えて慎重な男だ。報告に乗せてきたという事はそれなりに高い角度を持った情報であり、内心では確信しているのだろう。

イリスは溜息をついた、イリス一人では手に余る相手だったからだ。カツツオーレ一家は約十年前から勢力を伸ばし始めた新興の組織であったがいまではマフィアの三大組織の一角にまで成長し貧民区域で名を知らぬ者などいなかった。そんな組織のボスを相手に取引ができる材料など思いつかないし、そもそもがエルフの小娘など門前払いだろう。どのように探しモノを手に入れるかをずっとイリスは考えていた。

イリスが探しているモノ、正確には取り戻したいモノのだがそれはイリスの家系が代々管理していた魔術書だった。その魔術書に記載されている魔法は普通ではない。イリスの故郷である隠れ里にしか存在しない魔法であり、エルフ特有の精霊魔法に”特異な力”を融合した特殊で強力な魔術書だった。

”特異な力”はエルフには使えない代物だったが、大昔にその力の

使い手と協力しながら、力の融合には精霊との契約を上乗せし生み出された物だった。しかしその魔法は強力すぎた、元々精霊との契約上限られた者しか扱えなかったが乱用されることを恐れた当時の里のエルフ達はその守り人にイリスの先祖を選んだのだった。そこからイリスの家系は代々その魔法書を厳重に守りそして伝え続けることになる。現在ではその存在を知る者は一部となり使える者もイリスの家系だけとなっていたのだったのだが…

しかしある日その魔法書は奪われた。イリスはいまでも鮮明に思い出せるその日のその光景が目には焼きついて離れない。

その日の夜、どこから侵入したのか大森林と結界に守られていた隠れ里を少数の集団が襲撃した。その者達の戦闘能力は圧倒的で桁を外れていた、里は燃え上がりエルフの戦士達は次々と倒れていく。祖母と逃げると言われた幼いイリスだったが悲鳴と怒号が飛び交うなか立ち向かうべく剣を取った。遅らばせながらも敵を見つけたイリスが目にした光景は、父が地に伏し母を一突きに燃え盛る炎を背にした血のように赤い瞳を持つ男だった……

…そこからはよく覚えていなかった、その男が放つ異様な雰囲気に応じて身が竦むも、すぐに全身の血が沸騰する程に逆上し 激情に身を任せるまま飛び掛ったことしか。

いつの間に意識を失ったのか、気が付いたときには全てが終わっていた。後から兄に助けられたのだと知るが、その兄も里がある程度復興してからどこかへ旅立っていった。イリスには何も告げずに出て行ったが守り人の家系としての使命を命ぜられたのだと納得した。しかし待てど暮らせど帰ってこない兄にイリスも里を出る事を決める。見送る祖母の悲しそうで寂しそうな瞳に胸を痛めながらも並々ならぬ決意を秘めて。

イリスはギリツと齒を噛み締めると葡萄酒の入ったコップを強く握り締めたあと、一気に飲み干した。あの日の事を思い出すと怒りと憎しみで気が狂いそうになる。村人達の並べられた死体の中に父と母を見つけたときの絶望と悲しみは、夢ではなかったのだと現実を突きつけられ涙が止め処なく流れ出した。悲しくて苦しくて胸が張り裂けてどうにかなりそうだった。泣き叫びながらイリスの胸の奥には憎悪に彩られたどす黒く暗い小さな火が灯ったのだった。

206

イリスには目的が三つあった、兄を探す事、奪われた魔術書を取り戻す事、そして里を襲撃した者達に復讐を果たす事。  
里を襲撃した集団が何者であったかはしばらくしてから特定できた。その集団は有名すぎて時が経っていてもある程度の情報屋ならば遡って調べる事は可能だったのだ。

だが何者であるかを知ってもイリスにはどうにもできなかった、戦力差が歴然だったからだ。そのためイリスはまずは兄を探す事を優先した。兄と共に復讐を果たし魔術書を取り戻そうと考えたのだ。  
しかし兄の足取りを追っているうちに思わぬことがわかった。なぜかはわからないが魔術書はどこかに売り払われたらしいのだ、そして同時に兄の足取りもぶつとりと途絶えてしまった。

迷ったイリスはまだ辛うじて手がかりのある魔術書を優先することにした、兄も探しているはずなのでもしかしたら偶然会えるかもしれないと淡い期待もあったし、それに魔術書が奴らの手を離れているならばその力を自分のモノとすることが出来る。魔術書の力がどれほどのモノかイリスにはわからなかったが、祖母が自分がまとも  
に力を使っていたら…と悔し涙を流していたのと、寝物語に魔術書の  
の伝承を聞いていたのでかなりの物だと予想していた。代々それを  
守り続けてきた家の者として、そしてなによりも復讐のためにも絶  
対に取り戻す必要があったのだ。

しかしだからと言っても兄と二人だけで戦うのは危険なため、探す  
過程で共に戦える人材を見つければと思っていた。だが最悪見  
つからなくとも金で冒険者を雇えばよいのでとくに積極的に探して  
はいなかったが、偶然城塞都市で拾ったタカスギにはもしかしたら  
と期待せずにはいらなかった。

と考えがタカスギに思い当たって別の気になる事を思い出した。

「……ニホンって言ってたわよね、あいつはニホンってところから  
来たのかしら……？」

ヴァッツの話しに出てきたその名前に、イリスは祖母が話す魔術書  
の言い伝えにその言葉が出てきたことを覚えていた。魔術書ができ  
るきっかけとなった”特異な力”の使い手、その者はニホンから来  
たと言い伝えではあったのだ。



「――正確にはヒ・イズル国、二ホン…だったかしら？」

奇妙な手振りに振るう力は、その者曰く”モジダマ”…………

……………わからないわね、あいつもそれを使えるのかしら？

でもそんなの見たことないしヴァッツも何も言っただけじゃなかったわ

そもそもが大昔の話だし、それにあいつはほとんど魔力がなかったわよね…

イリスははじめに考えていた魔術書の手に入れ方から随分と思考が脱線しているのにも気付かず、うんうんと唸りながら伝承を思い出そうと頭を捻り始めていた。いまのイリスにとっては魔術書がどのように作られたかなどあまり重要ではないのだが自分のことを殆ど話さないタカスギに何か関係があるのかと思うとどうにも気になつて仕方がなかったのだった。

「おーい、イリスちゃんいるか？」

考え事に没頭するイリスの思考を中断させたのは能天気な男の声だった。声のした方に顔を向けると勝手にズカズカと入ってきたのかヴァッツが姿を現したのだ。

「あなたなに勝手に入ってきてんのよ？」

「そんな事言うなよ、俺とイリスちゃんの仲だろ？」

「お、うまそうな物飲んでるね、俺ももらっていい？」

イリスの抗議にヴァッツは全く悪びれた様子も無くかわすと、さらにはテーブルにあった葡萄酒とおつまみ代わりなのか干し肉を細切れにしたようなものに目を向けながら要求してきた。

「……………その調理場にコップがあるから持ってきてきなさい」

酒好きのヴァッツに断っても無駄かとイリスは渋々了承する。その返事にヴァッツは喜色満面の笑みを浮かべるとすぐにコップを持ってきてイリスの前の席に座ると葡萄酒をボトルからコップに注ぎ始めた。

「あんだねえ、言っとくけど高いお酒なんだから よく味わって飲むのよ？」

「わかってるってイリスちゃん、俺は酒に対しては常に紳士な男だぜ？」

粗末に扱うようなことは決してしない」

なぜか胸を張って言うヴァッツにイリスは呆れたような目を向けた。こいつは水がわりに酒を飲むような男なのだ、単にその場の乗りで口にする言葉などイリスには到底信じることはできなかつた。案の定、最初に注いだ一杯を美味そうに一気に飲み干すと直ぐに次の酒を注ぎ始めた。

「……………あんだ、なにしに来たのよ？」

やはり呆れたように言うイリスにヴァッツは意味深な笑みを浮かべると言った。

「この間言ったことに確証が取れた  
んで、相手の面を拝むチャンスがあるんだがイリスちゃん行くか  
い?」

「相手ってカツツオーレ一家のボスの事?」

「そつだ、それで急なんだが明日の夜だ どうする?」

ヴァッツの問いに拒否する理由はイリスにはなかった。目的の物を持って  
いる相手の人となりを確認することは重要なことだ、願ってもない提案に  
イリスは頷きさらに詳しい内容を聞き返すのだった。

―第二十一話― それぞれの意識

――はあ、疲れた……

高杉は心の中でそう呟きながら帰宅するために雑踏の中を足早に歩いていた。いつもより早めに仕事が終わったのでさっさと帰って休もうとその足取りも早くなっている。

高杉は基本的に一日で終わるように依頼を受けることが多い。土地勘が無いのと仕事に慣れていないのでそのようにしていたのだが、最近ではそれも解消されてきたのか予定していたよりも早めに仕事が終わることも多くなってきたのだ。

今日の仕事が早めに終わったのは高杉にとっては幸いだった。どうも昨日から体調が良くないのだ。時折寒気が全身を襲い、力が抜けるような感覚を覚える。多少は安定した生活ができるようになってきたので張り詰めていたモノが緩み疲れが出てきたようだが高杉は思っていた。

通りに連なる店を見ながら何か夕食でも買って帰ろうかと歩く。その中には如何わしい店もあるらしく一人で歩いている高杉に女性を連れなおっさんが愛想笑いを浮かべながら寄ってくる。お客さんこの子どう？ 安くしとくよ？ などと言いながら着いて来た。

高杉も男なので別に興味が無い訳ではないが、いま探しているのは食事を持ち帰る事ができる店だ。断りをいれようとおっさんに気を取られたそのとき、歩いてきた人にぶつかってしまった。自分の前方不注意でぶつかってしまったので謝ろうと相手に顔を向けると、見覚えのある容姿についてその人の名前を呼んでいた。

高杉は戸惑いながら自分の服の裾をギュツと握り締め涙を流して見上げてくるエリーゼを見詰めた。その表情から何か悲しいことでもあったんだろうかと思うがそれが何かはわからない。

とりあえず事情を聞こうと口を開こうとしたとき、突然エリーゼが高杉の胸にしがみつき顔を押し付けるように抱きついてきた。

「……………うっ……………うっ……………」

すっぼりと高杉の胸に収まったエリーゼは声押し殺しながらその華奢な肩を震わせた。高杉は軽く動揺しつつもそんなエリーゼを見下ろす。よく泣く娘だとは思っていたが、その嗚咽を堪えるような姿に何か耐え難い事でもあったんだろうと慰めようとしたが、慣れない状況に結局は落ち着くまで待っていることにした。だがしかしそれを許さない者がいたために待つ時間などなかった。

「よお、ニイチャン お前さん何者だ？」

悪人面した如何にもといった敵つい男　ダルバが高杉を値踏みでもするかのようじろじろ見ながら言った。

その男に高杉もエリーゼが泣いている原因はこれかと察する。

「お前こそ誰だ？　取り込んでいるから向こうへ行ってくれないか？」

あえて取り合わないような事を言ってみたがダルバが立ち去る訳も無い。そのまま睨みつけてくるダルバを高杉も見据える。睨み合いがつづくなか、ダルバの後ろにいた痩せ型の男　ザダンも高杉へ殺気めいた視線を向けてきた。

「……この体勢でこられたらまずいな」

日本ではいきなり暴力に訴えてくる事はそうそうないがこの世界ではそうもいかない。高杉はそう考えるとダルバを見据えたまま、いまだ胸の中にいたエリーゼを男達から遠ざけるようにゆっくりと身体から離す。エリーゼが少し名残惜しそうにしながらも離れ、見上げてくる気配を感じ高杉も顔を向けた。涙で濡れ、いまだ瞳をうるわせているエリーゼに高杉はポケットからハンカチ代わりの布を渡しながら言った。

「少し後ろに下がっておいてくれ」

「……………ごめんなさい……………ごめんなさいタカスギさん……………」

高杉の言葉にエリーゼは謝りながらまた涙が流れ出していた。そんなエリーゼに高杉は涙をすくい取りながら わかつてる、大丈夫だとなるべくやさしく伝えると背を向け男達に立ち塞がるように一歩前に出たのだった。

……タカスギさん……

エリーゼは自分を守るように男達との間に立った高杉の背を見詰めていた。思わぬところで会った高杉に安堵に気が緩みつい涙が零れたが、すぐにそれ以上に巻き込んでしまったことに対する申し訳なさが胸に強く湧いていた。

しかしそれでもやはりその背に頼もしさを感じずにはいられない。まるで父の背が発していたような力強さ、それに似たような物を感じ思わず渡された布を握り締めていた。

「なあ、ニイチャン 何か勘違いしてねえか？  
俺達はそのお嬢ちゃんに貸してた金を返してもらおうとしてるだけだぜ？」

そんなダルバの言葉に高杉はエリーゼとこの男達がどのような関係なのか合点がいった。自分も借金取りと間違えられたことがあったので借金があることは知っていたが、それほど追い詰められていたのかと考えつつもそういうえば潰れそうかと聞いた時には固まっていたなどと思い直す。

「いくらだ？」

「はあ？ ニイチャンが払おうつてののか？  
今すぐ金貨十枚、テメエに払えんのかよ？」

高杉の問いに表情を険しくしたダルバが吐き捨てるように言った。その額を聞いた高杉は軽く目を見開く。多少は稼ぐようになっていた高杉もさすがに払えない金額だ。そんなに借金をしていたのかと驚きも生じる。

だがそんなダルバの言葉を否定する声が高杉の後ろから聞こえてきた。

「嘘ですっ！ 確かに借金はありませんでしたが金貨三枚です！  
それについても定期的な返済はしてきました！」

エリーゼの声にダルバの言葉をあっさり信じそうになっていた高杉は我に帰る。エリーゼとダルバ、信ずるに値するは考えるまでもない。



高杉はこれまでの人間関係の希薄さとその性格からか相手の話を信じやすい傾向にあった、会話の機微を読み取ることに慣れていない高杉は現状では交渉事なんかには向いてないのだろう。

「はっ！ あのなあお嬢ちゃん、さっきも言ったが延滞金と手数料が上乘せされてんだ

俺達カツオーレ一家が動くつー意味がまだわかんねえのか？  
そもそもが借金をしたのは teme だろうが、甘ったれてんじゃねえっ！」

ダルバは鼻で笑いながらもファミリーの名前を出して牽制する。はつきり言えば高杉に金貨十枚返すと言われても困ってしまうのだ。だがそれを出す事ができないとわかればこのまま押し切ってしまう。はい。

しかし高杉はカツオーレ一家など知らないので牽制にはなっていない。なかった。

「そう言うことか……ならば俺が借金分、金貨三枚を支払う  
それで終わりにしろ」

高杉の全財産ありつたけを搾り出してなんとか届く額だった。また文無しになるが前と違って職はあるのだ、それよりも世話になっているエリーゼが無理やり連れ去られる方が問題だった。

「おいコラニイチャン？ 話し聞いてねえのか？！

teme の出る幕じゃねえんだよ?! すっこんでる糞ガキが!!」

「お前の一方的な言い分など聞く気はないし引く気もない  
踏み倒すと言ってる訳ではないんだ、受け入れてくれないか？」

ブチ切れ寸前の形相をしているダルバに対して高杉は淡々と応える。  
平行線になるのが明らかかなその言い合いにずっと黙っていたザダン  
も痺れを切らしたのか口を出してきた。

「……………おい、ダルバ この手の無知な怖いもの知らずに  
何を言っても無駄だ」

「あ？」

「……………痛めつけてやればすぐに済む」

ザダンはそう言うとダルバの前に出た。無表情だが殺気を剥き出し  
にしたザダンに高杉もピクリと身体が動く。

「…タカスギさん」

エリーゼは顔を青くしながら小さく高杉の名を呼んだ。道行く人々  
も先ほどから言い合いをしている高杉達に興味を持ち始め少しずつ  
だが人垣を作りはじめている、ダルバはチツと周りを見ながら舌打  
ちを打つ。そんな観衆の中に高杉を知っている者がいた。

「おい、あれってゴンザをやった奴じゃねーか？」

「そうだ、あの黒い髪の奴だろ？」

とそのヒソヒソ話はダルバの耳にも入った。少し前にゴンザが誰か  
にのされた事はダルバも知っていた。酒場での喧嘩だと放っておい

たがその相手が目の前の男とは…と高杉を改めて観察する。  
こちら辺を仕事として担当しているダルバはゴンザ達とも繋がりがあつた。ゴンザ達はカツオーレ一家の準構成員としての仕事もしていたので立場的にはダルバの手下であり、浅くない付き合いだったのだ。

「……………ニイチャン随分と腕に自信がありそうだなあ？  
その奴が言ってるゴンザをノシたつても本当なのか？」

既に殺る気になっていたザダンが怪訝な顔を向けるが、それを他所にダルバは先ほどヒソヒソ話をしていた者を顎で挿しながら言った。高杉は沈黙したままだがそれを肯定と受け取ったダルバは更に続ける。

「ならどうだ？　ここは一つ賭け…みたいなことをしないか？  
賭け？」

「そつだ、ニイチャンが勝ったら全てチャラだ  
そこのお嬢ちゃんにもニイチャンにも一切手をださねえ  
……………だが、俺達が勝つたらお嬢ちゃんに加えてニイチャンも好きにさせてもらつ、どうだ？」

「……………おい、ダルバ！」

ザダンが抗議の声を上げるがダルバは手で制止する。一方の高杉は思わぬ提案に思案していた。こいつらの言う事はいまいち信用できないがこのままでも戦闘になるだけかと、とりあえず話しを聞くことにする。

「内容は？」

「なに簡単なことだ、明日の夜にちょっとしたイベントがあつてなそこでニイチャンがこちらの用意した相手と一戦たたかえばいい腕に自信があるんだろ？ 悪くない提案だと思っただがな」

「……………」

はつきり言つて怪しい事この上なかつた。わざわざ敵の拠点らしきところへ行くなどと危険極まりない。高杉は当然断るために口を開こうとするがそれよりも早くエリーゼの声が上がった。

「タカスギさん！ そんな話し聞かないでください！」

後ろで聞いていてもこの怪しい話には何か罠があると感じたのだから。しかしその叫びにダルバがうるせえ、だまつてろ！ と一喝し睨みつけるとエリーゼは再び顔を青くし押し黙った。ダルバはそれを確認すると高杉の逃げ手を塞ぐために続ける。

「別に断つてもいいぜ？ 困るのはニイチャン達なんだからよだが断つたらここで手前らを潰す、あわよくば逃げても一家で探し出し全力で潰す

あのチンケな出張所も含めてな」

高杉は断ろうとしていた口を噤んだ。自分だけなら城塞都市からも

逃げるなりなんなりすればいいが、エリーゼは違うのだ。そしてこの男達はどうかやらヤクザ的な組織の者らしいとも会話や雰囲気でも像がついていた。詳しくはないがこういう輩はどんな手を使ってでも、それこそ残虐的なことでも平気でおこないしつこく追い込んでくる。そんな奴らが組織立ってくるのに対し高杉一人でエリーゼと出張所を守るなど到底無理だ。

遅まきながら自分は困った立場に立たされている事に高杉は気付いた。

「……………」

「おいおい、さっきまでの威勢はどうした？」

いまさら怖気づいたか糞ガキが？　だが teme は調子に乗りすぎだ  
いまここで殺されるか、明日の僅かな望みに賭けるか　好きにしていいぜ？」

ダルバは黙っている高杉を見くだしながら鼻で笑う。そんなダルバを見ながら高杉は相手の話に乗るしかないかと考え始めていた。現状を打破する妙手は思いつかない、思いつくことと言えばこいつらをここで亡き者にするかエリーゼを見捨てるかといった極端なモノだ。

「……………見捨てる

頭をチラリと過ぎつたその考え、だが高杉はすぐにそれを振り払った。

普通ならそんな事は考えない、考えはしない。先生だって許さないはずだ　と高杉は言い聞かせる。

それにエリーゼには大丈夫だと言ったのだ。ここで自分が引いたらあの娘はどうなる、ずっと泣き続けながら生きていくのか。それこそ師である御剣は許さないだろう。

高杉にとって御剣の教えに反しているか否かは重要なことだった。それは自我の薄い高杉が間違った事をしていないと確認できる唯一の道標でもあった。

「……いいだろう、お前の話に乗ってやる

だが、本当に約束は守るんだろうな？」

「ああ？俺の言ってることが信用できねえっていつのか？」

「できないから念を押してる………そうだな、お前らの言う一家とやらの名に誓え」

「…おいコラ？ いい加減にしとけよ？、あんまハネてつとここで殺すぞ？」

高杉のいい分にダルバは怒りの形相を浮かべている。一家の名に誓うなどそんなに簡単にできる訳が無い、それを高杉は要求しているのだ。

一方の高杉は別に深く考えて言った訳ではなく信用できない奴らに少しでも約束を破らせないようにしたかった。そのためにその自尊心に縛りをつけるために言ったのだが思ったより効果があったようだ。単に小説などからヤクザ者は組の名に誇り持っているとか何とかから引いてきたただけだったが。

「誓えと言ってるんだ、一家の名を出してきたのはお前だろう？  
それとも誓えないほどお前の言葉は安っぽいのか？」

お前は自分の一家の名を利用していただけか？」

ここで引いたら意味が無いと高杉はダルバをきつく見据え重く凄みを利かせた低い声で言った。守られないならわざわざ相手の話に乗る必要はない。これ以上つけこまれるわけにはいかなかった。

ダルバは急に雰囲気が変わり始めた高杉に吞まれまいとしていた。漂う空気が数度下がったような錯覚すら覚え背筋に寒気が走ったのだ。本能的に何か危険だと感じつつもすぐにその考えを打ち消すと、忌々しげに口を開いた。

「チツ！ いいだろう、誓ってやるよ カッツオーレ一家の名に賭けてな

…そんじゃあニイチャンはお嬢ちゃんの代わりについてこい」

「……………明日じゃないのか？」

まさか今から行くとは思っていなかった高杉は内心で動揺する。正直にいつて疲れているし体調もあまり良くないのだ。

「でけえ口叩いたくせにビビッてんじゃねえよ

安心しろ、別に何もしやしねえ 単に逃げられても面倒なだけだ」

「ちよ、ちよっと待ってください！」

とエリーゼは慌てて声を上げた。自分を置いてけぼりに話しが進んでいく事に焦燥感ばかりが募っていた。自分のせいで高杉がどんどん危険な状況に追いやられていくことに恐怖と呵責の念ばかりが強くなってくる。

「……もう、もういいです ……もう十分です」

「タカスギさんと二人で話しをさせてください」

ずっと高杉の背に隠れていたエリーゼは自分から前に出ると、見ることのできなくなっていたダルバの目を見ながら言った。



## ―第二十二話― 気持ちの変化

「……………何故こんな手のかかる事を？」

ザダンは少し離れて何か話しをしている高杉とエリーゼを見ながらダルバに言った。その表情にどこか不満を浮かべている。

「ああ？」

「……………あの男の事だ、ここで殺つとけば済む事だろう？」

「ふん、あいつはカツツオーレー家を舐めてやがる。ゴンザも世話になつたみたいだしな

相応の礼をしてやるのは当然だ

それに明日はあの化けモンの初戦だろ？ 死体役には持つて来い  
つてな

闘技奴隷だつて高いんだ、せいぜい奴には内臓ぶちまけて派手に死んでもらおうや」

ダルバはその顔に陰惨な笑みを浮かべながら言った。もはや手を引けば許してやるような気など毛頭なかった。女は後でもどついでもなる。それよりもゴンザを叩きのめしたこともあるうえ、何よりも一家に対して舐めた態度を取った（ダルバにはそう感じた）黒髪の男が許せなかった。

ならば相応の恐怖と後悔を味あわせてやる必要がある、ついでにちようど良い舞台もあるのだ。恐らくは死ぬだろうがその死も多少の役に立たせて殺してやるか とダルバは考えていた。

高杉は何か思いつめた表情をしているエリーゼを見詰めていた。二人で話しがしたいといったエリーゼの希望はあっさり受け入れられた。最後の別れになるだろうしな とダルバが薄ら笑いを浮かべて言っていたが。

高杉は当然のことながら最後の別れをするつもりはない、だがいざという時のことを考えると口を開いた。

「エリーゼさん、もし明日の夜に俺が戻らなかつたらヴァッツを頼れ  
あいつなら何とかしてくれるだろう

…それと終わるまで出張所には戻らない方がいい、どこか身を寄せられる所はないか？」

その言葉にエリーゼの瞳が揺らいだ。二、三度口を動かすと目を逸らすように俯く。

「タカスギさん……もう、いいんです……」

「…なにがだ？」

「これは私の責任です、それにこれ以上タカスギさんに迷惑……  
かけたくないです……」

「だから、もういいんです……」

「……………」

「……………こんな事に巻き込んでしまって……なんて謝ればいいのか……  
庇ってくださって、ありがとうございます……ごさいました……」

俯きながら途切れ途切れ言うエリーゼの声を高杉は静かに聞いていた。その声はか細く雑踏の騒音に掻き消されそうなほど小さい。助けを求めたいがそれ以上に迷惑をかけたくない危険に晒したくない、その一心で言っているのはよくわかっていた。だが高杉はその言葉に僅かながらも気持ちが揺らぐ。  
悪い癖だった、元々面倒な事は避けて生きてきたような男だ。それに恐怖だつて感じない訳ではない。避けられるモノならばと楽な方へ流されていく癖は師の御剣にも咎められていた事だった。

とそんな高杉の目にある事が止まった。よく見るとエリーゼは渾かに震えているのだ。まるで一人残された迷い子のように、どうすればいいのかわからずただ震えて耐えている。その様に高杉には感じた。

「……そうだな、エリーゼさんだつて怖いよな」

それに気付いた高杉は僅かだが揺らいだ気持ちを感じた。つい先ほど決めたばかりではないか、御剣の教えとそしてこの娘が不条理に

虐げられる行く末を良しとしないことを。

高杉は考える、御剣の言っていた多くの人々の助けになれるとはいまはエリーゼの力になれと言う事なのだろう。自分ではどうしようもなく、震えながらそれを受け入れようとしている目の前の娘の力になる事に。

高杉は改めて俯いているエリーゼを見直すと、言い聞かせるように口を開いた。

「エリーゼさんの言うことは受け入れられない

それに、もうエリーゼさんの問題だけじゃないんだ」

「……………?」

エリーゼは高杉の言っている意味がよくわからずに思わず顔を上げた。

そんなエリーゼを見詰めながら高杉は続ける。

「なんて言ったらいいのか……………俺の内面の問題だ

俺は俺を育ててくれた人を裏切りたくないと思ってる

その……………だから引くことはできない」

「……………よく……………わからないです」

沈黙のあとに返ってきたエリーゼの言葉に高杉は内心で苦笑する。確かにいきなりそんな事を言われてわかる者などいないだろう。

「そうだな、わからないよな

だが確かなことはエリーゼさん一人をあいつらに渡す気はないという事だ」

「ですから私は…」

「俺はエリーゼさんに大丈夫だと言っただ

それにエリーゼさんがそんな悲しそうな顔をするのも見たくは無い

エリーゼさんは冒険者を信じる事も自分の役目だと言っただろう

? だから…」

俺を信じてくれ、言葉にせずともその思いはエリーゼに伝わった。

受け取ったエリーゼは手を口に当てその瞳に涙を浮かべながら高杉の名を呟いた。

「おい！ いい加減にしろ！もう行くぞ…！」

ダルバの怒鳴り声に高杉とエリーゼは顔を向ける、どうやら時間切れのようだ。待ちくたびれたように苛つくダルバの姿がそこにはあった。

その声が高杉は軽く溜息をつくとダルバの方へ歩き出す。そんな高杉にエリーゼはあっと小さく声を上げた。

「タカスギさん！」

エリーゼは思わず名を呼び背を向け歩き出した高杉を呼び止めていた。そんなエリーゼに高杉は肩越しに顔だけ向けると言った。

「大丈夫だ、エリーゼさんこそ気をつけてくれ」

何度目かの大丈夫だと言う言葉、その言葉と高杉が自分に向けた眼差しがエリーゼの胸に染み渡っていく。

エリーゼはダルバ達と共に雑踏の中へ消えていく高杉を見詰めていた。その瞳には相変わらず涙を貯めていたが、しかしそれとは別に何かを決意した意思も浮かんでいるように見える。

……タカスギさん……

貴方は大丈夫だといったけど、貴方に全てを押し付けたくないです

これは私の問題だから、私が何もしないなんてそんなこと……

そう心の中で呟くとエリーゼは踵を返し歩き出す。その足取りは力強くはつきりとした意思を感じさせた。エリーゼの心には借金や出張所など自分の事ではなく、ただ高杉に無事でいて欲しい。その思いだけが強く湧いていたのだった。

早朝、イリスは二日酔い気味に痛む頭に手をやりながら高杉の部屋に入った。物の少ないその殺風景な部屋は主がいないせい、それとも早朝なせいか寒々しい空気を増していた。昨夜のヴァッツの話に高杉も連れて行こうと待っていたが、酒の酔いと眠気に負けて寝てしまったのだ。ならば朝に高杉が出かける前に声を掛けなければと起きてきたが、部屋の雰囲気は昨日から誰も入っていないことを示していた。

「…あいつ、帰ってこなかったんだ……」

初めてのことにイリスはどこか寂しそうに呟いていた。

## ―第二十三話― 握り締めた剣

エリーゼは出張所の自室で一本の剣を握り締め、それを見詰めていた。

昨夜の事を思い出すと、高杉のことが心配でたまらなくなる。今夜高杉は何者かと戦わせられるらしい。

何故高杉がそんな提案に乗ってしまったのか、エリーゼにはよくわかっていた。

――私のせいだ…私が巻き込んだ…

あの人が危険を冒す理由なんて…ない

エリーゼは手に持っていた剣を鞘から抜いた、スラリと透明な音が響く。

その剣身は薄めの朱、手入れの行き届いた刃がキラリと煌めいた。

――父さん…

その剣は父からの贈り物、そのときまだ幼かったエリーゼには似つかわしくない贈り物。

”そいつは中々の一品だ。その剣を扱えるようになったら、共に冒険に行こう”

貰った剣を握り締め、見上げた父は男臭く笑いながらそう言っていた。

投げかけられたその言葉に幼いエリーゼは夢中になった。

認めてもらえれば大好きな父といつも一緒に居られる、朝から晩までいつも剣を振っていた。

だがそれはもう昔の話だ。今その手に握られている剣は手入れはさ



れているが単なる置き飾りだ。

「……父さん、ごめんなさい……この剣を手放します

エリーゼに高杉を助けるために頼れる者はいなかった。

相手はカツツオーレ一家だ、生半可に関われる相手ではない。頼られた方も迷惑だろう。

だからエリーゼは冒険者を雇う事にした、それも高ランクのだ。

そのための資金を得るために大切にしていた剣を、父との思い出、いい思い出も忌まわしい記憶もある剣を売る事を決意したのだった。

エリーゼは剣を鞘に戻すと出かけるために着替え始めた。

普段はスカートを履いていたがピツタリとした細身のズボンに履き替えると、チュニツクのような上着に着替えベルトで締める。

その上からマントを羽織り、スツポリとマントについていたフードを深く被ったのだった。

粗方の準備を終えたエリーゼは剣を携えたと出張所の玄関を抜け階段を下りた。

まずはギルド貧民区支部へ行き、剣の換金と冒険者を探すつもりだった。できればヴァッツが居ればうれしいが居場所が分からないので居ないのであればそれは仕方がなかった。

あとは情報屋に行き、今夜カツツオーレ一家が開くイベントとやらがどこであるのかを確かめるつもりだった。

そんなことを考えながら階段を降りた所で前方から見覚えのある二人組みがこちらに歩いてきていることにエリーゼは気付いた。

「……あれは…」

見覚えのある二人組み、そうダルバとザダンだった。

「うん？ よう、お嬢ちゃん お出かけか？ ちょうどよかったぜ」

エリーゼに気付いたダルバは厭らしい笑みを浮かべると片手をあげて声をかけてきた。

その表情にエリーゼは昨日の恐怖を思い出し萎縮しそうになる。

「な、何か用ですか？ タカスギさんは……」

「ああ？ 俺らの用は決まってるんだろ」

お嬢ちゃんを迎えに来てやったんだろが、感謝しろよ？」

「えっ！？ そんな、約束は…」

「約束う？ 別に破っちゃいないぜ？」

俺がしたのは今日の勝敗についてだからな、いまお嬢ちゃんを連れていかねえとは言ってねーぜえ？

それにどうせあのガキは死ぬんだからよ、かわんねえだろ」

エリーゼはブルツと身体を震わし見開いた目でダルバを見詰めた後に俯いた。

ダルバの口から出た死という言葉、それは高杉がいまどう言う立場にあるのかを再認識させるには十分だった。

そしていま、そんな高杉の思いを台無しにしようとする状況にある。

「……馬鹿だ、私は…こういう人達だとわかっていたのに…」

タカスギさんは出張所には戻るなど言っていたのに…

エリーゼは俯きながら唇を噛み締めた。悔しい、情けない、高杉の足を引つ張りたくない、様々な思いが胸を錯綜する。

どうすればいい、どうすればこの状況を切り抜けられるのか、考えを頭の中で巡らせていると、俯いた目線の端にある腰の剣に目が止まった。

「……タカスギさん、私は…」

エリーゼはキツつと顔を上げると、ダルバを精一杯睨みながら少し震えた声で言い放った。

「私は、貴方達とはいきません」

そしてやはり震えた手で腰にあった剣を握り締めたのだった。

## ―第二十四話― 抗うためには

「チツ、随分と舐められたもんだなあ」

ダルバは自分を睨みつけてくるエリーゼをしばらく見たあとに吐きすてるように言った。

その表情からは笑みが消え、不愉快で仕方がないといった感じで唾を吐くとエリーゼに向かって歩き出した。

「来ないでください！ それ以上来たら…っ！！」

近づいてくるダルバにエリーゼは叫んだ。剣に手をかけ強い力で握り締める。

しかしその威勢とは裏腹に手は震えていた、その震えで剣の鍔が鞘と擦れ何度も小さく音を立てる。明らかに怯えているのが見て取れるその態度にダルバを止めることなど無理だ。

エリーゼの震えはダルバ達に対する恐怖だけが理由ではなかった、剣を握ると思い出す過去の忌まわしい記憶。その記憶はエリーゼの身体を硬直させ罪悪感を無限に湧き立たせる。

それは事故だった、誰が悪いわけではない。だがいまでも鮮明に手に残るあの感觸、父の腕を切り落としたときの生々しい感觸はエリーゼを縛り付ける。

その出来事はエリーゼの心に深く影を落とし、剣を振るうばかりだった生活を一変させた。剣を扱うことが怖くなったエリーゼはそれ以降剣を振ることはなくなっていたのだ。

「そんなエリーゼに ” 悪かったなあ、お前の才を見抜けなくて…”

とそう呟いた父の寂しそうな横顔を忘れることはない。

「来たらどうするってえ?! ああ!」

ダルバはエリーゼの虚勢を吹き飛ばすかのごとく大声で怒鳴りあげた。

そのまま歩みを止めずエリーゼの前に立つと忌々しげに睨みつける。

「…ッ!」

間近に立つダルバにエリーゼは声にならない声を上げた。剣を抜こうにも身体が硬直してそれができない。

睨みつけてくるダルバをエリーゼは青い顔でただ見ているだけだ。

そんなエリーゼの腹部をダルバは突然蹴り上げた。

「……カハッ!」

鈍い音が響いた、いきなり蹴られたエリーゼは腹部を手で押さえ両膝をついた。

腹部を蹴られたために息ができず、声も出せずにその痛みにうずくまる。苦しくて涙が浮かんできた。

両膝をついたエリーゼをダルバは冷たく見下ろす、無表情にまるで

ゴミでも見るような目だ。  
うずくまっただまのエリーゼを更に蹴り飛ばした。  
何度も何度もしつように、自分を守るために丸くなったエリーゼに蹴りを入れていく。鈍い音が何度も響き、エリーゼのくぐもった声が蹴りをいれる度に漏れた。  
路地裏のために人通りは無く止める者もない、極たまに通る者もダルバの異様な形相を見るとそそくさとその場を離れていくのだった。

「……………おい、もうそのくらいにしないか 死ぬぞ？」

しばらく成り行きを見ていたザダンが声をかけた  
もちろんエリーゼを心配したわけではなく金にならなくなることを心配したからだ。

「ハア、ハア、ハア、……………少し甘くしたらつけ上がりやがって」

ダルバは荒れた息を整えながら動かなくなったエリーゼに吐き捨てるように言つと、面倒くさそうに乱れた衣服を整える。

金を巻き上げるだけのただの獲物に舐められたと、それがダルバの逆鱗に触れたのだ。

エリーゼは倒れたまま空ろな目で地面を見ていた。体中に激痛が走りどうなっているのかわからない。高杉を助けにいきたくとも身体が動かずこんなところで這いつくばっていることが惨めでつらかった。

「……… 父さん…痛いよ…」

エリーゼはいつの間にか涙を流していた、父がいなくなっしてからいいことなど一つもなかった。

そしてこれからもつらいことばかりなのだろうと、高杉にも迷惑をかけて、自分はいったい何なのだろうとエリーゼは自己嫌悪に陥っていく。

そんなエリーゼに地面に落ちた一枚の布着れが目に入った。

それは昨夜高杉がエリーゼに渡した布だった。ポケットに入れておいたのが先ほどの暴力で落ちたのだろう。

その布は泣いていた自分に涙を拭くよう高杉から渡された小さなやさしさ、それは暴力に晒され荒んだ心には深く沁みた。

「……… タカスギ……… さん」

エリーゼは思わずその布に手を伸ばした。

ゆっくりと僅かな動きでも痛みが走るが、それでもいまはそれが自分と高杉を繋ぐ唯一の物のように思えた。

もう一度だけでも高杉に会って迷惑をかけたことを謝りたい。せめて無事であることだけでも確かめたいと、その思いがエリーゼの手を動かしていた。

だが、そんな思いごと踏みじめるかのようにその布に足が下るされ踏みつけられた。

「あんま手えかけせんじゃねえよ、なあ?!」

上から苛立たしげな声が聞こえる。

エリーゼはゆっくりと顔を少しだけ上げ、その足の主を見上げたあと、もう一度踏みつけられた布をゆっくりと交互に見る。

「……もういやだ……」

”強くなければ守りたい者も守れない” なぜか父の声を思い出し懐かしく感じる。

父が言ったことはそういうことなのだ、弱ければ全てを奪われ虐げられるだけ……。

「……父さん……タカスギさん……私に……少しだけ……」

エリーゼはフラフラと痛む身体と震える足を叱咤しながら立ち上がる。そしてゆっくりとまた剣に手をかけたのだった。

その剣の鞘口からは普通では気付かぬほど僅かに、朱の淡い光が漏れていた。



―第二十五話― 振り抜くはその意思

高杉は地下の牢のような薄暗い部屋の片隅に座っていた。通路側には鉄格子がされ、じめついた石壁には水滴が垂れており、床にはねずみも這い回るような劣悪な環境だった。

昨夜、あの二人組みに連れてこられたのがここだった。巨大な建物の裏口から地下に降り、いくつかある牢のような部屋の一つにここで出番が来るまで待ったときな と押し込まれたのだった。

「へへ、よう新入り ほとんど眠れなかったようだな」

通路から漏れる明かりしか光源がなく、昼も夜もよくわからない薄暗い部屋の中で高杉に声をかける者がいた。そこには先住人が数人いたのだ。

その者達はみな垢と汚れにまみれ粗末な衣服を着ており、全員が首に首輪のような物をつけていた。中には怪我をしているのか乾いた血のこびりついた包帯を巻いている者もいる。録な扱いを受けていないと思われるその者達は、生気のない表情とは別に目つきだけは異様でギラギラとしていた。

高杉はこの者達がいるために昨晚から眠ることができにくい状況にあった。体調もよくなかったのでできるだけ身体を休めて回復させたかったのだが、ここに来たときに高杉に向けられたそれぞれが放つ鋭い眼光は警戒心を強くさせるのには十分だった。

劣悪な環境に体調は悪化する一方のうえ、寝不足も加わり高杉の意識は朦朧としていた。

気を抜けば意識を失う、そんな状態だが横になるのは危険だった。

ここにいる者達の雰囲気は普通とは違い殺気を孕んでいる。寝てしまえば物を盗まれるだけでなく命が危険に晒されてもおかしくはなかったのだ。

「ケツ、だんまりかよ 可愛がってやろうと思ったのによ」

黙ったままの高杉につかれた悪態は体調とは無関係に寒気を誘うモノだった。

「お嬢ちゃんよお、とことんわからせなきゃ いけねえらしいなあ？」

ユラリと立ち上がり再び剣に手をかけたエリーゼにダルバの苛立ちが増した。これだけ痛めつけてやったのにまだ反抗的な態度を見せ

てくるのだ。ならばとことんわからせてやるしかない。二度と齒向かってこないようにその意思を叩き潰し、立場をわからせ隷従するようその身体に教えまねばならない。そうして置かないと今後も手を煩わせるだけだ。

「……………ください」

だがエリーゼはその言葉を無視するかのように小さく言った。その表情は少し俯き加減のためにフードに隠れて見えない。だが、ダルバの言いなりにはならないとその意思だけははっきりと伝わってきた。

「ああ？」

「その足を退けてください！！」

エリーゼが叫んだ。これまでに無いほどの大きな声に、戦つ覚悟を決めたその意思が声に乗っているかのような。

叫んだその直後、少し身体を落としかと思うと剣が鞘から解き放たれる。横に一闪、僅かに朱色を帯びた剣線がダルバに襲い掛かった。

「くっ！！」

まさか本当に抜くとは思っていなかったダルバは慌てた。しかも剣を振るうための動作が素人のそれではなかったのだ。

鋭い剣尖を避けるためにできたことは、反射的に片足を一步後ろに下げただけだ。

スパツと剣線上に残っていた半身を、片胸から肩へ向けて一筋に斬られた。後ろからザダンのダルバの名を叫ぶ声が聞こえる。

血飛沫が舞い、ダルバは何歩か後ろによるめきながら後ずさりすると、うめき声を上げ、苦悶の表情を浮かべながら傷口を手で押さえる。

凄まじい斬れ味だった。服ごとまるで豆腐でも切ったかのように鮮やかな斬り口だ。

「てめえッ！！！！　こんなことしてどうなるかわかってんだろっ  
な！！！！！！」

ダルバの怒号が響く。流れ続けている血と痛みに立ちくらみを起こしそうになるが、そんな物は瞬時に頂点に達した怒りで捻じ伏せる。剣を持っていたのはわかっていたが、どんくさい女にそんな物を扱えるとは考えていなかった。思わぬ反撃にあったダルバは　ぶっ殺してやる！と、もはやなぶり殺して地獄を見せてやることしか頭になかった。

そんなダルバを気にしていないのかエリーゼは先ほどまで踏みつけられていた布を拾い上げた。数回ほどはたきついた汚れを払いのけると、大事そうにその豊かな胸に押し当てギュツと抱きしめる。

剣を抜き人を斬った、心臓が早鐘のように打っていたが、胸に押し当てた布がそれを鎮めてくれているかのように感じた。

「……タカスギさん、待っててください」

そう心の中で呟くと大切に畳んでポケットにしまう。それはいまのエリーゼの心の拠り所となっていた。

気を抜けば崩れ落ちそうになる張り詰めた気持ちを、必死に繋ぎとめる支えとなっていたのだ。

エリーゼは服の袖で目元をゴシゴシと拭う。

そしてダルバに再び向き合つと、フードの中から睨みつけ抜き身の剣を構えた。

「お金は必ず作って返します」

だからこれ以上、私にかまわないでください……今度は命を斬ります！」

先ほどの一振りは警告だと言わんばかりに言い放つ、そこに震えてばかりいたエリーゼの姿は無かった。

## ―第二十六話― 実戦での戦闘力差

エリーゼは緊張と恐怖でどうにかかなりそんな精神を必死に押さえ込んでいた。目の前で血を流しながらも凄まじい形相で睨みつけてくるダルバを見ていると萎縮し怖気づきそうになる。恐慌状態に陥りそうになるのをぎりぎりの所で食い止めているのは高杉へ対する自責と責任感だった。

ダルバを斬ったと言う事はカツツオーレ一家に喧嘩を売ったも同然だ。いまのこの状況を切り抜けられても自身の身はどうなるかわからない、この都市からも逃げなければならぬと頭を過ぐる。暗澹たる未来を想像すると挫けそうになるために、あえて先のことは考えないよう強く努めた。

もしこれがエリーゼだけの問題ならば戦うことすらせずただ泣いて耐えるだけだっただろう、しかしその背を押したのは良くも悪くも高杉の存在だった。

多少勢いあまって剣を抜いてしまった感があったが、他者一（高杉）の命を危険に晒すようなことになってしまったことが重く押し掛かっていたのだ。自分のことよりも他者への意識が強いのはエリーゼのその性格故だった。自分のために動いてくれた者がいるのに自分が何もせずにはいられない。

なによりもエリーゼは高杉が危険を顧みず、自分のために身体を張ってくれたことを心のどこかで嬉しく感じていた。頼れる者も無く泣いてばかりいた自分の涙を拭いてくれたことに温もりを感じていたのだ。

エリーゼは両の手で構えた剣の握りを確かめた。思っていたよりも手に馴染んでいることは救いだっただ。かなり久しぶりのために上手く扱えるか不安だったが、身体で覚えたことはそう簡単には忘れな  
いらしい。

「……父さん、……私に力をお貸しください」

構えた剣の朱に煌めく頼もしさ、父にもらったこの剣と叩き込まれた剣技が頼りだ。不安は多くあるが、しかしいまならば振るえるとエリーゼは念じるように強く己に言い聞かせた。

「ハア、ハア、ハア……クソッ！」

ダルバは怒りの眼でエリーゼを睨みつけながらも、青い顔をし脂汗を流しながら立っていることに精一杯だった。血が流れすぎたせいかつらくなってきたのだ。

そんなダルバにザダンは近づくと斬られた服の腕の部分を引きちぎり、それで傷口を縛り血止めを行いながら言った。

「……油断しすぎだ、鼠とて追い詰めれば牙を向くに決まっているだろう」

「うるせえっ！！」

怒鳴るダルバにザダンは呆れたような眼を向けながらも手当てを続ける。

だが鼠とは言ったが、目に入るダルバの傷口と先ほどのエリーゼの剣を抜く一連の動作を思い返すと適切な表現では無いなどザダンは考え直した。一連の流れるような動作にかなりの手練れであると思えたのだ。

「……………ただの娘ではなかったようだな あれは一昼夜では身につかん」

「……………」

「……………お前は少し休んでろ、それ以上動くと死ぬぞ」

ザダンの言葉にダルバは反射的に睨みつけるが、その有無を言わさぬ言い様に何度か歯軋りをする

「いいか？殺すんじゃないぞ？」

と吐き捨て少しふらつきながらも下がっていった。

ダルバが大人しく下がったのは、頭に上っていた血も多少は下がり冷静さを取り戻していたからだ。実はダルバは戦闘に関しては素人に毛が生えた程度だった。

暴力は振るうがそれはあくまで一般人に対しての脅しの手段だ、現にさきほどのエリーゼの剣尖など全く見えなかった。本格的な戦闘はザダンの担当であり、そのザダンが有無を言わさぬほどに言ったということはそう言う事なのだろう。



あのエリーゼという娘は剣に關しては並ではない、それを手にしたのならばこれまでのように無抵抗にただ怯えるだけではなく、その手にした牙を存分に向けてくるだろう、そしてそれはダルバを容易に噛み砕く物だということだ。  
なぜこれほどまでにあの娘が豹変したのかはわからない、ただ湧き上がる苛立ちがダルバの意識を蝕んでいた。

ザダンは一瞬、エリーゼに向き直ると改めて観察した。フードの中から覗き込んでくるかわいもんだ、その両手で構えた鋭い剣が無ければだが。

「……隙が無いな」

そう納得すると両の腕を外側に大きく振り払った、仕込まれていたのかジャキツと金属音の後に鉤爪（かぎづめ）が飛び出した。それがザダンの得物だった、その長い腕と鍛えられた細身の体軀はいかにも俊敏そうだった。

「……なぜ実力を隠していた？ 剣が手元になかったか」

「らか？」

「……………」

「……………まあいい　だがこうなった以上、命の保障は無い」

そう言い終わると同時にザダンは飛び出した。その細身の身体通りの瞬発力で一瞬にして距離を縮める。

ダルバには殺すなど言われたが、対峙すればそれは困難に感じたザダンはまずはそれを確かめようとした。勢いそのままにその鋭利な鉤爪で突きを繰り出す。

「シャツ！」

小さく息を吐くと同時に鋭く振るった鉤爪だったが相手には届かなかった。キンツと軽く金属が擦れる音が響く、剣で受け流され軌道を逸らされたのだ。

だがザダンにはそれは予測済みだった、すぐにもう片方の手の鉤爪で突いた。そのまま間断なく両の鉤爪で連続して攻撃を繰り出していく。その長い腕を十分に利用し、鋭くそしてしなやかにまるで鞭でも振るうかのように、鉤爪が怒涛のごとく繰り出されエリーゼを切り刻まんとする。

息もつかせぬほど繰り出されてくる鉤爪をエリーゼは剣で弾き流し続けた。傍から見れば防戦一方であり、いつ致命傷を負ってもおかしくない状況だ。

しかしそれにも関わらずエリーゼはどこか冷静に機械的に剣で受け流していく。

「……この人……」

エリーゼがしばらく受け流し続けていると、ザダンの息が上がってきたのかその攻撃が少し大振りになってきた。

エリーゼはその僅かに大振りになった攻撃を見極め、タイミングを合わせる、ここぞとばかりに剣を力強く振り上げ鉤爪を上へ思いっきり弾いた。一際高い金属音が響きザダンの腕が跳ね上がる。

ザダンの驚愕した表情とバランスを崩し無防備に晒された胸がエリーゼの目に入った。そこを見過ごす手は無い、エリーゼは振り上げた剣を左片手のみ残し持つと、空いた右手で腰の鞘を吊金具から外すしそのままザダンの腹部めがけて振り払った。

「ゴハッッ!!!」

鞘がザダンの腹部にめり込む。骨の折れるような鈍い音と感触、そしてザダンの呻き声が漏れた。腹部への強打に息ができなくなっただのかザダンの顔には脂汗が滲み口から細く息が漏れる。腹を手で押さえながらも血走った目をエリーゼに向けたが、痛みには耐え切れなかったのか膝を着くと痛みを耐えるように蹲った。

「……この人あまり……少なくとも父さんより強くない……」

エリーゼはすぐに蹲ったザダンから距離を取り、素早く鞘を腰に戻すと再び両手で剣を構えた。しかしその表情にはわずかに安堵が浮かんでいる。

「……私、戦える」

久しぶりに振るった剣のうえ、昔やった稽古はいつも父相手か一人だったために他者へ通じるか疑心暗鬼だった。本当に戦えるのか、どれだけ戦えるのか全くの未知数だったために不安だけしかなかった。しかし蓋を開ければ自分の剣は通用するどころか相手を圧倒できているのだ。

エリーゼにとってこの上ない手応えだ。これならこの場を切り抜け高杉の下へ行けると心も躍る。

「もう行かせてください、貴方にはわかったはずですよ」

何かは口にしない、だが先ほどの攻防といまの状況だけで十分だ。内心ではドキドキしながらもエリーゼは努めて冷静さを装いながら言ったのだった。

―第二十七話― その正体は

「ゴホツ、ゴホツ！」

信じられない、咳き込むザダンの表情に浮かんだ感情はその一点につきた。確かに様子見を含めて仕掛けたのだが、赤子の手を捻るのごとくあっさり返されたのだ、しかも手痛いお土産つきでだ。油断したつもりはない、しかし相手は小娘だと心のどこかで下に見ていたことは否めなかった。

しかし実際はどうだろうか、あれほど攻撃を繰り返したにも関わらず掠りもせず、それどころか鉤爪を強く弾かれた直後どのような攻撃を受けたのか見えなかったのだ。あれだけの攻防だったが、自分の攻撃が当たる気がしない、相手は実力の一分も見せず自分は何をされたか分からない。ザダンは直感的に超えがたい差があることを感じ取った。

ザダンはズキズキと強い痛みを訴えてくる腹部を摩る、骨は折れてはいないがヒビぐらいは入っているようだ。もしこれが剣だったらと想像すると冷や汗を掻く。組織の末端とは言え裏社会を渡り歩き、修羅場も数多く潜り抜けてきたその培った勘と経験が目の前の娘は危険だと警鐘を鳴らす。

これまで手強い相手はいたが自分の攻撃を全て見切られた事などなかった。いや、正確には成す術なく一方的にやられたことが一度だ

けあったが、確かそれはどんな相手だったかとふと思い出そうとしてザダンはハツとした。

「……………まさか……………奴らと同類……………」

過去に一度だけ手も足も出せずされるがままに打ちのめされ、地べたを這いつくばった苦い記憶がある。命を捨てたのは相手が興味を無くしただけだ。

そのとき何故か屈辱は感じなかった、それほどまでに差があったからだ。手を出してはいけない奴らを相手にした自分の失敗だとさえ思えた。だがそのときの記憶はザダンの心の奥底にトラウマのごとく深く刻み付けられていた。

それ以来ザダンはその類の奴らを敵に回すことは絶対にしないと誓った、勝てるとは全く思えなかったからだ。

ザダンはゆっくり立ち上がると再び鉤爪を構えた。目の前の娘がそうであるか否か、まだ確証はもてない。ならば少なくともはつきりさせなくてはいけない、今度は様子見ではなく全力でやるつもりだった。

「……………ふう……………」

息を整えながらザダンはジリジリと隙無くエリーゼに近づいていく。チャキッと相手が剣を鳴らす音が聞こえるまでに近づくと、エリーゼの間合いに入る直前でザダンは止まった。

「……………」  
「……………」  
お互いの表情がはつきり見える距離で息を殺し互いに隙とタイミングを計る。重苦しく一秒が数秒にも数分にも長く感じられるようなその空気の中で先に動いたのはザダンだった。

「……………」ハッ！」

素早く低い体勢でエリーゼの足元近くに潜り踏み込むと鉤爪を振り上げた。この至近距離で凄まじいスピードの攻撃だ、だがその鉤爪は宙を切った。エリーゼが身体を反らし紙一重で避けたからだ。ザダンはそんなエリーゼに更に追い込みを掛けた、踏み込んだ足を軸にし勢いそのままに蹴りを放とうとする。

「……………」もらったっ！

反撃を許さぬ鋭いタイミング、そして間合いともばつちり合いザダンは蹴りが入ることを確信した。それと同時に追い討ちの攻撃を瞬時に頭のなかで組み立てていく。その重い蹴りで与える相手へのダメージいかなでここで決めるつもりだ。

だが、そんなザダンの思惑をあざ笑うかのように状況は急転した。

「……………」グウッ！……………」

まさに蹴りが相手にとどくその瞬間、ザダンは肩に強烈な衝撃を受けそのまま後ろへよろめいた。愕然とした表情のザダンは恐る恐る

衝撃の残る肩を見詰める。服に穴が空いており、血が滲んだかと思うとそのまま流れ出した。何をされたかまた見えなかったことに身体が凍りつく。

ザダンは歯を噛み締めながらエリーゼに目をやった。そこには突き出した剣を戻し再び構える姿が目に入った。心なしか涙を浮かべた瞳が印象的だ。

ザダンは確信した。目の前の娘は自分のスピードを優に上回る、それも圧倒的にだ。そのような存在はその手の類の奴らしかザダンには思いつかない。

エリーゼを見詰めるザダンの目には恐怖と怒り、嫉妬と羨望 様々な感情が浮かんで消えていく。はつきりした以上、この娘と戦ってはいけない。手を出したならば切り刻まれるのは己自身だ。

「……………カツオーレー家の遊戯闘館」

「…え？」

「……………そこに黒髪の男がいる」

呆気に取られたようなエリーゼにそれだけを言うとザダンは踵を返した。エリーゼに背を向け肩を推さえながら歩くその表情は何を考えているのか眉間に深い皺が刻まれていた。



そんなザダンを待ち構えていたダルバが怒りを抑えるように言った。

「おい、ふざけんなよ？ でかい口叩いた癖にその様か？」

「……………アレは俺一人ではどうにもならん」

怒りに震えるダルバにザダンは淡々と言った。

「それで、はいそうですかと終わるとでも思ってたのか？」

「……………恐らくアレは”種の特異体”だ、それかそれに近い実力を持っている」

ダルバの眉がピクリと動いた。”種の特異体”その言葉に聞き覚えがあったからだ。

この世界に存在する様々な種族、そのそれぞれの種族の中で極少数だが、その種の平均的な能力を大幅に上回る者達が生まれる。その者たちは総称して”種の特異体”と呼ばれた。

そう呼ばれる者達が現れ始めたのは約二百年程度前だろうか。何故その様な者達が現れ始めたのか様々な説があるが、最有力な説によると原因は当時同時期に現れた圧倒的な力を有する魔族の存在だった。猛威を振る魔族に淘汰寸前まで追い詰められたそれぞれの種族が、生存防衛本能に基づき対抗手段として生み出したというのだ。

ザダンはエリーゼがそれに類すると言っているのだ。種族で言えば”人間の特異体”と言った所だった。

「……………おいおい、なんの冗談だ？ あんな小娘がか？」

仮にお前の言う通りだったとしたらなんで最初から剣を抜かねえ？  
そもそもそんな大層な奴があんなチンケな出張所にいる訳ないだ  
ろうが」

ダルバはあざ笑うかのように言った。信じられないのも無理からぬ  
ことだった。”種の特異体”は稀少だ、多くが国家が有力貴族に囲  
われているか冒険者として名を馳せている。種族によっては表に出  
てこない者もいるが、少なくともこんな都市の片隅で燻っている訳  
がない。

「……………それは知らん、もしかしたら本人は気付いてない  
のかもな」

ダルバとは対照的に淡々と何気なく言ったザダンのそれは核心をつ  
いていたが気付くはずもない。

「おいコラ?! てめえいい加減にしろよ?!」

そんな様子にダルバは怒りを爆発させ怒鳴りあげるがザダンは冷め  
た目を向けるだけだ。

「……………やるならお前がやれ、アレに剣を持たせたのはお  
前だ。俺は手を引く」

「なっ?!……………本気かてめえ?」

それに頷いたザダンをダルバは呆然と見詰めた。手を引くとまで言  
ったことにダルバはあの娘が本当に”種の特異体”であると思え始  
めていた。もし本当ならば話は変わってくる、”種の特異体”は無敵  
ではないが対抗するならば兵隊の数を集めるか、こちらも”種の特

異体”をぶつけるかしかない。

「……………あの娘は黒髪の男の下へいくだろう、チャンスがあるならそのときだな」

呆然とするダルバにその声をかけたザダンは少しふらつきながら歩いていく。ダルバは精神的に受けた動揺をなんとか抑えるとエリーゼを睨むように見詰めた。剣を構えながらもぼんやりとこちらを伺っている小娘があの”種の特異体”であるとはどうしても信じがたい。

だが実際にやりあったザダンが言うことを無視できないうえ、そもそも自分は戦うことができない。ダルバは苛立ちながらも唾を吐くといまは引いてやるかとザダンのあとを歩いていったのだった。

遠ざかっていく二人の背が見えなくなるとエリーゼは全身の力が抜けたようにその場にへたり込んだ。よく判らないがあゝの二人組みは引き上げていったらしい。気が抜けそのまま座り込んでいたのを我慢してエリーゼはすぐに立ち上がるうとする。あゝの二人組みがこの場をはなれたのは一時的なものかもしれないと思うと、すぐにこの場を離れなければと気がはやってくるのだ。

心身ともに疲れているが、それを叱咤し立ち上がったエリーゼは剣に着いた血を懐から取り出した手入れ用の革で拭くと鞘へ戻した。

「……………遊戯闘館」

そこに高杉がいる、エリーゼはポケットから布を取り出すとそれを見詰めた。何かの罫かもしれないが高杉がいるなら行くしかない。布を胸に当て何度か深呼吸をするとエリーゼはそこへ行くことを決意した。

だが行くにしてもその前に情報屋に寄って裏を取るのが先決だと、そう思うとエリーゼは布をポケットに仕舞い歩き出す。蹴られたときのか身体中に忘れていた痛みが走るが我慢できないほどではなかった。

「……タカスギさん、いま行きます」

エリーゼは歩きながらそう心の中で呟くのだった。



―第二十八話― 遊戯園館

そのエントランスホールはとても煌びやかな空間だった。天井からは豪華なシャンデリアが吊るされており、壁は美しく装飾されステンドグラスで彩られている。少し趣味が悪いが高価な調度品が飾られ音楽隊の奏でるゆるやかな楽曲はその場の雰囲気によくあっていた。

その様な空間で葡萄酒を片手に談笑を楽しむ者達はやはりどこか上流階級然としていた。婦人はドレスや宝飾で着飾り、エスコートする男性も仕立てのいいタブレットやサーコートを着込みまるで貴族のように見える。ただ一点だけ異様なのはここにいる者達は給仕係以外はほとんど全員が仮面をつけていることだ、その素性を隠すように付けられている仮面はこの場が彼らにとってあまり相応しくない場所であることを示していた。

「それにしても、よくこんなとこの招待状が手に入ったわね」

どこか疲れたように呟いたのはイリスだった、その姿はやはりドレスアップをしている。薄い化粧を施しいつもは後ろでまとめているだけのプラチナに輝く髪もアップにして華やかさと大人っぽさを醸し出している。胸元を飾るネックレスは少し控えめに輝き、身に付けているドレスはシンプルな作りだが品が良くそれ故に素の美しさを引き立たせていた。誰もが見惚れるような美貌だが、残念なのは目元を隠すように付けられた仮面だろうか。

「姉御に送られてきたものをちょっと細工してな、元があったから

「楽勝だぜ」

いたずらが成功したような笑みを浮かべて応えたのはヴァッツだ、やはり普段とは違い貴族風の正装に身を包み、顔には片目を隠すような仮面を付けていた。

「ああ、あんたんとこの…、あの人顔が広いものね

……………それでこのボスはいつ姿を現すのかしら？　あの趣味の悪いシヨールはもううんざりなんだけど」

イリスはどこか不愉快気と言った。実はイリス達がここに来てからそれなりに時間が立っている。日が暮れた頃にこの巨大な建物に着くと、つい先ほどまで案内された別の場所で用意された食事と酒を口に運びながら催されているシヨールをぼんやりと見ていたのだ。そこで目当ての人物が姿を見せるのを待っていたのだが、一向に現れる気配が無いことに待ちくたびれ、息抜きにエントランスホールへ足を運んでいたのだった。

「ま、確かにイリスちゃんの趣味には合わないだろうな

ここは暇を持って余してる高貴な方々へスリルと興奮をつてな、胸糞悪いがもうしばらくの辛抱だ」

そう言ったヴァッツだったがイリスと同じようにどこかげんなりとしていた。

二人が楽しめないのも無理は無かった。催されている見世物はあまり大っぴらにできる類の物ではないのだ。

ここはカツォーレ一家が所有している遊戯闘館と呼ばれる建物だった。その巨大な建物の内部には闘技場が設置されており、そこで

は凄惨な殺し合いが見世物のごとく催されている。いわゆる闇闘技場と言った所だった。戦う者達の多くは闘技奴隷だが中には借金の片に連れてこられた冒険者や傭兵、その他裏社会の腕自慢などがいた。

振舞われる豪勢な食事や酒に舌鼓を打ちながら、そこから見下ろすように半地下にある闘技場で行われる迫力ある戦いを楽しめるのがこの売りだった。どちらが勝つか賭けをすることもでき、強い闘技奴隷を買い取ることもできるのだ。

最近もつとも人気のあるのが対魔獣との戦いだ。普段見ることの無い魔獣が奴隷や冒険者を惨殺するさまは、暇と退屈と金を持って余し、多少の刺激では満足できない上流階級の人間達にひどく受けていたのだった。

「だが、もしかしたら今日は空振りかもしれないねえ  
すまねえな、無駄足を踏ませたうえ不愉快なもん見せちまって」

申し訳なさそうに言うヴァッツに対してイリスは気にしていないように口を開いた。

「いいわよ、それならそれで仕方が無いわ  
でもまだ来る可能性はあるんでしょ？ 確か最後は少しいつもと違うって言ってたわよね」

「そうそう、いままでに無い魔獣が出るんだとよ  
最北の大地にしかないような飛びつきり危険な奴だとか」



魔獣などに興味の無いイリスだったが、そう言われるとどんなのが出てくるか見てみたい気もしてくるから不思議だ。

「ふーん、よくそんなの都市内にもってこれたわね…」

それじゃそろそろ戻りましょうか、もうすぐそれが出てくるんでしょ?」

そう言うとイリスは闘技会場のある大きな扉の方へ歩き出した。血を見るのはあまりいい気分ではない、しかし目的があつてここに来たのだ。少しでも可能性があるのならばと重い足取りで戻っていくのだった。

暗い地下牢の片隅で高杉は体調の回復に努めていた。時間を追うごとにひどくなる身体の倦怠感や寒気、込み上げてくる吐き気に、ここまで体調が悪化すれば高杉も自分が何か病気に罹っていることを自覚した。この世界と日本では食べ物も水も気候も何もかもが違っている。高杉の身体に抵抗力ができていない未知なるウイルスがいても不思議ではなかった。

高杉は最低限の意識のみを残して、浅くだが眠れるように努力した。日本でそのような事はしたことがなかったが、環境的に追い詰められた今の状況では何もしないよりはマシのように思えたのだ。朦朧とした意識の中ではもうどのぐらい時間が流れたのかは把握できていない。ただじつとそのときが来るまで体力を消耗しないように気を配っていた。

「おいっ黒いのッ!! 出番だぞ!!」

その声に高杉はやつとかと思いつながらノロノロと立ち上がった。黒いの呼びわりされたがそんな事は気にしない、そんな事よりも立ち上がった瞬間に感じた身体の重みと立ちくらみが深刻だった。

自身が自覚しているよりも悪化している。薄れそうな意識とそれによる目のかすみに高杉は本気でまづいと感じ始めていた。

イリス達は半地下の闘技場が展望できる当てがわれていた観覧席に戻っていた。その会場は口型となっており、中央にある吹き抜けの半地下の闘技場を囲み見下ろすように観覧席が設けてある。闘技場に落ちないよう手すりの内側に席があり、十分なスペースにテーブルも設置されゆったりと楽しむことができるのだ。半地下の闘技場から観覧席の高さは数メートルありかなりの落差があるがそれは安全面を考慮してのことだ。決して闘技場から観覧席まで登って来れない高さとなっていた。

イリスは闘技場の方へ目を下ろした。先ほどの試合の敗者だろうか、血まみれとなった剣士風の男が引きづられて行く様子が見えた。周囲も興奮冷めやらずといった感じにざわめいている。

「……人間ってほんとにどうしようもないわね」

イリスは給仕係が持ってきた葡萄酒を口に運びながら、内心で軽蔑するかのようについた。殺し合いを見世物にするなどイリスには考えられないことだ、自然を愛し争いを好まぬエルフ故にその思いは強かった。

別にイリスは人間嫌いではない。里に居た頃は人間の悪い噂ばかりしか聞かずにいい印象など全く無かったが、この都市に来てからはそうではないことを学んだ。ヴァッツをはじめ気に入っている者もで

きた。だが心の根底では人間は総じて野蠻であるとの考えは変わっていない。表面上の付き合いはできても心底分り合えることなど到底でき無いと思っているのが正直な所だ。

「イリスちゃん！ 奴が来やがった！！」

ぼんやりしていたイリスにヴァッツが興奮気味に声を掛けた。その声にハツとしたイリスはヴァッツの示すほうに顔を向ける。

イリス達の居る場所から闘技場を挟んで斜め向かい、遠いが闘技場の正面観覧席にあたるその場所にでっぷりとした男が数名の部下を従え現れたのだ。

遠目だが目の良いイリスはその表情まで見て取れた。吹き出物がある顔に垂れ下がった顎、禿げ上がった頭部と醜悪な容貌をしている。ぶよぶよに膨らんだそのだらしない身体は部下の倍はありそうだが、見栄えをよくしようとしているのかゴテゴテと装飾された高価そうな服を纏い、裏地が真っ赤なマントを羽織った姿はまるで欲の塊であるかのように見えた。

「あれがカツツオーレの…」

「そうだ、デイボロ・カツツオーレ カツツオーレ一家の元締めだ」

イリスは眉を顰め、デイボロ・カツツオーレを見詰めた。はつきり言って近づきたくない類の相手だ。だがあの醜悪な男が目的の物を持っているのだと思うと気分が重くなるのだった。



## ―第二十九話― その組織

エリーゼは暗闇の中、息を潜め建物の影から前方の様子を探っていた。エリーゼの目の先にあるのは巨大な建物を囲むようにある塀だった。位置的には正門から離れた裏側なので人通りは全く無いが、一人の男が塀に対して何か作業をしているのが見える。しばらくするとその男は作業が終わったのか、辺りを見回すようにするとエリーゼの元へ小走りで近寄ってきた。

「終わったぜ ロープを付けてやったから、あとはタイミングを見てそこから上ればいい」

男は小声でエリーゼに話しかけてきた。その者が月明かりに薄っすらと照らされるが、その容姿は影に隠れはつきりとしらない。

「はい、手助けをしてくれてありがとうございます  
少ない報酬なのにここまでしてくれて、なんとお礼を言っているか……」

エリーゼも同じように小声で礼を言うが、男は気にするなど仕草で示す。

「いいって、ギルドの仕事だからな  
その代わり支部へは期待以上の仕事をしてくれたって言うって聞いてくれよな」

「え、ええ……」

ニヤリと笑いながら言う男にエリーゼは曖昧に頷いた。

その男はエリーゼがギルド貧民区支部で紹介してもらった情報屋だった。エリーゼは少ない報酬でどれだけの情報をもたらえるか不安だったが、予想に反して多くの情報をもらえたとえ侵入の手伝いまでしてくれたのだ。

何故ここまで協力的なのか、それは情報屋の男の勘違いにあった。情報屋は常に危険と隣りあわせだ。そのため慎重な者が多く、常連の客はともかく初めての客には金だけでなく、客の素性も考慮に入れて渡す情報を変えてくる。

得体の知れない客に金だけで安易に情報を渡すと、それが原因で自分が危険に晒されることをよく理解しているからだ。

男が勘違いしていたのは、エリーゼがギルドの人間で”ギルドが客”の仕事だと思ったことだ。ギルドは男にとって最も信頼の置ける商売相手であり、そのために恩を売るため報酬以上にリスクを負い協力をしていたのだ。だが実際にはエリーゼはギルドに紹介されたから来ただけであり、エリーゼ個人なのだからギルドは全く関係なかったりした。

なぜそんな勘違いを男がしているかはエリーゼは何となく察していた。最初に男に会ったときに、エリーゼはギルドから（紹介で）来たことを伝えた、そして何者だと問われたときにギルド（出張所）の人間だと伝えた。確かに嘘は言っていない。だが男の認識が伝えようとしたこととは微妙にズレていることはすぐに気付いたが訂正はしなかった。ギルドの名の影響力は非常に強かったからだ。

エリーゼは内心では謝りつつもその勘違いに合わせ情報を多く引き出していた。

「だがここまでだ、俺もアイツラを敵に回したくないからな」

「はい、十分です 本当にありがとうございました」

エリーゼは後ろめたい気持ちを抑すように重ねて礼を言った。

男はその礼に頷いて応えると

「それじゃあもう行くわ

あんたも無理すんなよ、あいつらは加減つてもんを知らないからな」

と言葉を残し闇に消えていったのだった。

エリーゼは少しのあいだ男の消えていったほうを見ていたが、改めてロープの垂れ下がった塀の方へ目をやった。月の明かりに薄く照らされているそれは暗がりのためかとても巨大に見える。

そこを見ながら男に教えてもらった侵入経路を頭の中で反芻する。塀を乗り越え建物の裏口に辿りつくのはそれほど難しくはないはずだ。見回りの警備兵はいるが魔術トラップなどはないはずだと情報屋は言っていた。

問題は内部だ、遊戯闘館には地下牢がありそこに高杉がいる可能性が高いということだ。地下への階段は裏口から少し距離がある、とやはり情報屋からもらった大まかな内部の見取り図を頭のなかで思い出す。

これだけの情報をもらえたことはエリーゼにとって幸運だった。ギルドからの紹介だったせい、男は少し抜けていたが実力のある情報屋だったようだ。



エリーゼはもし上手く収めることができれば、改めてもう一度礼を言いにいくと思ったのだった。

「紳士、淑女の皆様！ 大変お待たせいたしました！……」

闘技場の真ん中に立つ司会らしき男が大声を張り上げて進行しているようだが、周囲のざわめきのために途切れ途切れにしか聞こえない。

そんななかでイリスはデイボロ・カツツオーレを見詰めていた。その眼差しはデイボロの一挙手一投足を見逃さないほどに真剣だった。

「本当にアレを相手にするつもりか？」

イリスとは対照的にヴァッツはリラックスしたように料理を口に運びながら言った。デイボロが来たのならばヴァッツにとっては今日の仕事は完了したのも同然だったからだ。あとはイリスが満足するまで待つて引き上げるだけだ。

「……………」

「残忍で狡猾、人を人とも思わねえ マフィアのボスなだけあつて  
上等な性格してるぜ？」

…それにな、未確認だがやばい噂もある」

イリスはチラリとヴァッツに目を向けた。 ” そりゃあるでしょうよ  
” とその目が言っている。

そんなイリスにヴァッツは顔を近づけると、周りには聞こえないよ  
うに小声で言った。

「ただのじゃねえ、飛びつきりやばい噂だ」

「…何よ？」

ヴァッツは辺りを見回し近くに人がいない事を確認するとさらに小  
声で言った。

「…魔族と繋がりがあるかもってよ その噂に根拠はねえ、だが真  
実味はある

あいつらがたった十年やそこらでここまでノし上がった事を考え  
ればな」

カツォーレ一家には常に血なまぐさい噂が付きまわっていた。マ  
フィアという組織上それは当たり前のことかもしれないが、カツ  
ォーレが他と違っていたのはその噂が飛びぬけて多く凄惨だとい  
うことだ。カツォーレに潰された組織の数は片手では足りない。

「……………」

「カツツオーレが派手にやっても他の組織から潰されないのはなぜか？」

「そんだけの力があるってこつた」

「少し前には潰そうとしていた奴らも大勢いたが、そいつらを逆に喰っちまった」

「それだけの力を持てるのは、強力な後ろ盾がいるに違いないってことね」

「こそ、それが魔族かって噂だ」

「いまじゃカツツオーレに正面切って喧嘩売る奴は貧民区域にはいねえ」

「だからやりたい放題だ 都市側も目は付けてるが、貧民区域だからな」

「よっぽど確定的な証拠がないと動かねえだろうな」

「…そう」

そう呟くとイリスは手に持っていた葡萄酒に目を落とした。思っていた以上に危険な組織であることに内心は穏やかではなかった。イリスは裏社会には詳しくないし興味もない。だがヴァッツの話しに安易に関わる相手ではないということとはよくわかった。

「……相手が悪りいよ、イリスちゃん」

「そんなイリスを見ながらヴァッツはエールの木ジョッキを口に運ぶ。何とかしてやりたいが、正直に言って難しい。カツツオーレは貧民」

区域の裏社会でいま一番勢いのある組織だ。そのボスと同じテーブルに着くだけでも相当の金と根回しが必要になるだろう。と、そんなことを思いながらヴァッツは何気なくデイボロ・カツツオーレの方へ目を向けたが、何かを見つけたのかしかめっ面を浮かべた。

「チツ、ベーリング・リヒターが居やがる」

ヴァッツの吐き捨てるような声にイリスは顔を上げた。

「知り合いがいるの？」

「デイボロのそばに嫌な奴がな」

視線をデイボロに向けたまま言うヴァッツにイリスも目をデイボロに戻した。

「どいつ？」

「デイボロの斜め後ろだ」

長身で金髪を逆立てた、肩に獣の毛を着けた鎧を身に着けてる奴」

「ああ、あれね 何者なの？」

ヴァッツの言う人物を見つけたイリスはその者を観察する、細くつり上がった目は眼光が鋭く唇の片端が少し上がっており、どこか陰惨な雰囲気を持つ人物だった。

「冒険者だ、だが奴は裏専門だがな」

しばらく見てねえと思っただけだが、カツツオーレに雇われてた

のか」

忌々しく言うヴァッツは嫌悪感を隠そうとはしなかった。冒険者とは言ったが同業者とは思っていないし思われたくもなかったからだ。ヴァッツの言う裏専門とはその言葉の通り表では決して扱えない類の依頼、誘拐拉致や侵入暗殺、禁魔術の実験復元などを専門とする冒険者だ。それらの依頼を扱っているのは裏ギルドと呼ばれ特殊なコネや相当の実力がなければ辿りつくことさえできないのだ。

「……………」

「裏専門なだけあってあいつの実力は相当高い、恐らくは特異体つて奴だ」

しかもその性格が手に負えねえ、血を見るのが何よりも好きな外道だからな」

「特異体……あんと同じってわけね」

「いや、俺は特異体じゃない そのなりそこないってレベルだから奴とまともやり合ったら勝てる自信はねえな」

その言葉にイリスは驚いたようにヴァッツに顔を向けた。ヴァッツはSランク冒険者だ。Sのランクに身をおく者は常識の範囲を飛び越えた実力者ばかりだ。そのためにイリスはなんとなしにヴァッツは特異体なのだろうなと思っていたがそれは違っていたようだ。

「……………皆様！それでは本日の大目玉！、その姿、死を纏うは闇からの異形！ついにそれが姿を現します！！！！」

闘技場の真ん中で声を張り上げる進行役の声がイリスの耳の遠くで聞こえていた。

## ―第三十話― 異形

それが姿を現したとき、場内は一瞬静まり返ったがすぐにどよめきとも呼べるような喚声広がっていく。

闘技場への入り口となる重厚で大型の扉が開かれると、奴隷だろうか腰布を巻いただけの屈強な男達が太い綱を引きずりながら出てきた。

綱の先は車輪のついた巨大な檻に括りつけられており、檻の中で赤黒い何かが蠢いている。その檻は明らかに異様な雰囲気を放っていた。多くの者達が息を飲みソレから目を離せない、禍々しい空気が檻の中から漏れ本能に恐怖を訴えてくる。

だが観客達は自分達が安全な所にいる安心感からか、すぐに感嘆と期待を口にし始めた。早く檻から出せ、どれほどの力を持っているのか、怖いもの見たさの期待と好奇心は膨れ上がっていった。

「マジかよあいつら、あんなモン持ち込んでやがんのかよ…」

周囲の反応とは全く別にヴァッツが呻くように言った。

屈強な男達に引っ張られ出てくる檻の中で、蠢いているそれをヴァッツは過去に一度だけ見たことがあったからだ。

それは数年前、複数の冒険者の団隊において合同で行われた魔帝国ゾルダディスへの潜入作戦。未踏地域の調査団へ駆け出し間もないヴァッツも後方支援として参加していた。だがその作戦は呆気なく失敗に終わる、国境付近に設置されたベースキャンプが壊滅したか

らだ。いたる所で火の手が上がり、煤や泥だらけになったヴァッツは揺らめく炎に照らされたその化け物を呆然と眺めるしかなかった。いま目の先にいるソレは確かにあの時、あの地獄絵図を作り上げた化け物と同種だ。駆け出して怖い物知らずだった頃のヴァッツに現実をつきつけた苦い記憶が浮上していた。

「ぶほほほほほ 驚いとる、驚いとる！ きゃつらワシのペットに驚いとるぞー！」

「はい、旦那様 場内の反応は上々かと」

デイボロ・カツソーレはその巨体を揺らし愉快そうに笑いながら手に持っていた葡萄酒を飲み干すと、今度はテーブルに並べられていた肉料理にフォークを突き立てる。そしてそれを口に運ぶとクチャクチャと音を立てながら食べ始めた。横に仕えていた老執事がさり気無く葡萄酒を注ぐとデイボロはそれを手に取り口につけた。

「ふん、ゴミどもが」

いまの内にせいぜい楽しんで、いずれ一匹残らず消してやる」

二杯目の葡萄酒を飲み干したデイボロの表情について先ほどの愉快そ



うな雰囲気は無い。感情の起伏が激しい主人に慣れているのか、老執事は無言で再度葡萄酒を注ぐ。

「おい！ ワシのかわいいデミちゃんにも今日からたらふく食わせてしっかり育てるよ！」

姫様が来るときにはその尖兵とならにやあいかならな！」

「はい、旦那様 おっしやる通りに」

ディボロの怒鳴り声に老執事は恭しく頭を下げる。それにディボロは鷹揚に頷くと再びテーブルの料理に手をつけ始めた。

山盛りになっている皿を持ち上げると一気に口にかきこんでいく。口に入りきらなかった料理をボロボロと落としながらも構わずグツチャグツチャと咀嚼するのだった。

「……………ここに現われたるは最北の魔獣、デミダーモン！」

身の毛もよだつこの姿！まずはその強さを克蘭ククラスの冒険者相手にお見せいたします！！！」

闘技場の中央に立つ進行役はそう声を張り上げると駆け足で退場していく。その様は早くここから離れたいと気が急いているのがよくわかる。

進行役が退場すると、屈強な男達は今度は檻の扉に括りつけられたロープを引き始めた。ガチン！とつかえ棒のような留め具が外れ、ゴゴゴと重厚な檻の扉が半分程度開いたところで、男達もロープを投げ出し我先にと駆け足で闘技場から逃げ出す。

少しするとその重厚な扉に赤黒い手がかけられた。鋼鉄のような爪は鋭く伸び、丸太のように太く赤黒い腕には文字の刻み込まれた腕輪が付けられている。重厚な檻の扉を片手で押し開けながら、赤黒いその化け物はゆっくりと外へ一歩を踏み出した。

「な、なんなのよ……あれ……」

イリスは唇を震わせながら呟いた。陶磁器のような白い肌がさらに色を無くしている。

それほどまでにその異形は恐ろしい姿をしていた。まったく毛の生えていない後頭部は長く出っ張っており、ノツペリとした顔には目も鼻も無く異様に大きな口から涎をダラダラと垂れ流している。体長は3メートル弱はありそうだろうか、全身は赤黒く前傾姿勢に太く長い両腕をダランとぶら提げており、首と両腕両足に文字の刻まれた輪っかをつけていた。

「最悪だ、もしアレが何かの拍子に暴走したら誰の手にも負えなくなるぞ？」

「わかってんのかこいつら」

ヴァッツは吐き捨てるように盛り上がっている周囲を見渡しながら

言った。己が身をもって化け物の恐ろしさを知っているだけに無責任に盛り上がる周囲に苛立ちさえ覚える。

「…あの両手両足と首に付けられてるのは”従属の拘束”かしら？あれだけの数を付けて、やっと押さえ込める化け物を持つてくるなんて異常よ」

”従属の拘束”とは強制的に相手を従わせる魔法具だ、主に奴隷に對して使われているが魔獣を生け捕りにするときなども使用されていた。強力な威力を持ち、基本的に一つ付けさえすれば事足りるがそれを複数付けなければならぬということは、それだけ力の強さを示していた。

「そうだな、拘束が外れないことを祈るだけだぜ…」

「相手は冒険者って言ってたかしら？ あんなのと戦わされるなんて同情するわね」

「戦いなんてならねえよ、一方的な虐殺だ」

あの化けモンの強さを誇示するためだけに一人の命を使おうってんだ

イリスちゃん、こいつらがどういう奴らかよくわかっただろ？」

「……………」

ヴァッツはイリスがカツツオーレに関わろうとしていることをよくは思っていなかった。だが口で言っても恐らくはイリスの性格的に受け入れられないだろう。ならば相手がどういう奴らかを実感させる一つの手としてここに連れて来た。できれば思い留まってほしいと心の底では考えていたのだ。

——わかってるわよそんなこと

でもね、私にだって引けない理由があるのよ

ヴァッツの言葉にイリスは心の中で反論するがそれには口には出さなかった。意味のないことであつたし、何より拘る理由を説明するのもあまり気が進まない。

そうしているとデミダーモンから対向に位置する扉が開かれた。対戦相手の登場のようだ。

観客達はいつせいにその扉に注目し、哀れな生贄の姿を確認しようとする。その多くは期待の視線だが、中には哀れみと同情も多少は混ざっていた。

イリスとヴァッツも周りと同じように開かれた扉に目を向けた。出てくる者がこれからどうなるのか容易に想像できるため、胸が痛くなるがどうすることもできない。ただ何も考えず向けていた視線がこのあとすぐに見開かれることになるとは予想もしていなかった。

「えーと、ここかな？ 副隊長の言ったところって」

とある酒場の前に立った若者はそう呟きながら酒場を見上げた。若者は作りのしつかりしたシャツとズボンを着ており、腰には太いベルトに剣をぶら提げている。どこにでも居そうな格好の若者だが、なぜか相応の手練のような感じをさせていた。

「副隊長もタカスギさんの居場所を知ってるなら教えてくれてもいいのに」

「……相変わらずケチだなあ」

若者は何かぶつくさと愚痴をいいながら酒場の扉を開くと中に入っていくのだった。

## ―第三十一話― 餌

薄暗い通路を兵士のあとについて高杉は歩いていた。その顔は脂汗が滲み青白く、足取りもどこかおぼつかない。

しばらく通路を歩き少し大きめの扉の前に着くと兵士が立ち止まり、その扉の前で警備をしていた者と何かを話し始めた。

高杉はぼんやりとした頭でその光景を眺める。ここまでどこをどう歩いてきたかも頭には全く入ってこなかった、ただ薄れそうな意識の淵で何も考えられず、地に足が着いていないようなそんな感覚に陥っていた。

「そろそろお前の出番だ！ 希望の武器があるなら言え！」

その声が高杉は生気の無い表情で兵士の顔を見ながらその問いを反芻する。何かを聞かれたようだが耳を素通りしよく理解できないが辛うじて武器という単語は理解できた。

「――武器……？」

「……俺は武器は使わない」

とそれだけ呟くとそのまま黙りこくってしまった。口を開くのも億劫だったのだ。

「大丈夫かよこいつ ……少しは盛り上げろよ?!」

兵士はそう言うと扉の前へ高杉を押し出した。押されるままに扉の前に立つ高杉だったが、ただ目の前の重厚な扉をぼんやりと眺めているだけだ。

そうしてゆつくりと扉が開かれていくと、差し込んできた強烈な光に高杉は思わず目を細めた。光の先からざわめきのような喚声が耳に響くがどこか現実味が無い。

「おい！ さっさと行け！ 化けモンが来るだろうが！！」

兵士はそう怒鳴ると同時に高杉の腰を蹴り飛ばした。その衝撃に高杉はよろめきながら歩き、照らされたその舞台へ足を踏み入れたのだった。

扉からよろめきながらその男が出てきたとき、注目していた観衆にはどこか失望とも言えるような微妙な空気が漂った。

その男の格好は薄汚れた麻色の服、薄灰のズボンにブーツと質素な服装であり、とても腕がありそうな冒険者の装備には見えなかった。観衆は化け物の強さを見たいのだ、ならば相手もそれなりに強くなければ盛り上がらない。期待していたのは屈強な歴戦の冒険者だったが、出てきた男はどう見てもそうは見えなかった。

「なんだあの男は？ あんなのではすぐに殺られてしまうぞ？」

「そうねえ、でも前座みたいなものでしょう？ 次から強い人が出てくるんじゃないかしら？」

「にしてももう少しマシな奴を用意できなかったのか、あれほどの魔獣相手だぞ」

と観客は闘技場に出てきた男を見下ろし馬鹿にしたような口調で不満を並べている。

イリスはそんな周囲の喧騒が耳に入らないほどに困惑していた。目の先にいるデミダーモンの対戦相手として出てきた男から目が離せない。見覚えのある黒髪に以前自分が買って来た服を着ている、間違いなくその男は同居人の高杉だった。

「……………なんでアイツが出てくんのよ？」

「ありやタカスギか？ こんな所でなにやってんだ？」

思わず立ち上がり覗き込むように闘技場を見るイリスの声とヴァッツの戸惑いの声が重なった。

二人にはなぜ高杉があんなところにいるのかさっぱりわからない、ただただ驚きと混乱ばかりだ。

「ちよっとどっついうことよっ！、ヴァッツ、あの馬鹿になにさせる気！？」

イリスは興奮気味にヴァッツを問い質した。どうやらイリスはヴァッツが高杉を連れてきたと勘違いしたようだ。

しかしヴァッツには身に覚えの無いことなため首を振って応えるしかない。

「いや、わりいが俺は何も関与してねえ イリスちゃんこそ何か聞



いてないのか？」

「知らないわよ、昨日だって帰ってこなかったし

…あの馬鹿、どういうつもりなのよ！」

高杉を見詰めるイリスの表情は一見は変わっていないようだが、よく見れば焦燥と不安が滲んでいるのがわかる。

「……まずいな、ハンデがあるとは言えデミダーモンはタカスギじや厳しいぞ

って言うかやばくねえか……イリスちゃん頼むから変な気おこすなよ？」

イリスの様子をヴァッツは横目に見ながら思わぬ方向へ状況が転がり出したことに危惧を抱き始めていた。

高杉には周囲の地響きのような喚声もどこか遠くに聞こえていた。頭がズキズキと割れるように痛み吐き気が酷い、体調の悪さに立っているのもつらい状況だった。意識が薄れ身体を横たわらせた欲望に駆られる。

――…あー、なんか吐きそう

というかここは…なにをすれば…

高杉は意識が遠くなりすぎたせいかとどこどころ記憶が飛んでしまっていた。頭が回らず自分がなんのためにここにいるのかよくわからない。目の先にはなにか赤黒い人間のような生物があり、ただそれをぼんやりと眺めているだけだ。

――なんだあれは…？

ぼんやりと眺めていたソレは前傾姿勢に両腕を前にダランとぶら下げ、ゆっくりとこちらに近づいてくる。徐々に近づいてくるソレは明らかに異様だった。

陰気を身体中から滲ませ見る者に恐怖と不安を植付ける。闇や死など負を連想させる異形に高杉は悪寒を感じながらもどこか現実感が無かった。

遠めにはパツと見てわからなかったが異形が近づいてくる内に、高杉は少しずつ見上げるような姿勢になっていった。

――まるで巨人だな

高杉はそう思いながらもどこか他人事のように、珍しいものでも見るような目で見ていただけで警戒心の欠片も無い。

いよいよ間近に立った赤黒い異形の巨人、高杉はそれを不思議そうに見上げる。自分の背丈をゆうに超える、このような生物など見た

ことが無い。赤黒い巨人の方も前傾姿勢なのをさらに折り曲げ高杉を覗き込むようにそのでかい顔を近づけてきた。

「目と鼻が無いな、見えてるのか？…それにしてもこれは一体

ッ！！！！

と、高杉の意識が一気に引き戻された。自分は今何をしている、こいつはなんだ？！と頭を混乱が支配する。それと同時に緊張感が爆発的に跳ね上がり汗が噴出した。目の前には目も鼻も無くてかい口みみの顔、禍々しい風貌をもつ異形の巨人に寒気が走り全身が粟立つ。なぜこんな化け物が近くにいて、なぜ無防備に接近を許した、早く離れる、焦りばかりが先行するがその意に反して身体は重くすぐに行動に移せない。

「…………ア…………ア…………ア…………ア…………ウウ」

高杉の目と鼻の先に迫った化け物から声にもならない呻き声が漏れた。高杉は歯を食いしばり目を反らしたくない衝動に耐える。

するとその化け物のでかい口が開き高杉の目一杯にその口が広がる。涎がダラダラと流れ落ち獣臭に腐った肉の匂いが混じったような生臭い息が高杉の顔を撫でた。

こいつは自分を喰らう気だ、とつさに悟った高杉は重い身体を叱咤し横に飛ばすようにするが、しかしガクンと膝が折れ思わず地に手を付いた。

「クツッ!!」

高杉の焦りが瞬間的にピークに達した。力が入らず思ったように動かない身体にもどかしさを感じる。それでもこんな奴に喰われてたまるかと残った足とついた手に力を入れ必死に逃れるように横に転がった。

転がったところですぐにガチン!と歯を噛み鳴らすような音が聞こえ、高杉はすばやく体勢を整えると異形の巨人に目をやる。すんでのところ躲けたようだ。異形の巨人は歯を数度噛み合わせながら、獲物を口にできなかつたことに気付くとゆっくりと高杉の方へ顔を向けた。

「ハア!、ハア、ハア…」

高杉はまだほとんど動いていないのに息が乱れ荒くなっていた。こちらを向いた異形の巨人と対峙しながら呼吸を整えようとする。この化け物が放つ禍々しい空気はこれまでに経験したことがない。その雰囲気だけでこの化け物が恐ろしいほどに危険な相手だとわかつた。

「……こいつがああ借金取りが言っていた対戦相手とかいう奴か…  
くっッ! 人間相手じゃなかったのか

高杉の焦燥感が加速していく。体調が悪化し思い通りに動かせないほど弱った身体、尋常ではない空気を持つ異形の巨人と予想外のことが重なりほとんど余裕がなくなってきた。

エリーゼのことを思うと負けるわけにはいかない。だが人が相手ならまだやりようがあったが相手は見たことも無い異形の巨人だ。

「……エリーゼさんすまない、これは駄目かもしれない…」

緊張からか体調の悪さからなのか、湧き上がる嘔吐感を我慢する。病は人の心を弱くするが、その通りに急速に萎えていく気力、弱気が心を蝕んでいく。

高杉はエリーゼの泣き顔が浮かんで消えていくなか、痛いほどに早く激しく打っている心臓の鼓動を感じていた。

「ぶほほほほほほ、避けたぞ、避けたぞ」

大概の者は萎縮してすぐに喰われるもんだが、あの黒い奴はなかなかの胆力じゃ

「おお、そう思わんか？ベーリング」

デイボロは愉快そうに言いながら自分の斜め後ろに立っているベーリング・リヒターに言った。

その問いにベーリングはどこか興味が無さそうにしながらも応える。

「さあ？、そうかもしれないですねえ」

ですが拘束をつけてるとは言え、デミダーモン相手ですからすぐに終わるでしょう」

「ぶほほほほ そんな事わかつとるわ、餌の割にはじゃ

あの黒いのは前菜、メインデッシュはパーティーじゃからの」

今夜のデミダーモンの相手は高杉のほかにパーティーを組んだ複数相手が予定されていた。メインはあとのパーティー戦だ、高杉は単なるデミダーモンの準備運動兼餌としてあてがわれただけにすぎない。

「じゃが全く動かんで喰われても客が白けるだけだからの

誰が連れてきたかは知らんが、あの黒いのは奴隷共よりは使えたの」

とデイボロは上機嫌に葡萄酒を口につけた。元々初戦に戦いの盛り上がりなど期待していない。単にデミダーモンの食事風景でも披露して、まずはその凶暴さと残忍さを刺激的な見世物としたただけだ。

「ベ어링もデミちゃんとか戦いたくなったら言う方がいいぞ

お前ならそこそこ戦えるじゃろ？」

「…機会があれば」

デイボロのどこか馬鹿にしたような言いようにベ어링は短く応えた。

「……フンツ、魔族の豚が

ベ어링は内心でそう吐き捨てるとデイボロに向けていた暗い瞳

を闘技場へ移すのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4472n/>

---

生き様の在り処

2012年1月5日01時13分発行